
起きたまま、眠る

色堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

起きたまま、眠る

【Nコード】

N0482M

【作者名】

色堂

【あらすじ】

畑上くん^{はたかみ}が亡くなったらしい。

死因は他殺。犯人は、

まるで夢のようなそんな出来事が、私達を壊すきっかけになったんだと思う。

1、起きたまま見た夢

畑上くんが亡くなっはたかみたらしい。その情報は午前一時に佑月からのメールでわたしに届いた。

わたしは素直に驚いた。けれど正直な話、畑上くんとは高二の時同じクラスだったというだけで、特に関わりがあつたわけじゃないし、別に思い出があるわけでもなかったから、その短い文章はリアリティの半分も与えてはくれなかった。

原因は分からないんだって。多分事故かなんかだと思っただけ……病気とかないよね？ 明日のお通夜に宏とよっくんが行くらしいから、また連絡する。

暗闇でこうこうと光る携帯の画面はそんなことを言っていた。青白くて眩しくて、思わず目を細めた。

お通夜には行った方がいいのかとか会場はどことか話していたが、畑上の親ごさんがどう考えているか分からないのに関わりのないわたし達が行くべきなのかという話になり、バイトも重なっているというふたりの私的な事情により、結局行かないことにした。

高校を卒業して二年目の、夏の初めだった。

次の日の夜は昨日より早い時間に携帯が鳴った。ちょうどバイトから帰ってきたところで、メールだと思っていたら電話だった。

「好実？」

佑月の声が思ったよりも大きかったので、わたしはソファに深く

腰を下ろしながら反射的に携帯を少し耳から離す。

「うん、どうしたの」

「畑上くん殺されたんだって!」

更に音量を増す佑月の高い声がわたしの耳に響いてしばらくしてから、頭がやっとそれを捕らえた。

反射的に背筋が伸びる。一瞬息が止まった。わたしのせつかちな息は、すでに少し震えていた。

リアリティは更に削り取られたのだけれど、死因が他殺と知った途端に大きく反応するわたしの脳みそは、同情しているのではなくて、そう、酷く恐れた。

「……うそ、なんで、誰に? 通り魔かなんか?」

「……それが、」

嫌な予感がした。

小さい頃からよく当たるわたしの予感とは、この間模様替えしたばかりのわたしの部屋の空気を冷たく鋭くえぐった。

「……、」

矢田くん、とその声は言ったようだった。

「……は?」

「……だから、陸上部の、」

「……わたしのよく知ってる矢田?」

「そう、その矢田。矢田俊喜」

「は、」

ぐるぐると世界が回る。いみがわからない。
わたしは止まった。

「……好実?」

空っぽの頭の中にあるのは彼の名前だけだった。きつとまだわたしは眠っている。だってほら、なにもわからない。

「……………矢田？」

やっと絞り出した声は案外簡単に口の中を転がった。しんと静まり返ったわたしの部屋に響くのはその名前だけだったのに、口に出すことでそれに反応した心臓の音が、控え目に主張を始めた。

矢田^{やたとしき}俊喜とわたしは同じ陸上部だった。そして矢田はキャプテンだった。

すっかりしてて頼りがいのある、情の厚い男だった。

矢田が200メートルで都大会進出を決めた時のくしゃくしゃの笑顔がわたしに向く。「嶋^{しま}、ちゃんと見てたか」駆け寄って来た清々しい彼にわたしは思わず抱き着く。じいんとした熱さが伝わる。彼の呼吸が跳びはねているのが分かる。

蘇る。蘇る。右頬に出来るえくぼが、わたしは好きだった。

「……………好実、好実？大丈夫？」

「……………嘘、なんで、え、どうしてよ。なんで矢田が、」

人を殺さなきゃいけないのよ、

語尾は荒くなった息にのまれて消えた。

煩い。煩い。心臓の音、煩い。

「理由はわからないの」

耳に当てた機械を通して聞こえる佑月の声も少し震えているようだった。

心の端っここではこの事態を飲み込めていないわたしのカケラが、
まだ暢気に矢田のえくぼを見ていた。

続、

1、起きたまま見た夢（後書き）

梅雨ですね。雨が嫌だ…

ここでは初めての連載です。

実は一番はじめらへんだけ実話だったりします。報告がメールの文字だけじゃ淡々とし過ぎてリアリティに欠けるんだよね。とはいえずーん衝撃でしたかなり。明日って誰にでも来るもんじゃないんだよね…痛感。

ああ原因なんだったんだろう…

長くなりましたが、これからのんびりとお相手ください。

2、声が聞こえる

日曜日は休みだ。わたしが自由に動く日。

今日はというと、昼過ぎに起きて夕食の買い物に出た。夏の始まりらしく陽射しが強くて、帰宅してからなんとなく頭が痛かった。わたしの頭はまだちゃんと働いていない。時間が経つにつれて現実味を帯びるかと思っていたが、そうでもなかった。というのも、現実味を帯びようにも頭で考えているだけだから結局想像や思考に過ぎないわけで、矢田との思い出はいやに綺麗に鮮明に浮かんできたし、佑月からの話は同じところをぐるぐる回った。行き着いた先は、昨日のままだった。

ビーフシチューは好き。作り置きができるから。

何となく沈黙が怖くて、テレビを眺めながら夕食を食べている時に携帯が鳴った。

「現実？」

「佑月、どうしたの」

「いや、大丈夫かなと思って……」

「ああ、昨日はごめんね、ちょっと混乱しちゃって」

昨日は電話の途中で、わたしの親指は勝手に通話終了のボタンを押していた。空っぽの頭も、渴いた喉も、既に限界を越えていることさえも分からなかったから、その分親指が気を遣ったのだった。

「ちょっとは落ち着いた？」

「……うん、まあ、」

本当は止まっているだけだった。時間は無常にも早く過ぎることを、久しぶりに感じた。時間においてきぼりにされていると思うと、

少しばかり焦った。

「……ねえ、今から好実の家行ってもいい？」

「うん、いいよ」

「じゃあすぐにいくね」

三十分後には、佑月はリビングのテーブルに着いていた。

「正直あたし、今もまだ混乱してる」

佑月がそう切り出したから、少しだけホッとした。

佑月のために新しく注いだビーフシチューをテーブルに置きながら、うん、とだけ返事をした。

「それでね、……あ、ありがと、いただきまーす、」

「はいどうぞ」

「うん、美味しい。……あ、それでね、あたし宏と家近いじゃん、だから今日宏ん家でずっと話してたのね、そしたらね」

「うん、」

そこで佑月はお茶を飲んで一息着いた。スプーンを力チャカチャと鳴らした。

「畑上くんが殺された、って言う情報は、親族の人が話してるのを宏がたまたま聞いたんだけどね、矢田に殺されたっていうのはそこでは一言も聞かなかったみたいなの」

「ふうん、まあ」

同級生も来てる場で憤むのは当たり前といえば当たり前かもしれない。

「でも結果的に」

宏はソレを知ったでしょう？

佑月はスプーンを握っている方の人差し指を立てて、あたしの虚ろな目を見つめた。

「誰から聞いたと思う？」

「……え」

心臓がどくと唸った。

一瞬頭を過ぎった右頬を潰すように、ぎゅっと強く目をつむった。

「教えてくれないのよ」

目の前から吹き掛けられる期待外れの言葉を、わたしはどこに閉まったらいいのか判らず、その言葉たちは少しばかり戸惑った。

椅子の背もたれにもたれた佑月は残念そうに口を尖らせる。その落胆した声色と澄んだの瞳の中に混じって少しだけワクワクが見えたのには、気付かない振りをした。

矢田と畑上くんはどこで関わりがあったのか、わたしは知らない。多分三年間クラスは被ってなかったと思うし、二人が言葉を交わしているのも、一度だって見たことがなかった。

「でもこれって、怪しいとおもうじゃない？」

またすぐにテーブルに乗り出して喋り始める。なんとなく、何か潜んでる気はするのだけれど、ソレが何なのか分からない。

「まあね」

「問いただしてみたの」

「宏に？」

そう、と言って佑月は何故かちよつと笑って下を向いた。

「何？」

「ううん、そしたらね」

顔を上げた。大きな瞳に捕まる。この瞳を何度も羨ましいと思った。

「うん」

「明日も来いって言うのよ」

へえ、そう言ってわたしはペットボトルの麦茶をコップに注ぐ。
トクトクというぼんやりした音が部屋に舞う。

幾分落ち着いていた。二年の三学期始めに一気にクラス全員を敵に回した佑月が矢田と畑上くんの関係を知るためには、もう宏しかないのだ。

「あ、そうだ宏の家に時計忘れたんだった」

取りに行かなきゃ、夕飯ごちそうさま、と言いながらカタンと軽やかに立ち上がった佑月の表情は、混乱している、というにはあまりにも軽すぎた。

「また来るね」

「分かった、またね」

「うん、ばいばい」

ボタンと玄関のドアが閉まる直前に、わたしの目は佑月の首に付いた赤いしるしを捕らえた。

続、

3、墮ちる

「直は殺された」
なお

昨日宏から電話でそう聞いて、あたしはただただ驚いた。呟くような声だった。

畑上くんとは一年だけとはいえ同じクラスだったから、その衝撃は鉛のように冷たく重くあたしの胸に沈んだ。それだけで充分暗い気分になるのに、その上犯人が矢田だなんて言うから。夢のようなこと過ぎて、第三者になりたがった脳みそがゆらゆらと揺れた。

一日明けても真新しく刺々しいそれを、あたしはまだ眺めていた。悲しいとか恐いとか憤慨したり泣いたり、そういう大きな感情は既に身体の奥底で萎縮してしまっていて、結局何も出てこなかった。眺めれば眺める程、あたしの頭からはなにもかも消えた。あたしの身体に大きな穴を開けて。

そのせいだと思う。

ぼつかり開いた穴が怖くて助けを求めたその家で、あたしは押し倒され、絡み付くようなキスをされ、服の中をまさぐられ、それでも何の抵抗もしなかった。それは決して何も感じなかったわけではなくて、寧ろ全身の性感体が耳を澄ませてその行方を見守った。

「佑月、お前カラダ超火照ってるけど」
そう言つて宏は笑った。

ふい、と顔を反らしても頬はシートに熱を零すことはなく、さらに動く髪の毛が少しだけくすぐったかった。

剥き出しになった左耳に、宏は唇で何回も触った。ふわりとして

じいんとして、目がとろんとした。

机の上に飾られたサッカー部の集合写真があたしを見下ろして、都合のいい女だねと囁く。遠目なのもあって、大勢の部員の中での笑顔が宏なのかわからない。宏はきつと成長したんだ。あたしと違って。

「期待してたの？」

息がかかりそうなら近い近くに顔があった。目を合わせる。真っ黒い瞳の中にいる淫らな女があたしを見つめた。この男が本当にあたしを見ているのかどうか分からなかったけれど、それでもよかった。寧ろ、その方がよかった。

期待なんか、してなかった。ただ、人生で初めての「そういうこと」に対して、何の躊躇いもなかった。

どれだけキスをされても溢れそうになっても、あたしは必死に堪えていた。声なんて出さない。だってなんだかいやらしい。そして、そんな自分が恥ずかしいと思う。

だけどそんな思いとは裏腹に、手慣れた宏の甘い手つきによって、あたしの中の一部はガラガラとあっけなく崩れた。

奥から奥から溢れ出す情熱に堕ちる瞬間を、あたしは知った。

宏の口はまたあたしの口を塞ぐ。熱くて甘い息が溶け合って、口の中で行き交って、元々どっちのものだか分からない。大きくて筋肉質な腕に強く絡まれて、からっぽなあたしは酷く安心した。

矢田も好実もよっくんも、みんな頭からいなくなった。

残ったのは宏の体温と、畑上くんの迷惑そうな横顔。記憶の中のそれに見とれていると、宏は静かにあたしを「このみ」と呼んだ。

「矢田に殺されたって誰から聞いたの？」

宏の身体の中に小さく収まったまま、あたしは緩やかに尋ねる。

「ん？」

優しい声と共に、コツンと額が触れた。

「お通夜の会場で聞いたの？」

「いや、会場で聞こえたのは死因が他殺ってことだけ」

あたしがふうん、と言うと宏はちよつと笑った。

知りたい？

器用に言葉に付けられた色も、表情も、全て魅力的に見えた。

コクンと頷くと、大きな掌が頭を撫でた。

「明日も来いよ」

耳元で紡がれた甘い囁きに身体は素直に反応する。あたしが微笑みを返すと、首の後ろに宏はしるしをくれた。齒が当たった。ちくりとした。

都合のいい女だよ。笑顔でピースサインを並べる集合写真に向けてほくそ笑む。

かりそめの安心でいいの。本物の心なんかいらない。本物の心なんて、本物じゃない。

佑月ちゃん佑月ちゃん、とみんながあたしを呼んだ。佑月ちゃんは可愛いね、佑月ちゃんは人気者だね、佑月ちゃんだいすき、多分あたしは慣れすぎてしまったんだと思う。

ひとりぼつちは嫌い。心なんて籠ってなくていい。
だから、ひとりにしないで。

「……ねえ、今から好実の家行ってもいい？」

宏の家を出てすぐ、そんな電話をした。

温く吹く湿っぽい風が、シャワーを浴びた後のすっきりした気分を台無しにした。

真つ赤なヒールがカツカツと地面に当たる乾いた音が、夢から醒めなさい、だって。いつものあたしを引きずり戻した。

誰かの側を離れた途端に溢れるモヤモヤに支配されることを異常に嫌がった脳みそがあたしに下した命令に何の反抗もしなかったのは、畑上くんが殺されたことに動揺していたのかもしれないし、犯人が矢田だったからなのかもしれないし、

あの日のことを思い出してしまったからなのかもしれない。

宏のアパートを出て駅まで歩く。軽い吐き気がした。お腹の奥でくすぶる黒い何かがあたしに戸惑いと混乱を注ぐ。

それはあつという間に膨らんで、目の奥まで襲って来て、あたしはっただけ泣いた。

続、

3、堕ちる（後書き）

さて、佑月です。

この回意外と難しかった…

それにしても暑くない？ああもうすぐ七月か。
今年は長梅雨らしいね。ヤダヤダ。

4、瞳の奥

好実の家に着くまでに、随分と現実味は増した。

規則的に緩い音を立てる電車に揺られている間も、固いコンクリートにヒールが当たるその間も、頭の中にあるのは宏でも矢田でも好実でもなく、畑上直の骨張った手だったり歯並びの悪い口だったりした。

あたしは頭を軽く振る。それに伴って思い出してしまっから。

「佑月！ 授業遅れるよ！ 早く早く！」

そう言っであたしを呼んだのは誰だっけ……

「待つてよお、李伊^{りい}」

ああそうだ李伊だ。結構仲の良かった方だった。

李伊のショートカットの黒髪がさらさらと陽気に揺れて、あたしを急かした。

多分それが原因なんだと思う。

綺麗に言うことを聞かなかった足がもつれて、冷たくて硬い廊下に体が真っ直ぐに倒れた。

必死に受け身を取ろうとした腕が中途半端に間に合わずに宙を掻いて、何故か先に出た肘が痛かった。

「いったあ……」

すぐに李伊が引き返して、「佑月、大丈夫？ 立てる？」って声をかけてくれる、

当たり前のようにそんなことを期待していたあたしは、甘えていたのかな。

いつの間にか目の前には白く塗られたドアが在った。まだそれほど汚れてないプレートにはそっけなく 嶋、とだけ書かれている。嗚呼あたしは無意識にこの家に辿り着ける程に何回も、好実の家を訪れていたんだ。

あまり考えたことはなかったけれど、彼女の隣はなんとなく居心地がいいんだと思う。

だって彼女は何も知らないから。

高校二年の時のクラスとの関わりも興味の力ケラも、元から彼女は持つてなかった。多分クラスの中で喋る関係にあったのは、宏と稀によつくと、本当に稀にあたし。彼女は部活の為に学校に来ていたことを、クラスの誰もが理解していた。

そしてあたしは彼女にとって一番残酷な言葉を惜しむことなく突き付けた。

犯人は矢田。

仕方がない。だって事實は知るべき。信頼を裏切られる気持ちは知るべき。

あたしの為に用意された夕食を美味しく食べながら、あたしはさつき宏に聞いたことを好実には話す。

「でも結果的に宏はソレを知ったでしょう？」

ぐいと好実の切れ長の瞳を見つめる。長い睫毛に縁取られた瞳の奥を見つめる。酷く虚ろだった。

きっとこれが普通。身近過ぎる事件を耳にしたあたしと宏は空っぽになって、その後取るべき対応を間違えたのだ。

「誰から聞いたと思う？」

あたしはなんて嫌な女なんだろう。好実期待通りに焦点が合わなくなつた目をキョロキョロさせて、最後にぎゅっとつむつた。

矢田のことが頭にこびりついているんだ。きっと好実の脳みその中には、畑上くんのことなんか入っていない。関わりが無かった彼女にとって畑上くんは被害者でしかない。

「……教えてくれないのよ」

精一杯溜めた後であたしはそう言つて、ふうと息をついた。

期待を外して呆気に取りられたような好実の姿がなんだか美しく見えた自分が情けなくなつて、またすぐに言葉を漁つた。

「でもこれって怪しいと思うじゃない？」

「まあね」

確かに不思議には思ったが、宏を疑うようなことはしなかった。あたし達は似た者同士。宏も一人になるのが嫌なんだと思う。現実にはあたし達を突き放すから。

「問いただしてみたの」

「宏に？」

「そう」

今朝の温もりを思い出した。滑らかなシーツの触り心地。艶やかな宏のカラダ。

「何？」

好実はいさしだけ眉間にしわを寄せた。

「うっん、そしたらね」

「うん」

「明日も来いって言うのよ」

畑上くんの顔をぼんやりと思い浮かべるとすぐに、昨日の宏が被さった。

宏の身体を思い出すだけでホラ、こんなに求めてしまう。

ふと宏の部屋の写真立てが頭を過ぎる。都合のいい女だなんて、頭では分かっているつもり。身体が言うことを聞かないだけ。あたしはいったいどうなってしまうんだろう。

「へえ」

好実が放った何気ないその一言の怖さを、あたしは嫌と言う程知っている。だってあの時も、始まりはそんな反応だったもの。

ぼんやりとあたしを眺める好実の瞳に映る感情は、なんだかさっきまでと違うように見える。あたしを哀れんでいるのか見下しているのか、それともその他の感情なのか。瞳の奥で彼女は何を見ているのだろう。

ねえ見捨てないで。急に臆病になるあたしの心は、どこまでも果てしなく自己中心的だった。

「あそうだ、宏の家に時計忘れたんだっただ」

これ以上ここにいたら、好実もあたしの側からいなくなってしまうんじゃないかって心配したあたしの口は、スラスラと勝手に動いた。

そうだ今すぐ宏の家に行こう。唯一あたしを必要としてくれる振りをしてくれる男の元へ行こう。

今のあたしにはそんな居場所が必要だった。

続、

5、混ざる

「もしもし！ ちょっと宏雪ひろゆきあのね！」

ヒステリックな母親の甲高い声が電話越しで更に不気味で、静かな夜に虚しく響いた。

ベッドに寝転び漫画を眺めていた俺はぼんやりと、そうぼんやりと何かを予感したんだ。

それがこんなにぐちゃぐちゃに掻き交ぜてしまうことになるなんて、思わなかったけれど。

直が死んだ。

内容はそれだけだった。

母親は既に気が狂いそうな程に興奮していたから、携帯にくっついた右耳が真っ先に事の重大さに気付いた。右耳から一番遠い左耳は、その事実から一刻も早く逃げたがった。

「ああ分かった。……うん。はいはい、じゃあ」

俺の知らないところで口は勝手に返事をして、母親の方から電話は切れた。

気持ちが悪いくらい心臓は血液を入れたり出したりしていた。腹の底に自然に力が入って、そのうえ唇はきつく閉じられて息が苦しかった。

直とは小学校からずっと一緒だった。親同士が仲が良かったのもあって、幼いときはよく遊んだものだった。中学校に入った時ぐらいからお互い忙しくなって遊ぶ回数はほとんど無くなったが、顔を合わせるとやっぱり安心した。

妙にふわふわした気持ちでお通夜を迎えた。俺の喉はごつごつした重苦しいソレを、まだ飲み込めていないらしい。

高校の時に仲の良かった陽^{よう}と待ち合わせて、直の会場へと向かう。陽は泣き腫らした目をしていた。

直は友達が少なかったのもあって、身内の他には数人しか来ていなかった。

直の両親に挨拶しようと思ったその直前に、俺は聞いてしまった。

私の考えだけど、直くんは殺されたのよ、絶対そうよ
まあ本当に？ 怖いわあ

足が止まる。

何度ももつれそうになるその足を必死に動かして、声の元へと向かった。

「……あの、直は、殺されたんですか」

突然の質問に、小綺麗なおばさん達は少し驚いた様子で俺を見つめた。

冷房が効き過ぎている気がする。

あの、ともう一度催促すると、見知らぬおばさんは声を潜めて教えてくれた。

好奇の目だ、と思った。

「直くんは殺されたのよ。自殺とかって言われてるけど、あんな子が二十階もあるマンションから飛び降りなんて出来るはずがないわ」

この人は直のことをよく知る人なんだろうか。まるで見たことがなかった。それよりも。

自殺？しかも飛び降り？

ありえないと思った。

映画マニアの直がずっと前からものすごく楽しみにしている映画の公開日は今日だったし、いや、そんなことよりも直は極度の高所恐怖症だった。

中学一年の時にマンションの七階にある友達の家泊まりに行くことになった時も、廊下の段階で立ちすくんでしまつて動けなくなつたあげく、二回吐いてしまった程だ。

そんな直がマンションの二十階になんて簡単にたどり着けるはずがないし、下界すれすれの場所になんて、立てるはずがない。

……どういう、こと？

理由の分からない震えが続いた。

隣にいるおばさん達の話は、もう違う話に移っていた。所詮他人事なのだ。

お通夜はするすると進んだ。直の顔は安らかで、まるで身体の型をとった透明のガラスに、真っ白い煙を沢山入れたみたい。酷く美しいと、思った。

人はこうしてこの世からいなくなるのかと思うと、なんだかはかない。もう世界中どこを探しても、直はいないのだ。

会場を出て、陽と静かに別れた。陽には言わなかった。

＊＊

矢田俊樹が家に来たのは、その日の二十一時だった。

「よ、」

いきなりの再会に驚きはしたが、直がこの世界からいなくなつてすぐだったし、気が滅入っていたのもあって、ああこいつはまだ生きてるんだなあなんて、少し嬉しかったりした。

「どうしたんだ急に？」

俺の問いに、矢田は少し笑っただけだった。二年前より髪が伸びていたぐらいで、特に変わってはいなかった。

「畑上の通夜に行ったのか？」

「ん、ああ」

入らないのか？と尋ねても、いやいいよ此処で、とやんわりと断るその遠慮がちな性格も、まるで変わっていないかった。

「お前等仲良かったもんな」

「まあな、小学校から一緒だったし」

「だよな」

もしかしたら直と仲の良かった俺を心配してわざわざ来てくれたのかもしれない、一瞬でもそんなことを思った俺は間違つてなかったと思う。

矢田は柔らかない笑顔を俺に向ける。

「畑上の死因をしってるか？」

急にそんなことを言うから。俺は戸惑った。

「……自殺だろ」

躊躇いがちに答える。さっき聞いたことは、見知らぬおばさんの推測でしかない。ざわめく胸を押さえ付けた。

「違うよ」

知ってるだろ？とでも言いたそうな声だった。

どうして矢田がそんなことを知ってるのかとか、わざわざそれを言うために此処まで来たのかとか、言いたいことはたくさんあったはずだったけれど、全てがぐちゃぐちゃに混ざったせいで、結局何も出てこなかった。

「畑上は殺されたんだ」

笑顔でさらりとそんなことを言い放つ矢田が怖いと思ったのは、その時が初めてだった。湿った風がぬるりと頬を撫でる。

言いたいのはそんなことじゃなくてさ、と矢田は続けた。既に声は出なくなっていた。

「その畑上は、僕が殺したんだ」

まるで子守唄を歌うように優しく滑らかに。

サア、と夜風が吹いて矢田の髪を綺麗に揺らした。声は舞った。

続、

5、混ざる（後書き）

さて、宏です。宏描きたかったー笑
そして矢田の登場です。矢田がどう動くのか楽しみ。
上手く動いてくれたらいいな。

6、操り人形

「畑上は僕が殺したんだ」

夢だ。きつと夢だ。だつてこんなに一気に色んなことが起こるなんてありえない。頭がついていかない。……早く目覚めるよ、俺。

「嘘……」

「本当」

にっと笑った矢田は夜の闇に綺麗に浮き上がる。
嘘だ。夢だ。これは夢だ。覚める。覚めるよ早く。

「……どうして……」

息が上手くできない。逃げ出したい気持ちでいっぱいのはずなのに、目の前の矢田の穏やかな顔から目が離せなくなる。足が、動かなくなる。

鼓動が早過ぎて痛い。

「僕さあ、急に何もわからなくなるんだ」

ぼんやりとそんなことを言うから。少し足が逃げる用意をした。
……怖い。

「記憶が飛ぶんだ」

そう言った瞬間だった。

「あああ！　あああああああ！！」

突然だった。顔を両手で押さえて、聞いたことのないような声で叫ぶ矢田が、そこにはいた。

俺は何も言えず、目だけがぱちりと開いて、足は素早く部屋の

中へと向いた。

「どうして僕は此処にいるんだ！？ 何も分からない！ 何があった？ 宏雪！？ どうして！」

軽くパニックになったような叫び声がアパートに響いて、迷惑がかからないだろうかと思った。頭がこの状況を理解していない証拠だ。

「……え、ちょ、矢……」

「ウーン」

ピタリと止んだ叫び声と共に、顔を覆う両手の隙間から目を覗かせ口角を上げた矢田は、簡単に俺を操る。

苦しい。息が苦しい。怖い。怖い。怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

「嘘。ぜーんぶ、嘘」

嘘。その言葉はどっちなんだろう。

「それも嘘。ホント」

言ってる僕もどっちがどっちかわかんなくなってきた、と、矢田は必死に立っている俺を見て、からからと笑った。

ああ、操られている。糸が絡まって痛い。抜け出せない。

「証拠は出ないし、明日には畑上くんバイバイ、だ」

バイバイ。直の肉が焼かれて消える。

俺はここで聞いたことを警察に言っただろうか。泣きじゃくる直の両親や親戚にそんなことを今更。

アニメの探偵じゃあるまいし、一人で証拠探しなんて出来ない。

何をしたらいいのかもわからない。しかも明日の朝までになんて。

「お前には出来ないよ」

ふつと息をついて諭すように矢田は言う。人一倍脆いお前には無理だと。

「……どうして」

直を殺したんだ、という俺の呟くような問いに、矢田は問いで返した。

「僕が畑上と仲良かったと思うか？」

正直なところ、全くといっていい程関わってなかったと思う。

「……喋ったこと、あるのか？」

「ないよ」

「……じゃあなんで」

「だからだよ」

すると零れ落ちる言葉たちは、風が吹かないせいで足元に溜まった。

「僕にとってはどうでもいいからね。だから殺せた」

殺人鬼、というちようどいい単語が頭を転がった。

「そんな顔するなよ。お前の為なんだから」

俺の為……？クエスチョンマークが玄関いっばいに散らばる。

俺が黙ったまましていると、ああ間違えた間違えた、と矢田は両手を軽く振った。

「お前に対するイヤガラセの、ため」

「……は」

矢田の口はコロコロと動く。

「だってさ、お前と仲良くて僕に関係ない奴ってあいつぐらいしか

いないし」

俺に対する嫌がらせの為に、直は死んだ？

俺のせいで直は死んだ？

俺のせいで

俺のせいで？

口からハアハアという狂った音が聞こえる。心臓が痛い。

「なんでだよ！ 俺を殺せよ！」

気付くと掴みかかっていた。正義、なんかじゃない。俺のそれは、自分に対する怯えだった。

矢田は俺に掴まれたまま、それじゃイヤガラセになんないじゃん、と口を尖らせた。

「……俺に何の恨みがあんだよ」

手に込められた力は、すぐ弱気になった。人の良さそうな雰囲気、をこれでもかと醸し出す矢田に、俺の目も耳も間違っているのではないかと思った。

未だに俺に掴まれ続けている矢田は、眉間にシワを寄せた。

「ホントにわかんねーの？」

同じように顔をしかめる俺をちらりと見て、簡単に手を振り払う。力は昔から強かった。

「サイテーな奴だなお前は」

呆れたようにため息を吐き出す矢田を目の前にして、俺はわからなくなっていた。

色んなことが起きすぎて嫌になる。ベッドの中の俺は、無意識のうちに目覚ましを止めてしまったのかもしれない。

「ヒントいち、高二の二学期」

矢田は人差し指を立てる。顔は笑っていなかった。

「ヒントに、襲って泣かせた」

「おいお前なんで……」

「ヒントさん、」

俺の声を遮って矢田の澄んだ声が大きく響く。

「……やめろ」

「嶋この……」

「やめろ！」

思ったより大きな声だった。身体ががくがくと震えているのが分かる。既に早い鼓動は一層暴れ回って、押さえきれなくなってしまう。ずしゃがみ込んだ。世界がぐるぐると回る。頭がどうにかなくなってしまいそうで、でもどうにもなってくれない。いつそ記憶が飛ぶくらい完全に壊れてしまえばいいのに。

どうしてこんなに悪夢ばかり。

「しかもその後すぐだよ。次は傷ついた佑月ちゃん手なずけて？ あいつの心ズタズタにしておいてお前は」

佑月ちゃんも、もう食ったんだろ？ 最低だよお前、と矢田に吐き捨てられた言葉はコンクリートに跳ね返って俺を刺した。

続、

7、溺れる（前書き）

宏の続きです

7、溺れる

あれから何時間経ったのか、それともまだほんの数分しか経っていないのか、時間の感覚がまるでなかった。時間だけじゃない、さつき起こった全てが曖昧にぼやけて、やっと悪夢は消えたのかもしれないと深く息を吐き出した。

ドアを開けっ放しのまま玄関に座り込んでいた俺は、やっと顔を上げる。誰もいなくなったそこには、涼しい黒が夜遅くを告げていた。散らばったままのあいつの言葉が吹いてくる風で舞い上がって、俺の顔に当たって弾けた。

ああ消えていなかった。悪夢は蘇る。

そんな顔するなよ、お前の為なんだから

最低だよお前

「宏！ 嫌！ 止めて！！ いやあ……」

女の子特有の高めの叫び声が、小さな部屋に響き渡る。

嫌だ。嫌だ。消えろ。消えろ。消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ

「ああああ……」

口から溢れ出した音は、呻きにしかなかった。

気付いたら、電話をしていた。「もしもし、宏？」と言うふんわりとした佑月の声は、俺の心を少しだけ緩めた。

何を話したのかは覚えがなかった。ただ頭の隅っこで、このことは好実には伝えないといけない、好実が危ないかもしれないと、そんな不安に駆られた。しかし佑月が「好実にだけ言ってもいい？」と言ってくれたから、きっと大丈夫だ。

電話を切ってから次の日までの夜は長かった。

目をつむると瞼の裏に、ふと気を許すと部屋の壁に、映像は映った。さっきの矢田とあの日の好実と野獣染みた俺。その度に腹の底は重くなり息は壊れ、気が狂いそうになる。

何か違うことを必死で考えるしかなかった。幸運なことに俺は大学生だったから、勉強という逃げ道をその夜はひたすらに走った。

集中力は突然に切れるもので、目を開くと昼過ぎだった。いつの間にか寝ていたらしい。スタンドライトと参考書の間で瞼がとろんとした。

ああ直の遺体は焼かれたのか。もう戻れない。証拠は消えた。そんなことが頭を掠めたが、妙にふわふわした気持ちだった。久しぶりに熟睡したせいかもしれない。

まるで水の中。外でどんなに騒がれようが、俺には心地よい水音しか聞こえない。

インターホンが鳴って、ゆらゆらと玄関へ向かう。ガチャリとドアを開けると、佑月が立っていた。

「……一人になるの怖くて。来ちゃった」

遠慮気味に笑った佑月は、申し訳なさそうに俺を見上げる。

「……………ああ、」

奥へ入るように促し背を向けると、トテトテと小さな足音が続いた。

「あれ、勉強してたの？」

つけっぱなしのままの電気スタンドと、その下に散らばる参考書達を見つけた佑月は意外そうな顔を俺に向けた。確かに、友人が殺されたと分かった次の日にすることではない。

「考えないようにしてた」

「ああ、」

成る程ね、と優しく微笑むこの女は、いつもそうだ。無駄に介入しようとしないうまま、人とうまくやる方法を知っている。

俺は完全に仲間外れにされた後のこいつしか知らないけれど、仲間外れが原因でこいつがそれを習得できたのなら、人間はみんな一度は仲間外れにされるべきだと思う。

「……………どうしてこうなっちゃったんだろう」

ベッドに腰掛け、佑月はぽつりと呟いた。まるで見透かされているようで、剥き出しの腕がひやりとした。

佑月ちゃんも、もう食ったんだろ

最低な奴だよお前は

なんの前触れもなくポンと飛び出したその幻影を、俺はキツと殺意を込めて睨みつける。

違う。食ってなんかない。最低なんかじゃない。

ヒントに、襲って泣かせた

サイテーな奴だなお前は

お前に対するイヤガラセの、ため

止める止める止める。止める。

そうだ俺は。佑月を襲っても襲ってなくても、俺は。
変わらない。消えない。消えない。
消えない。

「宏？ 大丈夫？」

俺を心配そうに見つめるその瞳が、さらりと揺れるその髪が、あの日と重なる。俺の心臓はきゅっと縮んで、狂おしい程に愛しい気持ちを感じ出した。

押さえられなかった、と言うよりも、それを思い出した瞬間に俺の中身は全て消えた。

噛み付くようにキスをした。一瞬怯えたように見えたその身体から、次第に力が抜けていくのが分かる。舌の感触を確かめるように。口の中の温度が全く同じになるように。

柔らかいその身体を包み込んで溢れさせ、上り詰めた頂に傷を付ける。真っ白い首元に吸い付いた跡が痣みたいにくっきりと、綺麗に赤く浮かび上がった。俺の物にならなくていい。だけど印は付けさせて。目を覚ました後で夢じゃなかったと分かるように。

「明日も来いよ」

その言葉は誰に向けられたものだったのだろう。あの日出来なか

った優しく滑らかな扱い。彼女の潤んだ瞳がさらに俺を欲情させる。何度でも抱きたいと思ったあの日。

なんだか無償に泣きたくなくて、よく似た華奢な身体を抱きしめた。

佑月が家から出て行ってすぐ、寂しさに溺れた俺は李伊を呼び出した。

続、

8 - 1、あの日の夢（前書き）

好実リターン。
過去を遡る。

8 - 1、あの日の夢

佑月が出て行った後、渴いたため息が零れ落ちてなんだかぼーつとした。呆れたようにみえたわたしの身体だったが、急にぶるつと小さく震えた。

それはきつと、思い出してしまったから。わたしが悪いのか彼が悪いのか、未だにぐらぐらしていて気持ちが悪くなる。きつと自業自得なんだろうけど。

佑月と同じ位置に付いたあの日の痣は、とうの昔に跡形も無く消えてしまったけれど、時々、本当に時々夢に出て来るあの記憶だけは、いつまで経っても消えてくれない。

夢を見た翌日は、決まって何か理由を付けては矢田を家に呼んだ。付き合ってもいなかったし気の許す仲間程度だったから、特に何をするわけでもなかったけれど、彼が隣に居るだけで安心した。ただ、ざらざらと残る罪悪感だけは、矢田の近くに居れば居るほど強くなって、弱い自分に、泣きたくなった。

そんなわたしに気付くと、矢田はいつも黙って抱きしめてくれた。矢田の胸の中に収まる小さなわたしは、めそめそと遠慮無く泣くのがあった。

そして矢田は殺人犯になってしまった。本当はまだ信じたくないのだけれど、徐々に頭がそれを認めていつているようで怖い。優しくくて大きくて心が広くて、大切な仲間だった矢田との間に、わたしは薄くて高い壁を作りつつあった。

もう矢田は頼れる存在では無くなっていた。矢田との思い出はとも素敵に蘇るけれど、きつと今はもう、彼とは澄んだ心で向き合えない。だって思い出と現実はこのように違う。確かにそう思うのに、

矢田という存在は思った以上に大きくて、今まで矢田にもたれ掛かっていた分の体重をどこに振り分ければいいのか分からなくなる。その事実なんだからやっぱり寂しくて、恐ろしい。

＊＊

「ねえ宏、何点だった？ 負けたらジュースだからね」

二学期の期末テストの答案が返って来る数学の時間はまるで休み時間のようだった。

わいわいとそれぞれが点数を見せたり見せなかったり、ざわざわに乗っかってテストには関係のないお喋りをする子もいた。

きゃあきゃあと騒ぐ佑月達のグループを目の端で眺めながら、一番後ろの一番端っこ、宏の席へと向かう。

「行くぞ」

せーのっ。私たちの声は綺麗に重なって響いた。

「……うそ」

「ホント」

につと笑った宏の手が、ひらひらと答案用紙を靡かせた。点数が三桁の答案。

「……ズルいよそれ。あんた数学が苦手なんじゃなかったの」

あんたの苦手科目じゃないと勝負にならないじゃんか、と膨れるわたしに向かって宏はまた答案をひらひらした。

「え、違うよ大得意」

「うそだ、こないだ言ってたじゃん」

「言っていないよ」

宏は一瞬だけキョトンとして、誰と間違えてるんだよ、と呆れたように笑った。

じゃあきつとそれは矢田だ。嫌いなものはないのかと聞いた時、数学が苦手だと照れたように笑った彼を思い出す。

わたしはクラスに対する愛情が薄すぎると思う。全くゼロではないとは思うが、二学期も終わりかけの今でも、クラスメートに対して興味が持てないでいた。

その中で宏は唯一仲良く喋れた。仲良くといっても気が向いた時に喋るくらいで、気が向かないと一週間でも二週間でも喋らないのだけれど。後はたまに陽とか佑月とかが話し掛けてきたりするくらいで、他の女の子達のように群れることはなかった。だって色々面倒臭い。

「はいジュース。オレンジでいいよね」

「お、サンキュー」

昼休みに約束通り、冷えたオレンジジュースの缶を手渡す。宏はすぐにカコン、と気持ちのいい音を立てて缶を開け、口を付けた。ゴクゴクとおいしそうに喉仏が動くのを、少し眺めた。

「あ、そうだ、お前今日部活休みだろ」

ぷは、と一息付いた宏は、机に俯せるわたしの上から声をばらまく。

「そつだよ」

姿勢を微塵も変えないまま、わたしは答える。久々の部活オフだった。

「俺ん家来いよ、DVD観ようぜ」

「えー、やだ」

なんで、と宏の笑い声が降る。

「矢田ん家でゲームするから」

「なんだよ、また矢田かよ」

お前等デキてんのか、その言葉にピクリと反応する。またか、と思う。

「そんなんじゃない」

顔を上げて目の前の男を睨み付けた。どうして異性と仲がいいだけでそんな風に言われなはいけないのかわからない。寧ろほっ
といて欲しい。

ここ最近女にばかり言われていたから、女ってなんて面倒臭いんだろうと思っていたけど、ああ男も同じか。

どうだか、という見下したような言い方に腹が立って、するりと出て来た言葉に、

わたしは押し潰されることになる。

続、

8 - 1、あの日の夢（後書き）

やっと一週したので過去シリーズへ。
なかなか進まない…いや、でもね、無駄な話ではないの。

8 - 2、あの日の夢

「いいよ、じゃあ行く」

どうしてそんな考え無しな言葉が出て来たんだろう。本当は言いかけたその時に気付いたのだけれど、一度開いた口は、退くことを知らなかった。

「よし、じゃあ一緒に帰ろうな」

「いいけど」

わたしの返事に満足したのか、宏はにつこりした。綺麗に染まった茶色の髪が、窓から入って来た光を滑らかに流す。

「しょうがないな、まあ気をつけろよ」

わたしが詳細を話すと、矢田はすんなりと受け止めてくれた。矢田も、ありもしない噂は気に障るのだろう。それから「宏雪は嶋に気があるようだから告白されないようにな」と言って笑った。あいつに限ってそんな気はないと思うのだけれど。

「おじゃましまーす」

「はいどーぞ」

宏の家は立派な一戸建てだった。

玄関に飾られている硝子のフクロウが訝しげにわたしを見るから、別に怪しくないわよ、と指で突いた。

「玄関で何やってんだよ、俺の部屋二階。こつち」

上りかけた階段を下りてきた宏の目に、わたしは緊張してるように映っているのかなあ。

「ああ、うん」

硝子のフクロウをもう一度ちらりと見てから、ローファーを脱いでぺたぺたと廊下を歩いた。親は出かけているらしかった。

「見ろよこれ、買ったの」

わたしはベッドに腰掛け、宏はテレビの前に胡座をかいた。ホラ、と振り返りわたしに見せたDVDのパッケージには、銃をこつちに向けて構えている綺麗な女の人が長い髪を靡かせている。確か去年の今頃やっていたアクション映画で、出演者が大物ばかりな上に映像も綺麗だと話題になった。話はよく知らないけれど、ロボットだかゾンビだかが出て来る、そんなありきたりな話だった。

「へえ、わたしこれ観たかつたんだよね」

観たかったのは本当。綺麗な映像には興味があつた。だけど上手く声に感情が乗らなくて。矢田とのことを言われたのがまだどこかに引っ掛かって、いつものことなのに未だに開き直れない自分に嫌気がさす。矢田のことは好きだけど、絶対に恋じゃないのに。

「だろ、お前こういうの好きそうだと思つた」

だから呼んだんだよ、とテレビの方を向いて嬉しそうにDVDを取り出す宏の手が、ぴたりと止まった。

音も無くくると振り返いた宏はわたしをちらと見て、どこか淋しそうな顔をした。

「……矢田のこと考えてんだろ」

「え」

「顔に書いてる」

ため息を付いた宏の目は痛そうで、わたしを真っ直ぐに見た。
わたしは何も言えなくなつて下を向いた。空気が動いて、宏が立ち上がる気配がする。

気が付くとわたしの両肩を宏の手が掴んで、顔を上げると宏の真つ黒な瞳が本当に近くにあった。

キスされる。

ぎゅつと齒を食いしばつたけれど、宏はわたしの体を抱きしめただけだった。体の中身まで締め付けてしまうような強い強い抱擁。

「痛い」

わたしの呟きに答えるように、宏は一層強く抱きしめる。宏の硬い腕から、緊張する指先から、溢れる欲情が滲み出てわたしに染み込む。

「うわ、」

宏の腕が絡み付いたまま、ベッドに倒れた。状況を掴めないままでいると、唇に柔らかな衝撃があった。

唇は何度も何度もわたしを押し、舌の先が入って来てわたしの舌を見つけた。他人の唾液が混ざつたわたしの口は、もうわたしの口じゃないみたい。高一の時にちよつとだけ付き合つた彼氏としたキスは、もつと優しいものだったのに。

どれくらい経つただろう、やつと唇は離れて、宏は泣きそうな顔をした。

「……俺を見ろよ」

矢田じゃなくてさ、と言う声は少し震えていた。

宏、と声をかけようとしたらまた覆いかぶさる大きな体。めくり上げられる制服のブラウスが、この男は止まらないとわたしに教えた。

「ちよつと、宏！」

宏の頭を何度か軽く叩くと、それに気付いた彼の手がわたしの手首を押さえ付けた。手首が自由を失って、わたしは万歳をしたまま逮捕された犯人のような形になった。胸に手がかかる感触と共に、びくんとお腹に力が入るのが分かった。

「いや！　ねえ宏止め……」

唇が重なる。熱い息が漏れる。涙腺が強張る。嫌だ、怖い。

押さえ付けられた手首に力を込めても、ぴくりとも動かない。力が強くて縛り付けられているみたい。怖い。怖い。怖い。

宏のもう片方の手がスカートの中に、下着の中に潜り込む。びくびくと震える身体は目一杯叫んでいるのに、口が塞がれているせいで言葉にならない。言葉の代わりに溢れた涙が頬を伝う。

宏の顔が持ち上げられて口が自由になる。涙腺が壊れたみたいに、涙は止まることを知らない。

片方の手でわたしの両手首を押さえ付けていた宏は、両手に変えた。パンツは既に下ろされていた。

「宏！　嫌！　止めて！！　いやあ」

口を開くと転がり出るのはそんな悲鳴。宏は少し顔を歪ませただけで、何も言わなかった。まるで壊れたロボットみたいで、必死に頭を振って抵抗しても聞き入れてはくれなかった。

涙は枯れ、喉は疲れて頭は空っぽになったわたしの首元に、宏はキスをした。強く吸い付いて噛み付いてまた吸い付いて、赤く跡が残るんだろう。わたしの髪は短いから、矢田はきつと見つけるだろうなと思ってふと気付く。

ああまた矢田か。

こんなに宏に縛り付けられているのに、いつの間にかわたしの頭

には矢田がいた。宏の目から見たら、わたしはきつと最低な女なんだろうな。結局はわたしが全部悪かったんだろうか。

枯れたはずの涙が一筋、音も無く頬を伝った。

もし矢田にこのことを気付かれても何か言い訳を考えよう。だって矢田の事を考えていたせいでこんなことになったなんて、絶対に言えない。

「好きだよ、愛してる」

すっかり乱れたわたしの首に顔を埋めて、宏は小さく小さく呟いた。

宏雪は嶋に気があるようだから告白されないようにな
矢田の言葉が宙を舞うのを、わたしはただ眺めていた。

続、

9 - 1、あの日のゆめ

帰宅ラッシュを少し過ぎた、ざわついたホームに電車は滑り込んで来た。

プシュー、とドアが開いて、空調が効いて涼しい車内に足を踏み入れる。ふと目に入ったその人にくぎづけになった。小さく声が漏れるのと同時に息が潜んだ。

すぐ近くの座席に座っている女の人の髪型が本当にそっくりで。李伊に、そっくりで。思わず電車をおりてしまった。

急に、ぐう、と詰まるあたしの胸に、黒いモヤモヤが渦巻く。ホームに立ったままもう一度車内に目をやると、顔は全然似ていなかった。

あたしがおりた途端に冷たいドアは閉まって、結局一本後の電車に乗ることにした。本当は早く会いたいのだけんど。早くあの安心が、欲しいのだけんど。

大きく溜め息を付いて嫌な気分も吐き出そうとしたけれど、心のざわざわは胸に突っ掛かったままだった。

「それでね、その時に祥平がね、」

「マジでえ、佑月絶対狙われてんじゃない」

「祥平からそんなに話し掛けることって滅多にないんじゃない？」

あたしの話にきやあきやあと黄色い声で反応する友達。数学の期末テストの答案が返ってくるその時間は、あたし達にとって絶好のお喋りタイムだった。

「実はあたし祥平狙ってたのにい」

全然悔しくなさそうに李伊が笑うから。その言葉を待っていたかのように、みんなが李伊に詰め寄った。話の中心が変わった時に一番惨めに見えるのは、みんなの視線が一気に外された、話が変わる前の中心だったひと。それは基本的にあたしだった。

「えー聞いてないよー」

驚きと楽しさと、少しだけ申し訳のなさを絶妙なバランスで折り込んだ完璧な声色で、間髪入れずあたしは叫ぶ。まるで今までの自分の話は無かったかのように自然に、且無邪気に振る舞うテクニクを、既にあたしは体の芯まで染み込ませていた。

小さい頃から人気者だの可愛いだの、もてはやされ可愛がられ、あたしの周りにはみんなが集まった。顔に自信があったわけじゃないけれど、嘘でもお世辞でもそう言われ続けて育ったあたしには、それが当たり前になっていたのだった。

だから許されない。あたしは惨めに見えてはいけない。無意識のうちにそんな自分にぐるぐる巻きにされていた。たまに家で一人になった時なんかには、ふと冷静な自分があたしを見下して嘲笑う。

結局群れていないと生きていけないでしょ。馬鹿らしい、と。でももう慣れてしまったもの。仕方ないわ。

顔から表情が消えたあたしは、決まって淡々とそう答える。その愚かさにも脳みその隅っこでは気付いていたはずだったけれど、健気に気付かない振りをするのにも、もう慣れた。

一人では生きていけない。だから群れているのだ。

「大丈夫だよ、あたし祥平好きじゃないし」

李伊をフォローするように笑いを含んで言ったはずの言葉を、みんなは何か勘違いしたみたいで、一気に場の空気が冷めたことに気付かないはずがなかった。

あたしたちを取り巻く気まずさを破って、教室の奥の方から好実と宏の「せーの」の声が聞こえた。なんだか怖くなって、急いでありもしないことを口走る。

「だってあたし畑上くん好きだもん」

意外な告白に一瞬驚いたものの、興味と好奇の色が混じった瞳であたしを見た彼女達は、栓が外れたみたいにまたきやあきやあと盛り上がる。なんて単純なんだろう、ホツと胸を撫で下ろした。確かにこのクラスで地味な部類に入る畑上くんを、面食いなあたしが好きだなんて。あまりいいイメージではないかも。

「なーんてね、嘘だよ。びつくりした？」

悪戯っぽい笑顔で軽快にイメージを修正する自分をよくやったとは思っても、滑稽だとは思わなかった。「なんだあ、びつくりしたあっ」と彼女等の笑い声に包まれた。

横目でちらと畑上くんを見ると、黒ぶち眼鏡の奥で光る冷たい瞳と、一瞬だけ目が合った気がした。

明日は終業式、という二学期最後の授業の日のお昼休み。李伊に深刻な相談を受けた。グループの中で特別仲の良い方じゃなかったけれど、頼りにされてる自分がなんだか嬉しくて誇らしかった。李

伊は明るくて気が強くてしっかりした子だったから、余計そう感じたのかもしれない。

「体操服が無くなったの。取られたんだと思う。もう三回目なの」

泣きそうな李伊の告白に、あたしは絶句し、同情した。

「探そう」

李伊を元氣付けるように明るく声をかけると、ありがとう、と彼女が笑った。

李伊の体操服は、三年生の下駄箱の上にあった。落書きも汚れもまるでなく、綺麗に畳んで置かれていたのに、どうして不思議に思わなかったのだろう。

「李伊！ あったよ！」

「本当？ よかったあ、ありがとね、佑月」

気にしないで、と笑ったあたしに、李伊は言いにくそうに口を開く。

「あのね、このことは誰にも言わないで欲しいの」

きつと人に弱いところを見せるのは勇気が要ることなんだろう。

モチロン、と返事したら李伊は約束ね、と微笑んで、「授業始まつちやう、早く行こう」とあたしを促した。

急かされてあたしの足は絡まる。冷たくて硬い廊下。李伊の足は止まることはなかった。愉快そうに靡く黒髪。揺れるスカート。

たった今まで感謝され、人懐っこい笑顔を向けられていたはずのあたしは何故かおいてきぼりをくらい、呆然とその光景を見ていた。

これが始まりだったんだ。

続、

9 - 2、あの日のゆめ

「おはよー」

ガラ、と教室のドアを開けた。朝の教室は相変わらずざわざわが賑やかで、ほっとする反面息苦しい。ああ明日から冬休み。この間みんなとスケジュール帳をある程度埋める作業をしたから、暇で潰れそうになることはなさそうだけれど。授業がない分朝から夜まで必死に惨めを避け続けるだろうあたしにうんざりした。

それも仕方がない。寧ろ一人になれないあたしを守るための代償としては軽すぎるぐらいだ。

「あ、来たよ」

教室の奥であたしのグループの一人がそんな声を発したのが聞こえる。たいていドアの近くにいる好実も宏も、今日はいなかった。

化粧ポーチ以外は何も入っていないカバンを机に置いてすぐ、グループの元へと向かう。

「おはよー」

あたしの爽やかな挨拶に返事はなく、代わりに淡々とした口調で名前を呼ばれた。

「佑月、」

「ん？」

「あんた李伊に何したか分かってるの？」

いつもは穏やかなユウコが、一番始めに口を開いた。

「え、何したっていうか、」

こっちが置いてけぼりにされたんだけど。そう言いかけて止め

た。だって刺さるような李伊の視線が。ああそっか昨日の約束が。

あのね、このことは誰にも言わないで欲しいの

置いてけぼりにされたことを口にしたらその前のこともバラすことになる。李伊が嫌がらせを受けていることは、あたしと李伊との二人だけの秘密。李伊との約束が、あたしを動けなくする。

それがいけなかったんだ。もしここで李伊の視線なんて無視して真実を口にしていたら少しは変わっていたかも、なんて。もう後戻りなんてできやしないのに。

「何？言い訳するんだ。人気者は大変だね」

所謂ギャル、であるミナが口だけで笑う。何が、どうなっているのかわからない。真つ暗で何も見えないから、先へ進んでいるのか後ろへ戻っているのか、そもそも地面を踏み締めているのかすらもわからない。

あたしが李伊に何をしたっていうの。

「え、ちょっと待って、何の言い訳？」

「へえ」

答えになってなさそうで、きちんとした答えだった。

無駄だと。あたしの言葉は全て無駄だと。

「あたし本当に何もしてないの」

「よくそんな嘘付くね。李伊の体操服も財布も盗んだくせに」

呆れたような歪んだ笑顔をあたしに向けて大袈裟にため息を付くのは、ミナと瓜二つの格好をしたハルカ。あたし達は五人グループだった。けれどあたしに注がれた視線はもう、友達に向けたものじ

やなかったから、きつと今は四人グループ対一人、なんだろう。体操服盗むとか変態じゃん、と一人が笑うと、ホントだよーと笑い声が重なる。

その場に立ち尽くすあたしだけが強張った顔をしていて、みんなの中心にいる李伊は冷めた目でちらりとあたしを見て、ほんの少しだけ口角を上げた。

「ちょ、待ってよほんとにやってな……」

「そもそもさー佑月ってよく告られたとか言ってるけどほんとなのそれ」

あたしの言葉を遮って誰かがそんなことを言った。あたしのような「卑怯者」の言うことは聞く気すら起きないんだろう。蓋が開いてしまった。勢いがついてどんどん流れが速くなる彼女達の口は動く。動く。

「あたし佑月が告られてるとこ、ていうかアピられてるとこすら見たことないんだけど」

「あたしもだよ、えーマジ作り話？ サイター。まああたし信じてなかったけど！」

「あんたのがサイターじゃん」

ぎやははと笑うその声は、気持ちが悪いくらい濁って見えた。今まであたしもこの中で同じように笑顔を絶やさずに生きて来たんだと思うと、なんだか悍ましい。

それでも、と思う。どれだけ濁って見えても輝きを失っても、あたしにとつては大切な居場所だった。此処を追い出されたらあたしは何処へ行けばいいの。一人じゃ生きていけないのに。

彼女達の輪の中に入っているようで、あたし一人が完全な異物だった。誰かがまた妙なテンションのまま言葉を向けた。

「畑上のこともさあ、ホントは好きなんじゃん？」

「マジ？ それはくない？」

「ほら佑月黙ってんじゃん。絶対好きなんだって」

違う、といくら言おうとしても怖がって喉の奥にへばり付いてしまったあたしの声は、一向に出てこようとしなかった。

ああ仲間が壊れる。居場所が壊れる。あたしは夢を、見ているのかな。

あそうだ、終業式じゃん、体育館行こうよ、と彼女達の仲間が言ったから、あたしはざわざわに紛れて凍り付いた息をゆつくりと吐き出す。すぐにいなくなる彼女達の後ろ姿を眺めていると、後ろから畑上くんがてくてくと歩いてきてあたしを抜いた。呆れた横顔だった。

終業式はいつの間にか終わってまた戻ってきた教室で、あたしには何も無くなったことを知った。

塊になって盛り上がる李伊のグループから遠く離れた自分の席で、あたしは静かに堪えていた。ぎゅっと握る短すぎるスカートが、手汗で湿った。

今までずっと群れてきたあたしが一人でいることに、クラスのみんなは気付いているはずなのだけれど誰ひとりとして話し掛けてこないのは、さっきの言い合いの音量が必要以上に大きかったから。

例えば原因が気になったとしても、仲間外れにされた敗者に話を聞きに来る勇気のある人なんていない。李伊達勝者、例えばあたしが悪者になっっているんだとしても、立場の強い彼女達に質問は投げかけられ、尾鰭おびれが付き背鰭せびれが付き、ああきつともうすぐこのクラスの人達はあたしを軽蔑の目で射る。そうして綺麗にはめられたあたしはとんでもない犯罪者になる。

明日から冬休み。長いようで短い、無気力で退屈な日々の先に待っているだろう孤独極まりない惨めな日々、あたしは堪え切ることが出来るだろうか。

必死に守ってきた「惨めじゃない自分」が、呆気なく粉々になっ

て教室の床に散った。

続、

10-1、彼女と見たユメ

「あ、もしもしー、ん、宏？ どしたの」

李伊の第一声はそんな風だった。電話越しに伝わる李伊の、佑月とはまた違うカラツと渴いた雰囲気、元カレからのいきなりの電話に驚く様子は微塵も感じられなかった。

「ん、いや、あの」

「んーなに、淋しいの？ その甘えん坊直した方がいいって言ったじゃん」

俺の様子を素早く汲み取り、柔らかい笑い声を上げる李伊は簡単に俺を見破る。優しい懐かしさが広がった。

俺のことをよく知る李伊だからこそその技だと思う。本当に久しぶりに連絡をしたにも関わらず、するりと受け入れてくれることに驚いて、もつと早く李伊に連絡をしたらよかったと思った。これじゃあ俺ばかりが気まずい空気を背負ってたみたいじゃないか。

「……来て」

淋しさに加えて何だか急に恥ずかしさが込み上げてきたから、携帯に囁くように息を吹き込む。

「あーいいよ、暇だし。今から行くね」

なんの躊躇いも感じられなかった。直とも矢田とも関わりが無かった彼女だからこそその対応が、素直に嬉しかった。直の死因すら、彼女は知らないのだけれど。

＊＊

俺の刻印を受けた好実とは、何も言わずふらふらと部屋を出て行った。まるで魂が抜けたように、その瞳は鈍く光っていた。

ボタンと玄関のドアが閉まる音を遠くで聞いた途端、急にクリアになる頭に残ったのは、欲望を抑え切れなかった愚かな自分と泣き叫ぶ好実の姿。サーツと頭から血が下りてくるのが分かった。それと同時にがくがくと震える乱れた体。好実を「襲った」という事実が俺を支配する。

好実の涙。悲鳴。白く華奢な身体。体温。全てが俺のモノになったひと時に酔いしれる一匹の野獣は、すっかり影をひそめていた。

「…………おれ、…………」

愛しい好実の幻影が現れて、まるで鬼でも見るような酷く、酷く恐怖した目で俺を射る。

「…………このみい…………」

顔を両手で覆う。手と手の隙間から漏れるのは、ちっぽけなニンゲンならではの弱々しく潤んだ声。掌にはまだ、好実の白くか細い手首の感触が残っていた。

愛していた。狂おしいほどに。

本当に、心の底から、好いていたんだ。

*

初めてその存在に気付いたのは、高校一年の時だ。俺と好実と佑月、それから矢田も、同じクラスだった。

嶋好実 は明るくサバサバした持ち前の社交性で、いとも簡単にクラス の中心になった。好実の周りにはいつも人がいて、いつも誰かが笑っている。そんな魅力溢れる彼女に、彼女と関わりのある男子の殆どが好意を抱いていた、そして俺も、例外ではなかった。

しかし人気者には影が落ちるもので、裏で何か嫌味を言われているのもまた、当たり前と化していた。

「大丈夫だよ好実、そんな悪口、気にしちゃだめ。それより次の日曜空いてる？ あたし等と遊ぼうよ」「あーごめん、ユウコ達と約束しちゃった」

「えー、じゃあその次の週末予約ー！ ねえねえ好実お願い、遊ぶ時さ、陽くんと良介連れて来てー」

キイキイとはしゃぐ女子達は、好実を囲んでこれでもかと声を張り上げる。ちょうど好実の隣の席だった俺は、机に肘を付いてぼんやりとその光景を眺めた。

目の周りを真っ黒に塗り、ぎりぎりパンツが見えないぐらいの短すぎるスカートをひらひらさせて好実に迫る彼女達自身が、この間好実の陰口を叩いていたのを、俺はたまたま耳にしたことがあった。女ってなんて恐ろしいんだろう、と寒気がしたのを覚えている。

好実が人懐っこい笑みを浮かべ、「いいよ、声掛けとく」と言えば、すぐさま悲鳴にも似た歓声が上がった。

だんだん疲れが溜まってきていたんだと思う。ある時好実は一週間程学校を休んだ。

やっと登校してきた好実は一瞬にしてクラスみんなに取り囲まれた。

「どうしたの？ 心配したんだよ」

「会いたかったよ好実」

「大丈夫なの！？」

口々に述べられる歓迎の言葉を、好実は一瞬で受け流し、抱き着こうとする竹下^{たけした}さんの腕をすりと交わして俺の隣の席まで歩いた。いつものように「ありがと！ちよつと風邪ひいちゃってさ！」などと、明るく人気者らしい返事を期待していたクラスの大半は、颯爽と歩く好実の背中を呆然と見つめていた。

その日から好実は一休み時間や昼休みになると決まって教室からいなくなるようになった。そしてチャイムが鳴ると同時に教室へと戻ってくるのだ。何度となく誰かが「どこに行くの？」「何しに行くの？」「あたしも行く」と、そんな言葉を好実にぶつけたが、変わらない人懐っこい笑顔で、「秘密。一人になりたいの」と、ぴしやりと言いくるめられて終わった。

そんな日々が続いて、好実の周りからは人がいなくなった。

続、

10 - 2、彼女と見たユメ

清々しく晴れた日の昼休み、久しぶりに屋上に出ようと思い付いた俺が重い鉄の扉を開けると、そこにはさっき教室からいなくなっただけの彼女が、既に灰色のコンクリートにぺたんと座り、膝の上に弁当を広げて訝し気にこちらを見ていた。

短い黒髪が、吹き付ける透明の風でさらさらと靡く。

「……………何しに来たの」

「……………え？」

きゅつと不機嫌そうに口を結んで俺を見つめる彼女は、精一杯自分を強気に見せようとしていたのだろっけけれど、どこかはかなげな気品さえも帯びて、降り注ぐ日光の下で、それは美しかった。

そんな彼女に見とれ、我に返ると共にしばしの間戸惑った俺は、手にした購買のパンとジュースを素早く掲げて、「天気いいから」と、まるで言いにくい言い訳のようにぼそりと呟いた。

「あ、そっか」

緊張が溶けたように彼女が笑うから。久しぶりに目にする屈託のない笑顔が眩しくて、思わず目を細めた。

「あ、俺あつちで食うから」

気にすんなよ、と少しだけ頬を緩めて、好実に背を向けた。本当は近くに居ると彼女のことが気になって飯どころじゃないなんて、ダサ過ぎて言えない。

「わたしさ、別に一人が好きじゃないよ」

後ろから飛んできたよく通るその声は、透明でどこか甘くて、俺の胸をぐつと握った。

「え」

「だから、一人が特別好きなわけじゃないの。別に嫌いでもないけど」

「好き……じゃ、ないの？ ああそっか、こないだまでみんなと居たもんな」

「群れることがめんどくさくて嫌になっただけ。あいつらわたしの陰口ばっか言う癖に、わたしの前では気になる男に声掛けて欲しいからって、甘えた声で頼むのよ。ムカつくけど、さすがにみんなの前で爆発するのも体裁が悪いじゃない？ だから我慢してたんだけどさ、」

そっというのはもう止めた、と好実言葉の端を簡単に結んだ。心の内を淡々と話す好実は、とてもすっきりした表情をしていた。

いきなりの本音トークに呆気にとられた俺が、とりあえずふうんと返すと、好実はなによう、と膨れて見せた後、穏やかに笑った。

「いや、お前ってそんなキャラだったんだな」

「いつもこんなキャラよ」

「そうだった」

なんつーかもっと可愛い系の活発少女だったんだと思ってたけど、と小さく呟くと、うるさい、の一言で見事に締められた。

このギャップにやられただなんて、そんな馬鹿なこと言わない。その素顔を独り占めしたいだなんて、死んでも言わない。

「あとさ、」

「ん」

「あんた名前なんだっけ」
「……」

好実とは人と関わること自体は嫌いではないらしく、最初は俺だけだったけれど、俺と仲がいい陽や、席替えで近くの席になった矢田や佑月とも打ち解け、持ち前の毒舌を余すことなく晒した。特に俺にはズカズカと遠慮なくぶつけられた。

ちょうどその時期、好実とは陸上部へと入部したんだ。

元々スポーツが得意な好実だったから、すぐに慣れたようだった。部活仲間とは仲良くやっていたみたいで、たまに違うクラスの部活仲間であるシホやカナエ（苗字は知らないが好実がそう呼んでいた）が来て、同じく陸上部だった矢田も加わり、楽しそうに談笑しているのを見かけるようになった。昼休みも部室で食べるようになったらしい。

たまに話し掛けられる程度に成り下がってしまった俺はもう、好実の中では薄い薄い空気のようなものなんだろう。俺の中の好実は、どんどん膨れているというのに。

二年になってもクラスは一緒だった。好実とは相変わらず群れることはなく、その代わり、俺と喋る機会は多かった。

「あーわたし、このクラス知ってる人少ない」

「いっぱいいるだろ」

「関わりない人は知らないのと同じよ」

「関われば」

「群れそうな人ばかりだもん」

矢田いないし、ていうか部活の子すらいないし、と、ぶつぶつと呟く好実を横目で眺める。

最近好実から矢田の話題が増えた。好実が今一番心を開いているだろう矢田には、関わりの薄い俺なんかでは敵わないのなんて分かっているけど。矢田と同じクラスにならなくて心底ほっとした。このクラスの中では、俺が一番好実に近い。

「嶋ー」

澄んだ声色が賑やかな教室に響いてその先を見ると、よく耳にするそいつの穏やかな笑顔がドアから覗いている。

「あ、矢田！」

俺との話を放り投げて駆け寄る好実。

心の奥のざわざわと苛々と、心臓がぐつと縮まる息苦しさ。それは嫉妬というものとその時知った。

＊＊

油断していたその気持ちは、いつの間にか自分でもコントロール出来ないくらいに大きく成長していたんだ。

そして俺は、俺の中の野獣に喰われた。

続、

11、浅い眠り（前書き）

宏の続きです。そしてこの話で過去シリーズ最終です。

11、浅い眠り

冬休みが終わってしまった。学校に、行かなければ。

俺の思考はいつもそこで途切れる。そこから先へ進めない。先が見えない。

アラームのセットがされていない目覚まし時計は、ただの時計だった。九時三十分。ああ一時間目が始まる時間だ。この時間には、たいてい起きていた。寝返りと共に、体の下敷きになったシーツにシワが寄るのが分かる。

今日で一週間。冬休みを加えたら三週間、学校に行っていないかった。所謂登校拒否、なのかもしれない。あまり認めたくはないんだけど。

登校拒否なんていう逃げ道は、基本的に被害者に与えられるもので、流石に被疑者に当たる奴なんかのために贈られるものじゃないとは思うのだが、というか今まではそう思っていたのだが、いざその立場に立ってみると分からないもので、もしこれで好実が普通に登校していたら俺ってすげえ情けない。

親は何も言わなかった。というより、夫婦共働きで朝から夜遅くまで仕事漬けな俺の両親は、きつと気付いてすらない。

幼い時から手のかからない子供だと言われて育った。自分のことは自分でできるし文句は言わないし、おまけに勉強も人付き合いも上々だ。研究者の息子としては十分出来た子供だったと思う。

電話が鳴った。物思いに耽っていた俺は、はっとして画面に表示

されている名前を見て、のろろと通話ボタンを押した。

「どした、陽」

「いや、どうしたじゃないだろお前」

ははっ、と電話の奥の陽は軽く笑った。

「休み明けそうそうに一週間も休みやがって」

「……ああ」

「今俺等のクラス結構ごたごたしてんだぞ」

「……え」

もしかや好実がなんか言い触らしてんのか？

ぱつと頭に浮かんだ疑問に、ますます自分は嫌な男だと思う。好実はその奴じゃないって解ってるはずだろ。俺。しっかりしてくれ。

しかし続けて発された陽の言葉は、予想を裏切るものだった。

「佑月ちゃんがハメられてんだよ」

「……は」

「とりあえず明日来いよ、説明してやる」

俺の返事が喉を通り抜ける前に通話は途切れた。

佑月。ええと、誰だっけ。ああそうだ、高梨佑月、たかなしゆっきたまに喋ることはあるけれど、特に気にする程の奴ではなかった。何人かで構成されたグループに依存してるような、まあ言ってしまうえば「女子高生A」みたいな奴だ。

俺が次の日学校へ行ったのは、陽のその話に特に心を動かされたわけじゃない、断じて違う。ただ単に陽の声が久しぶりだったから。理由なんてそういうものだ。

ガラリと久しぶりに教室のドアを開ける。
ハッとした。

好実が自分の席に座って、いつものように文庫本を読んでいるのが見えた。好実の周りに佇むスツとした落ち着いた空気は、休み前とひとつも変わってないようだ。

「……来てたのかよ……」

脱力感は相当なものだった。結局俺はあいつより弱かったのだ。はあ、と大きなため息が転げ落ちた。

「おう、宏、来た来た」

「ああ、おはよ」

「登校拒否かと思っただぜ」

教室に足を踏み入れると、健康的な笑顔が俺を迎えた。部活続いだっただんたろう、正月太りとは縁がなさそうな陽はサッカー部だ。確かキーパーだと言っていた。陽は自分の意志がはっきりしていて客観的になれる性分だから、きつと当て嵌まっていると思う。よく知らないけど。

陽の明るい声に、教室の何人かが振り返る。「あ、宏だ」なんていう軽い歓声が、ちらほらあがった。好実とは相変わらず変わらぬ姿勢で、静かに本のページをめくった。

「つーか佑月来てんじゃん」

ハメられたとか言っていたから登校拒否なのかと思っていたが、どうやらこのクラスでの根性無しは俺だけのような。佑月は好実の二つ後ろの席で、けだるげに携帯をいじっている。

「ほら、佑月ちゃんってさ、ずっと李伊ちゃん達にくつついてただろ、それがさ」

「ん」

ドア側の一番後ろ、俺の席に陽が座る。

「おい、俺の席」

「お前そっち座れよ」

悪びれる様子もなく陽は俺の席の前の席を指射す。多分今頃は図書室にいるだろう直の席だ。

「で」

「ああ、仲良さそうだったじゃん、けどなんかさ、佑月ちゃんが、李伊ちゃんの体操服と財布盗んだとかで」

「はあ？」

「で、即バれて、反撃というか、今やクラス全員から仲間ハズレってわけだよ」

「いや、それって元々佑月が悪いんじゃない」

「まあな」

陽は首をすくめておどけて見せた。

「まあ言ってもさ、李伊ちゃん側の言い分しか知らない訳だけど。誰も佑月ちゃんと話そうともしないし。李伊ちゃんのグループって強いじゃん。イジメだよイジメ」

イジメ、か。佑月の方に視線を投げた。そう言われてみると、必死に携帯を見つめているようにも見える。

「へえ、で、お前は？」

「俺はそういう安っぽいごたごたには関わらない主義だから」

イジメってめんどくせえし。俺はどっちの肩も持たないよ。情報だけはしっかり掴んでおくせに、なんの躊躇いもなくカラッと答える陽を、俺はいつもカッコイイと思う。

もう一度佑月の方を見ると、本を開けたまま眠っている好実の姿が視界に入った。

事件は昼休みに起こった。

陽と二人で弁当を広げていると、急にガツン、と勢いよく机が倒れる音が教室中に鳴り響いた。賑やかだった教室が一瞬シン、と静まり返る。

音のした方に顔を向けると、どうやら李伊のグループの一人であるミナが、主人のいない佑月の机を蹴り倒したようだった。教科書やノートや、筆箱から零れ落ちたペンなんか、派手に飛び散った。佑月の私物がばらまかれるのを見届けると、またすぐにそれぞれの話へと戻るクラスメート達。教室にはまるで何もなかったかのうに、さっきのざわざわが戻った。

「ミナ、もうすぐ佑月来るよ」

「え、マジ？ 早く学食行こーよ」

「行こう行こう、あの子の反応つまんないし。無視無視」

「きやはは、やりっ放しで無視とか罪だねー」

クラスメートのざわざわより一回り大きな声ではしゃぐ彼女等は、颯爽と教室を出て行った。

そして入れ替わるように佑月が教室へ入ってきて、黙々と机を持ち上げたりノートを拾ったりしている。クラスメートは誰も、彼女の存在に気付いてないかのようだ。

「……なにあれ」

「いや、だから言っただろ、イジメ」

「いつもなのか？」

「ああ、ちっちゃい事をジワジワと、て感じかな」

陽は涼しい顔で弁当を突く。俺はなんだか無性にやり切れなくなつて、一口お茶を飲んで箸を置いた。

「ん、食わねえの？」

「なんか、やり切れねえ」

「ん？ ちょ、え？」

ガタンと席を立つて、佑月の席へと歩く。しゃがみ込み、転がったペンを探す彼女の横で、ピンクのペンを見つけて机に置いた。

「……え？」

不意を付かれたようにビクッと肩が揺れて、佑月は振り向く。まっすぐに俺を見つめるその瞳は、酷く疲れて見えた。

「もう全部拾った？」

「え……あ、ああ、うん」

「そう」

立ち上がり踵を返す俺に、小さく「ありがとう」と言うその声が、泣きそうだったのを覚えている。

放っておけなかったんだ。

好実を傷つけ、泣かせた自分が、佑月を無視することでまた、佑月をも傷つけることになるだろうことは明らかだ。

もう誰も、傷つくのは見たくない。大人しく見ていられる自信もない。傷つくのは俺だけで十分だ。

「お前が佑月ちゃんに構うとはな」

「普通だよ」

「まあいいんじゃない？ お前には被害いかないと思うし」

「え？」

「お前何気にモテるからなあ、得だよ」

クツクツと可笑しそうに笑う陽の後ろを、スツと通った好実は、俺の方を見向きもしなかった。

俺は何も、出来なかったから。好実にしてしまったことの償いを何も。

だから佑月に優しくするのも、本当は自己満足のためなんじゃないかって思う。

だけど分からないんだ。どうしていいか、分からない。渴いたため息が溢れた。

続、

11、浅い眠り（後書き）

これでいったん過去シリーズが終わりました。次回から過去を踏み
えての現代へと戻ります。突っ走っていききたいと思います。楽しみ。

12、目覚める

佑月がうちを出てから一時間くらい経っただろうか、わたしは一人ソファに座ってあの日のことを思い出していた。

高二の冬休み中も部活には欠かさず顔を出したし、冬休みを過ぎてもわたしは普通に学校に通った。ほんとには誰とも会いたくなかったけれど、そんな気持ちは上手く心の隅っこに閉じ込めて、鍵をかけた。

矢田は思った通り、わたしの首に貼られた大きめの絆創膏を気にしたが、どこかで擦った、という曖昧な理由で貫いた。言う訳にはいかない。これはわたしの問題。矢田が気にすることじゃない。

痣があつた首の後ろに手を当てる。もう何もなくなった、綺麗なわたしの首。

呼び鈴が鳴った。今日はもう疲れたから、一人になりたいのに。ふー、と息をついてソファから立ち上がる。頭をぼりぼりと掻いた。ガチャリと鍵を外してドアノブを回す。

むっとした空気に触れて、わたしの体は凍り付いた。

息が。ああ、息が。

「よ、嶋」

矢田が立っている。わたしの目の前に。
どうして？

にこやかに微笑む彼は高校のときからあまり変わっていないかった。
だから余計、余計。わたしは戸惑う。

畑上くん殺されたんだって！

矢田、矢田俊喜

ぱつと浮かぶ佑月の言葉が襲い掛かる。顔が強張っているのが分かる。口も目も足も腕も、金縛りにあったみたいに動かない。

矢田は相変わらず穏やかに微笑んで、「久しぶりだな」と言った。

怖い。

矢田に対して初めて抱いた恐怖感だった。今まではずっと、矢田は唯一の心休まる場所であった。それが今は。何、この動悸は。

「……………ど、うしたの」

お腹の筋肉が固まって声が上手く出ない。笑顔は作れそうになかった。矢田はそんなわたしをキョトンとしたかわいらしい瞳で見つめた。

「久しぶりに会いに来たんだ」

「……………そう」

朗らかに笑う矢田を真似ようと、口の端を上げてみる。目はまだぱつちりと見開かれたままだった。

夜風が首筋を舐める。

ぞくつとした。矢田、言えなくてごめん。でもあなたのせいじゃ

ないの。

「入ってもいい？」

多分矢田は何も変わってないのだと思う。顔の作りも中身も、わたしに対する反応も。

嘘じゃないかと思い付いた。

噂話は理不尽に大きくなるもの。わたしは噂に振り回されていたのかもしれない。きっと畑上くんの前日に喧嘩でもしたんだ。だってそうじゃないと、

どうしてこんな穏やかに笑っていられる？

分からない分からないわからない。

ただ、目の前のこの男に、今は心を開けそうになかった。

「あ、……ああ、そうだねごめん、どうぞ」

急かされているわけではなかったけれど、気が動転してしまった。答えて、しまった。

もしかしたら殺人犯かもしれないこの男と、ふたりきり、か。

密室。

そんな言葉が思い浮かんだとたん、足ががくがくと震えた。手にも震えが伝わっていることに気付いて、ぎゅっと強くその辺の空気を握った。何震えてるのよ、失礼でしょ。噂なんだから。あんなの、嘘、なんだから。

「お邪魔しまーす」

このよく通る低めの声が、毎日運動場に響いていた。高くもなく低すぎもせず、涼しさをも感じさせるこの声が好きだった。

矢田がわたしの部屋に上がる。ちゃんと靴を脱いでいることにいちいち安心しているわたしは、いつもより数百倍、神経を張り巡らせているようだ。

ふう、と矢田が二人用のソファに腰を下ろす。実家から持ってきた白い革のソファ。高校生のときは、何度となく矢田の隣に座ってDVDを観たりした。矢田の隣が一番、落ち着ける場所だった。

わたしは躊躇うことなく、向かい側の一人用のソファにお尻の半分だけ座る。ずっぽりと座ることは何故かできなかった。こっちに越してから揃えて買った、小さな白いソファ。

「ちょっとね、すっきりしたことがあったんだ」

矢田は嬉しそうにそう切り出した。

すっきりしたこと？

畑上くんを、

殺した、こと？

違う、きつと違う。嘘だ嘘だ嘘だ。ただの噂だ。

わたしの脳みそは、どうしてもあの大きくて優しい矢田を切り捨てることなんて出来ない。

それなら信じてあげればいいじゃない。噂なんて、信じなきゃいい。しっかりしてよ、わたし。

「何があったの？」

勇気を出して、わたしも切り開く。きっと走ってきたんだ。矢田
は誰より陸上が好きだから。

だけど違った。

続、

13、依存する

「何があつたの？」

わたしの問いに、矢田はふふ、と楽しそうに笑った。

信じられない、この人が？

そこまで考えて頭を軽く振った。そうだ、まだ本当かどうか分からない。

矢田はわたしをじつと見つめて、淋しそうにちよつとだけ微笑んだ。

「俺ね、気付いてたよ。知ってた」

「え、？」

頭の中が真つさらになった。畑上くんに関係がある何か重要なことを聞く準備をしていたわたしの耳は不意を突かれて、代わりに口が、間抜けな音を發した。何のことか分からない。

矢田の真つ黒な瞳は、相変わらずわたしをすっぽりと捕らえ続ける。

「だってお前さ、嘘付くといつも泣きそうな顔すんだもん。あいつと二人で次の日仲良く休むし、かと思えばったりあいつと顔も合わせないし。……たまたま絆創膏の裏、見ちゃったし」

「……あ」

「もつとマシな嘘付けよな」

まああんな場所じゃ無理か、と矢田は自嘲気味に笑った。

知って、たんだ。

矢田は全部知って、黙って側にいてくれたんだ。わたしの気持ちを大事に大事に包みこんで、絆創膏では隠し切れない心の痣を、癒してくれていたんだ。

あの時の矢田の心地よさが込み上げてくる。矢田。ごめん。

「ごめつ……ありがとう」

「何がだよ」

矢田が微笑む。わたしを見つめる優しい瞳に嘘はない。間違いようがない。あの時の、矢田だ。急に緊張が溶けて、固まっていた筋肉が柔らかく緩んだ。息をするのが、こんなにも簡単だなんて。

安心感が蘇る。筋肉と一緒に涙腺まで緩んで、温かい涙が溢れた。

「辛かったな、嶋。大丈夫だよ、ホラおいで」

二人用ソファの端っこに矢田は寄って、わたしを隣に座らせた。

矢田の隣だ。わたしの居場所だ。無意識に流れ続ける涙は止まらない。わたしにちよつと近づいて、よしよしと頭を撫でる大きな掌から染み出る熱に、思わず目を細めた。

腕が絡まる。胸と胸がぶつかる。矢田の中に小さく収まる、まるで無防備なわたしの耳元で、矢田は優しく囁いた。

「だからさ、宏雪には僕から仕返ししてやったよ」

「……え？」

矢田の両肩に手を置いて、真正面から瞳の奥を見つめた。矢田の

奥はやっぱり見えない。

「……仕返して？」

「大丈夫、嶋には関係がないことだよ」

滑らかにそう言って、またわたしを抱きしめた。何だろう、このざわめきは。

「嶋、お前ドキドキ言ってる」

くすくすと笑う矢田の身体は小刻みに揺れた。矢田に絡ませる腕にぎゅっと力を込める。ねえこの胸のざわざわを消してよ。

わたしの額にコツンと矢田の額がくつついた。わたしの身体は矢田の体温に縋り付く。多分無意識のうちに。しかし一方で、心は隙間を開けたがっている。これはわたしの本能だ。

「……宏に何かしたの？」

「何も」

矢田の返答は簡単だった。安堵のため息が流れる。

でもちよつと待って。それじゃあ仕返ししてないってことじゃない。仕返して、何？

中途半端に開いたままの窓から涼しい夜風が滑りこんできて、混乱しているわたしをなだめるように、わたしの髪を撫でた。続いて矢田の髪も撫でた。

「宏に何もしてないのに仕返し？」

「うん、まあね。『宏雪には』、何もしてない」

「『宏には』？」

「そうだよ」

妙な言い回しが気になった。宏には？それって仕返しになるのかな。

そんなことを考えていたら、眉間にシワが寄っていたみたいで、矢田はくくつと笑って、わたしの額にちゅつと口付けた。

「……え」

「眉間にシワ、女の子が寄せるもんじゃないよ」

「だからって……」

矢田とは長い間一緒にいるけれど、そういう関係ではなかったし、キスとかセックスとか、手を繋ぐことさえしたことはなかった。矢田の唇の熱がふわりと香って、こんなに近くに矢田がいることなんて初めてで、思わず吹き出してしまった。

「なんで笑うのさ」

「ごめん、なんか可笑しくて」

「そんなこと言ってつと口にキスすつぞ」

「何言ってるのよ」

拗ねたように膨れた矢田の表情は一瞬ゆるんで、さっきよりもぐんと近くなる。ソファの端っこに座るわたしにはもう逃げ場はなかった。息がかかる。真ん丸な瞳が。長い睫毛が。

「ちょ、近いし！」

「あ、そうなのさ」

「……何よ」

思い出したように矢田が顔を近づけたまま喋るもんだから、発された声は全部、わたしにぶつかる。目を反らすのはなんだか負けた気がするから、じっと見つめ返した。

「お前さ、畑上と関わりなかったよな」

「……え？」

ないけど、と正直に答えると、だよなあ良かった、と矢田の頬が緩んだ。

畑上くん？あの『殺された』畑上くん？

そう、その矢田。矢田俊喜

佑月の声が頭の中に響く。嫌、出てこないで。

わたしの視線は定まることを忘れたように、キョロキョロと戸惑った。

「……あ、の……畑上くんは、殺されたんでしょ」

目なんて合わせていられない。目の前の矢田の隙間から必死にソファの縁を見つめた。

「え、お前知ってたんだ」

矢田はキョトンと、元々丸い目をさらに丸くした。

「佑月から、聞いた」

「じゃあさ、」

「……うん」

ぴりぴりと矢田の視線がわたしを焼く。慣れないその状況に堪らなくなつて、焦点が定まらない瞳を、矢田へと戻した。矢田の瞳の中に取り込まれたもうひとりのわたしは、泣きそうな顔をしていた。

「その犯人も、知ってる？」

知らない知らない知らない。絶対違うもん。犯人なんて知らない。ぶんぶんと首を振る。長くなつた髪が顔に当たって滑らかに揺れた。

「嘘でしょ」

首を振り続けるわたしの顔を両手で包み込むようにして、矢田は痛そうな顔でわたしを諭す。

「嘘じゃないもん！ 本当に知らないもん」

「だから泣きそうな顔するんだってお前は」

「……違うもん」

「違くないよ、……僕なんだよ」

矢田の表情が消えた。

「僕が畑上をやつたの」

宏への仕返し。仕返し。わたしの代わりに。

重大告白にしては、吹き掛けられた言葉たちは酷く安っぽく見えた。

そんな言葉、理解出来ない。

「……嘘でしょ？ 矢田がそんなこと、……するはずない、もん」
「嘘じゃないよ」

矢田は薄く笑った。そして続ける。

「だから僕にも嶋にも関係ない奴をやったんだよ、宏雪に与えたダメージは相当だったよ」

「関係、ない……？」

「あれ、あいつと関係あった？ ごめん」

まるで「お前の消しゴム勝手に借りた、ごめん」の、ごめん。

……矢田のこと考えてんだろ

……俺を見ろよ

苦しそうな宏の声が耳元で鳴った。あの時のわたしが全ての原因だ。

わたしのせいだ。畑上くんが死んだのは。

わたしのせいだ。

わたしのせいだ。

わたしの。

耐え切れなくなったわたしの心が弾けると、矢田の笑顔が零れ落ちるのは同時だった。

続、

14、痣

わたしの心が弾けた。

わたしの目に映る全ては一瞬にして、夏なのに凍えるくらいに冷え切ってしまった。その中心には矢田がいる。にこやかに笑う、矢田が。

がくがくと震える身体と定まらない焦点が、わたしの中の大好きな矢田が崩れ落ちる様を、粉々に散っていく様を、荒れた息の先で見つめた。

「嶋？」

「……いや」

「ちょ、嶋……」

「嫌！」

矢田の腕が伸びてくるのを振り払うのと同時に生まれたきつぱりとした否定語があまりにも大きくて、わたしの声に含まれる恐怖感に、自分でも息を飲んだ。

わたしに拒否された矢田の腕は大人しく退いて、代わりに身体全部がわたしにさらに近づく。

近すぎる、と思った。どうしよう逃げ場がない。

「いや、いやあ、」

矢田の目が、鼻が、口が、睫毛が、すぐそこでわたしを見つめる。鼻がくっついてしまいそうで、その瞳に、取り込まれてしまいそうで、顔は反射的に横を向いた。わたしは両腕で顔の前にバツを作っ

て、固くガードの形を作った。

「嶋……このみ、このみ、どうして？」

このみ、と呼び捨てにされたのは初めてだった。わたしの耳は一瞬びくと反応したけれど、すぐにまた小刻みの震えに混じって消えた。矢田の柔らかな吐息がぶつかる。

わたしの口はまるで言葉を忘れた赤ん坊のように、「いや、いや、」を繰り返すだけだ。息が上がって鼓動も早くなって涙腺が震える。涙声になったその言葉たちは一層甲高くなって、わたしの興奮した気持ちを、さらに掻き立てた。

「このみ、僕だよ、怖くないよ」

顔の前で固く固くわたしを守っていたはずの両腕を矢田はひよいとひとつかみにして、顔の前から外した。相変わらず、いや、いや、を続けるわたしの震える唇があらわになる。首を細かく、たくさん振った。

しかしながら目だけは、矢田からそらされることは許されていないみたいに、一向に動こうとしなかった。矢田の瞳は淋しそうな微笑みをたたえながら、威圧的にわたしを取り込む。暴れたがっているわたしの両腕を掴む右手の力だけは、その微笑みには似合わないくらい強くて、ふとあの日の宏を思い出した。わたしがちゃんと宏のことを見てなかったから。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

全部わたしのせいだ。矢田が殺人を犯したのも、畑上くんが死んだのも。わたしの。わたしの、わたしの、わたしの。

泣くことしかできない一人の無力なニンゲンには、どうすることもできない。なのに理不尽に、罪は重くのしかかる。罪悪感に潰される。

もどかしくて涙が溢れて、「ごめんなさい」を繰り返した。他に出来ることはない。

矢田はそんなわたしをしばらく見つめた後、何かを悟ったように強くわたしを抱きしめた。

人を一人殺してしまった矢田と、彼が人を殺す原因を作ったわたし。じいんとまた涙腺が熱くなった。分かってくれる、矢田となら矢田となら、畑上くんに罪を償って生きていける。

矢田の体温が伝わって、よく抱きしめてもらっていたことを思い出した。

「宏雪にやられたことを内緒にしていたことなら、もう気にしないよ。ずっと気になっていたんだろう？」

「……………え？」

「それに、僕はすぐに気付いたんだから、もう謝る必要はないよ。僕たちは今日和解したんだから。だろ？ まあ宏雪にこのみの身体を取られるなんて思わなかったから、僕も傷ついたんだけどさ」

何を言っているの、この人は。

それはあやすように優しく紡がれた言葉だった。

言ってることは確かにわたしが思っていたことだ。だけどそれは畑上くんが殺される前のことで、今言っているのはそんな問題じゃない。

傷ついたとか傷つけたとか、それは問題ではあるかもしれない。けれど、でも、だって、今はそんなことじゃないでしょう。

畑上くんを、殺してしまっているんだよ。取り返しが、つかない。

いんだよ。

傷つく、だなんて、甘ったれたこと言ってる場合じゃないでしょう。

ちらりと小さなテレビに映るわたしと矢田がこちらを見つめているのに気付いた。音とこの奇妙な空気を取り込まないその黒い画面の中のわたしたちは、仲の良いカップルにしか見えない。

わたしの心は冷たくて無機質な鉄の檻で閉ざされた。嫌だ辛い、なら最初から期待することを止めればいい。あなたはもう一人で生きていきなさい。矢田に依存するのを止めなさい。急に冷めたもう一人のわたしの言うことに、反論する気は毛頭なかった。

ふわりと腕が解かれたと思うと、矢田の額がわたしの額とくっついて、こつんと音がした。矢田の口から、畑上くんの名前はもう出てくる気配すらない。殺人なんてまるで無かったかのように矢田は満足げに微笑んで、わたしに声を吹き掛ける。思わず目をつむった。

「好きだよ、このみ」

ああもつと早くにそれを聞けたなら。事件が起こる前に言われていたのなら、きつとわたしは舞い上がり、真剣に悩んで戸惑いながらもきつと、矢田の彼女になろうと決めていたはずだけれど。鉄で阻まれた今となつては、そこらに浮いている空気となんの違いもなかった。

わたしの喉は一向に音を作る気分にはならなかった。それでも矢田は嬉しそうにして、からっぽで冷たいわたしを引き寄せ、ゆつくりと丁寧にキスをした。

矢田の口の温度がそのままわたしの温度になる。飴玉を転がすように楽しげに動く矢田の舌に、抵抗することはしなかった。もうなにも思っていない。心と身体は隔離された、なのに。

息が荒くなる、泣きたくなる、声が、漏れる。

檻の隙間から矢田の長い手が音もなくぬるりと侵入してきてわたしを見つけた。

いやだ、感じてなんかない。

唇を離れた矢田の微笑みは、今まで見た中で一番綺麗だった。矢田の指がわたしの涙を拭った後、不意に首筋に柔らかくて湿ったものがくつついた。

「あ、」

わたしの小さな驚きには目もくれず、矢田の唇はわたしの首筋に吸い付く。その場所はある時と全く同じで、触れ方も、それに対するわたしの気持ちもほとんど同じで、デジャヴのようなおかしい感覚に襲われた。

矢田の白い歯がわたしを噛んで、唇で吸って、また噛んで、同じ方法で新しい痣ができるのだ。ただ少し違うのは、痣一つでは満足しなかった矢田は三つ程跡を残した。

「このみは僕のものだよ、誰にも渡さない」

わたしの濁った世界には、何もいらない。

虚ろな瞳で矢田を見上げて、無力なわたしは何も出来ないままだった。お姫様だっこをされ、ベッドへと運ばれる。ああこのまま矢田の愛情という名の元に身体を弄もてあそばれ、意志とは関係なくわたしは溢れてもう一度痣を付け直される。

まるで遠い昔を思い出すようなぼんやりと霞んだ考えが、頭を満たす。

ちょうどベッドに落とされた時、わたしの携帯が大きな声で主人を呼んだ。

続、

15、破れる

宏のアパートは、電車をおりたらすぐそこだった。時間的にはもう夜なのに、まだ暗くなりきれない夕闇はじわりと温くて、その上に虫が鳴いている声が小さく被さって、今日の昼過ぎに訪れた時よりも切なさが増している。ぼんやりと歩き始めるあたしを、スーツを着た男の人が早足で抜いていった。

どこから流れてきた風が当たった。冷たさや涼しさは微塵も感じられない、纏わり付くような湿っぽい風だったのに、なぜかそれが当たった瞬間、背筋がぞくつとした。何を感じたのか、何を予感したのか分からないけれど、あたしの体は恐れた。

宏の部屋はアパートの二階だった。鉄の階段を踏み締める度、ヒールがカンカンと音を立てる。手摺りと壁の間に蜘蛛の巣が張られていた。主はいないようだったが、小さな蛾が引つ掛かりながらもまだ僅かにもがいている。もがく度になつとりと絡み付く幾重にも張られた透明な糸に、徐々に命を吸い取られているようだ。

あたしは階段の途中で立ち止まり、くすんだ黄色い羽を持つ小さな蛾が息絶えるのを、冷めた目でじつと見下ろしていた。それはあたしのような気がした。

呼び鈴を押す。ドアの横の窓には、青紫色のカーテンがしっかりと閉じられていた。

「はい」

しばらくして適度に低い宏の声が発せられると、それは機械を通してあたしの耳へと吸い込まれる。

柄にもなく心臓が緊張しているのが分かる。待っていたの。この声を、聞いたかったの。

「ひろ」

あたしの持っている目一杯魅力的な声を出したつもり。顔が見えない分、声色で伝えたい、あたしはあなたに会いたかったの、少し離れたただけだけど、会いたくて仕方なかったの、と。

「どうしたの、忘れ物でもした？」

「えっと、違うの、あの、」

なんだか急かされているようで、拒まれてしまいそうな気がして、急に意気地無しなあたしが顔を出した。そのせいで用意していた言葉が口の中でぐちゃぐちゃに混ざって、頭が真っ白になった。

会いたくてまた来ちゃった、と、一息に言ってしまいなさいよ、弱虫なあたし。言わなくても気付いて欲しいだなんて贅沢なのよ、それにこの乙女心はきつと伝わらない。

「あの、えっと、会いたくて、あの」

「え？」

あたしがどきまぎしていると、部屋の中をどたどた走る音が聞こえた。誰かいるのかな。そう思うのもつかの間で、青紫色のカーテンが、勢いよく開けられた。宏の部屋があらわになる。

「あ、」

思わず漏れた声に答えるように、インターホンの奥で宏が叫ぶ。

「李伊、開けんなって言っただろ！」と。

バスタオルで濡れた髪を拭きながら、窓越しにあたしを見つめるその女は、目をぱちくりとさせた。

髪の色は高校時代とは違って明るい茶色に染まっていたが、その懐かしい顔は何も変わっていない。どこからともなく湧いてくる恐

怖感は紛れも無く、急に目の前に現れた、あたしをハメた女に対してのものだった。

「……なんで」

口だけが少し動く。空気しか発せられなかったが、李伊はそれを見てにやりと口角を上げた。

心の奥底に封をしていた思い出が、過去が、あの時が、あたしの体をぶち破って外に飛び出した。破られた体がひりひりと痛む。理解が遅れた手と足は、今更になってガタガタと震え出した。

「……ひ、ろ……」

助けて。助けて、宏。あたしを、救いに来てよ。

インターホンから音は切れて、続いてガチャリと中から鍵を外す音が聞こえる。

「宏……あの」

「今さ、李伊が来てんだ」

長めの髪をかきあげながら、間が悪そうに宏は言う。その目はあたしの方を向いてくれないままで、明らかに、帰ってくれ、と言いたそうだ。

惨め、だ。

ここでもあたしは邪魔者だ、でももう行き場所がない。一人になりたくない。二年経った今でも、あの女はあたしの居場所を奪い続ける。次は何を奪うつもりなの。

どれだけ彼女を憎いと思ったか分からない。だけど憎んだところで、弱者は弱者のままだった。カミサマはあたしを捨てたんだ、なんて、信じてもない存在を呪ってみたいしたけれど、やっぱり何も変わらなかった。

「じゃ、」

一回も目線を合わせないまま、一言宏はそう言っただアノブに手をかける。その時宏の背後から、李伊がにゅっと顔を出した。口元が猫みたいに笑っているのは、彼女がワクワクしている証拠だ。バスタオルはもう持っていなかった。

「佑月、久しぶりだね、上がりなよ」

「ちょ、お前何言っ……」

「いーじゃん、せっかく来たんだから」

わけが分かっていなさそうな宏を持ち前の強気な笑顔で打ち負かす彼女は、宏とどんな関係なんだろう。あたしの知らない間に、二人の親密度はグリーンと上がっているようで、なんだか不安になる。

李伊がシャワーを浴びていたところを見ると、きっと今から二人の世界を作るところだったんだろう。

あたしだけの宏じゃないことに、ショックを受けたりしない。そんなことはどうだっていい。あたしといるときに、あたしだけを見ているフリをしてくれるだけでいい。

二年ぶりに再会したからか、李伊のあたしに対する対応は幾分柔らかくなっているように見えた。

こんな人だったっけ。

洪る宏を明るく説得している李伊を見ているうちに、意外にも手と足の震えは止まっていた。そうか、人は変わるものだ。もう過去とは違う。

李伊と宏のほほえましい言い合いをぼーっと眺めていると、宏が李伊から目を離して、うーんと唸った。

それは一瞬だった。

李伊の目がジロリとこっちを向いて、口元だけが歪んだように笑った。

続、

16、睫毛の先

「入りなよ」

さっきの冷たい氷のような鋭い視線は、嘘みたいに一瞬で溶けてしまつて、優しく穏やかに笑う李伊がそこにはいた。

「え……と、あの」

縋^{すが}るように宏を見上げて、宏の目はあたしには向かず、李伊の足元に視線は落とされたままだった。はつきりしないあたしに呆れているのかもしれない。

「ね、宏」

「……ああ、」

李伊の嬉しそうな笑顔に押し負けたのか、宏は軽くため息を付いた後、つられたように小さく笑った。

この女が何を考えているのかが、あたしには分からない。高校の頃からずっと、どれが本物の彼女なのか、あたしのことをどう思っているのか、何がしたいのか、分からない。

陽が沈んでねつとりと薄暗いあたしの周りとは正反対の、眩しいほどの部屋の明かり。李伊と宏は、輝くそれを背に抱えてあたしを見つめる。それは惨めなあたしを救い出してくれる神々（こうこう）しい光のようにも見えたし、縋り付く鬱陶しいあたしを遠慮なく突き落とす、冷たくてどこか濁った、あの日のミナやハルカの笑い声のようにも見えた。

「ほらあ、」

「あ……うん」

じれったそうに李伊があたしの手首を掴んで部屋の中へと招き入れる。何時間か前に来たばかりの部屋のはずなのに、置かれた家具もサッカー部の写真もシーツのシワまでもが皆よそよしくて、何だか間違えて別の人の部屋に入ってしまったみたいだ。

サッカー部の写真は、よく見たら中学生の時のものだつた。背が低く小柄な昔の宏は友達に囲まれて、弾けるような笑顔で白い歯を覗かせている。あたしは宏のこんな顔、まだ見たことがないけれど。

「ああ、それね、宏が中一の時のだよ」

いつの間にか李伊が隣にいた。

「でも結局一年も経たずに辞めたんだって」

「どうして？」

こんなに仲が良さそうなのに。

あたしなら、あたしなら。こんなに居心地の良さそうところを手放すなんて、そんな勿体ないこと絶対にしないのに。

一人になるということに対する不安と恐怖を、宏は感じなかったのだろうか。

「引越したんだよ」

ね、と言つて李伊は後ろを振り返る。ベッドの下に座つて携帯に目を落としていた宏は、ん、と反応して顔を上げた。

「今でも仲いいみたいでさ、あたしも何回か会つたよ」

この人とねえ、この人、と写真の宏の近くで笑う二人の少年を指さす。「あそうだ宏、たっちゃん達今どうしてるの？」と李伊がそんな話題を作るから、「たっちゃん」を知らないあたしは同じ空間からほっぴりだされる。

「ああ、竜樹^{たつき}ならこないだ来たよ」

「えーっ！ 久しぶりに会いたかつたなあ」

「また来るんじゃないね、あいつのことだから」

あははと笑う李伊は、あたしの横をするん、と離れて、宏の隣に違和感なく収まった。

二人を囲む和やかな空気は薄くて少し曇った磨りガラスのようで、あたしには何が映っているのか、ぼんやりとしか見えない。あたしは何のために此処にいるのだろう、つまらない疑問が頭を掠めた。^{かす}

「佑月さ、宏とどんな関係なの？」

「え」

急に言葉があたしの方を向いたから、あたしはたじろいだ。

「宏のアパートに来たってことはさ、なんか用があっただんでしょ」

「……え、と」

「ふーん、用もなく来るんだ？ ああ分かった、宏あんた手え出したね」

返事をしそこなった。

だって会いたかった、なんて言えない。李伊の方があたしより、断然宏に近い。李伊はあたしの返事なんて別に求めていないみたいで、隣に座る宏を睨み付けた。その目は面白そうに細められ、口元がふふ、と笑っている。

宏はそんな李伊をさらりと見て、ふい、とそっぽを向いた。それに伴って李伊がきやつきやつとはしゃぐ。話を振られたはずのあたしは、何も言えなかった。

「まさか本気にしてないよね」

可笑しそうに、立ったままのあたしに声をかける。あたしに何も言わない、目も合わせない宏の気持ちを代弁してるつもりなのか、得意げに宏に寄り掛かりながらあたしを見上げる彼女は、紛れも無

く、あの時の女だ。 あたしを、ハメた女だ。

誰の気持ちも知らないくせに。

「……宏の、彼女なの？」

搾り出した声には、感情が宿っていなかった。

「さあどーでしょーね」

李伊は楽しそうにくすくすと笑って、宏の腕に抱き着いて見せた。宏は何も言わなかったけれど、おもむろに振り返り、李伊の唇に軽いキスをした。

一瞬驚いた顔をした李伊だったが、すぐに可愛く微笑んで、今度は李伊から宏にキスをする。

長いキスだった。静かな部屋の張り詰めた空気を縫うように、舌と舌の絡まりあう音がいやらしく響いて、立ち尽くしているあたしの下半身が不覚にもじーんとした。泣きそうなあたしを、宏が李伊の頭越しにちらりと見た。

宏にとってはこういう関係の一人や二人、どうってことないんだろう。あたしだってもう二度と、誰の心にも踏み込まないと決めていたのに。

こんなに悔しいのは何故だろう。

せつかく宏の瞳があたしを捕らえてくれたのに、あたしの方からそらしてしまった。

二人の音は尚もまだ、あたしの耳を舐め続けた。

続、

17、居眠り

李伊は見せ付けるためにあたしを部屋に入れたのかもしれない。

それはきつと、あたしから宏を奪うためだ。仲間外れが始まった後でも変わらず、唯一あたしの相手をしてくれた心優しい宏までもが、李伊の手によって汚されるのだ。

宏の気持ちなんて無視なんだ。無理矢理、李伊の物にされたんだ。彼女はそんな女だ。可哀相な宏。

彼女は本当に、嫌な女。

哀れみの籠った目を、あたしを見つめてくれているはずの宏に向けたけれど、もう宏はあたしから目を離してしまっていた。

二人から視線を移動させた先には、中学生の宏が満面の笑みであたしを見ていた。心からの笑顔って、きつとこういうものをいうんだろう。

ふう、と息を付く音が聞こえて振り返ると、やっと唇が離れた二人が見つめ合って照れたように笑っている。ああ宏は心まで、あの女に汚されたのだと思うと、なんだかやる瀬なさが込み上げてくるのだった。ついさっきまでは他人の事なんかどうでもいいと思っていたはずなのに、いつの間にか昔の自分が溢れるほどに持っていた、繊細で脆くて愚かな、心の奥底に押し込めていた人に対する感情が沸々と湧いてきて、そのせいで自分がもう一段弱くなる気がした。

宏の腕が李伊に、李伊の腕が宏に絡まる。この部屋でのあたしは完全に、異物と化していた。

「佑月、そっちで見てないでこっちなよ」

「……え？」

「見てるだけじゃ暇でしょ」

宏と抱き合ったままの格好で、李伊の顔だけがこっちを向いた。

何？

彼女が分からなかった。言葉が、見えない。

李伊は整った笑顔であたしを見る。その目に映るのは宏だけだったはずで、あたしは要らない存在の、はずだった。

何が、したいの。

さっきまで響いていた二人の唇が発する耳障りな音が、耳にこびりついて取れない。李伊の提案を聞いた宏は、怪訝な顔で李伊の横顔を見つめて静かに腕を解いた。きつと今この部屋できちんと状況を掴めているのは、発言した本人だけだ。あたし達二人は見事においてけぼりをくらって、頭が働くことを嫌がった。

「……………それってどういう……………」

「佑月さ、宏のこと好きなんでしょ、三人で遊ぼうよ」

「は？」

先に反応したのは宏だった。だってあたしは声すら出ない。

「お前……………何言って……………」

「面白そうな提案でしょ」

「俺そんなことできねえよ」

「またまたあ、ちょっと嬉しそうだよ」

「どこがだ」

やってみようよ、宏絶対すぐ夢中になるよ、と、まるでお祭りに来てわたあめをねだる子供のように、わくわくした笑顔のまま李伊はそんなことを言う。

「ね、ほら、佑月もやりたいつて」

「……いや、あの、」

小さすぎるあたしの戸惑いの音は、彼女の耳には届かない。そうこうしてる間に彼女はすくつと立ち上がり、ずかずかとあたしの方へと歩いてくる。

あたしに出来る抵抗といえば、少し後ずさることだけだった。しかしそんなことが有効なはずはなくて、彼女に腕を引っ張られるあたしはベッドまで簡単に連れてこられた。下を向けば、足元で宏があたしを見上げている。表情は読めなかった。

ああどんな形であれ、宏と一緒にになれる。不覚にもそんな考えが頭を掠めたから、小さく頭を振って急いで掻き消した。馬鹿じゃないの。

「ほら、宏も立って」

李伊が宏の腕を掴んで引き上げた。途端、宏はいきなり李伊を強く抱きしめた。腕も足も絡めるように強く。ひろ、と言う李伊の声が最後まで紡がれる前に唇で塞がれて、舌が触れ合う音が鳴る。

目の前で起こる二人の生々しい衝撃に、あたしはただただ、呆然とした。宏は李伊のブラウスの中に手を入れながら、李伊をベッドに押し倒す。嬉しそうな李伊の声が上がる。

李伊の上に被さる宏は、なんだか普段の宏ではなくて、持っていた何かが壊れるようだった。本当は見たくないのに、体が言うことを聞かない。目がそらせない。

いやらしい声と音が連続する中で、ゆつきい、と名前を呼ばれた。「ゆつ、つきい、来なつて」

乱れる李伊は、さらなる高みを求めているんだろう。宏はもう李伊以外何も見えていない。甘い息と漏れる声が、あたしに纏わり付く。体が震えた。

狂っている。

貪り合う男と女を前にして、そんなことを思ってしまった。すると不意に宏の動きがパタと止んだ。急に焦らされる李伊の身体は、もどかしそうに宏の名前を呼ぶ。宏は李伊の甘えるような呼び掛けにも答えず、ぐるん、とあたしを振り返り、野獣のようなその目で、頭のとっぺんから足の先まで流れるように見た。その鋭い目には、もう安心感のカケラも見えない。金縛りにあつたように動けないあたしの身体は、ぐんと近づく宏の唇を、避けることなんてできなかった。

宏に対するあたしの思いはその時、愛しさとか安心感よりも、恐怖の方が勝っていた。それは初めての感情だった。

宏の舌があたしの口を掻き回す。あたしの舌は恐る恐る応える。さつきまで李伊の口にいた宏の舌が、あたしの温度に変わる。

李伊と同じように乱暴に胸をまさぐられ、ベッドへと倒された。隣を見ると、李伊が羨ましそうな目であたしを、宏を見ていた。

「宏、来てえ」

堪らない、と言うような李伊の声に反応して、宏はまた、李伊に被さった。

隣で行われる、生々しいその行為を目の前にして、あたしは何故か、涙が止まらなかった。

あたしは何を、しているの。

ギシギシと揺れるベッドから起き上がる。床に足を付く。早く此处を出よう。行くあてはないけれど、このまま此处で、全てを粉々に砕いてしまうよりはマシだ。

それにいち早く気付いた宏が、あたしをもう一度押し倒した。瞳の奥には何も無い。あなたは誰なの。

キツと睨んでみても、濁った瞳には何の効果もなくて、それが酷く悔しくて。気付いたら、手が出ていた。

ばあん、という張り詰めた空気を切るように、渴いた音が鳴った。啞然としている宏を押し返して、乱れた服を直しながら急いで部屋を出た。

ボタン、とドアが閉まった後も、中からは追いかけて来る気配なんてなかった。このドア一枚を隔てたところでは、きっと二人がまた、最初からあたしなんかいないようにして、絡まり合っているのだ。

あたしは夢を見ていたんだと、吹き付ける夜風が流れ続ける涙を冷やした。

涙を拭うこともせずに、ヒールが音を鳴らしながら階段を下りる。来る時に見かけた蜘蛛の巣には、既に動かなくなった黄色っぽい蛾が放置されたままだった。

もうあたしには残るものがない。全て無くした。上を見上げて、一番最初に目についた寂れたビルに目的を定める。好実には、お礼を言わないといけないな。離れないでいてくれてありがとう、って。ポケットからビビッドピンクの携帯電話を取り出し、ボタンを押した。

続、

18、吠える

酷く色っぽい声が、嬉しそうに短く何度も声をあげる。俺はまるで言葉を忘れてしまったケモノのように、欲望に取り付かれるがまま、抵抗なんてしなかった。頭には何もない。あるのは消えない後悔だけで、目の前の状況が全く掴めていないにもかかわらず、俺の中のそいつは俺を支配し続ける。もう止まらない。何もわからない。

野獣だ。

ふっ、とあの時の怯えるような好実が頭に浮かんで、ぴたりと手が止まる。仰向けになって俺に何もかも曝さらしている李伊をまじまじと見ると、愛おしさと嬉しさとが混ざり合ったような、潤んだ瞳で彼女は俺を見つめた。それは確実に、俺を求める欲情した女の姿だ。恐れられていない。ただそれだけで、俺は安心して小さく息をつく。続けてぐるりと後ろを向いた。

……その顔、やめろよ

まるで狼に睨まれた兎のよう。立ちすくむ小さなその身体は震えてはいなかった。震えないどころか、微塵たりとも動かない。お前は何も知らない振りをして、俺のそばに居てくれるんだろ。なあ、確かにそう言っただろ。俺を救ってくれよ。

「おはよ、佑月」

「……あ、おはよう」

相変わらず一人でぼんやりと携帯を触っている佑月に声をかける。佑月は周りを少し気にしながら、遠慮がちに微笑んだ。まだ李伊達は来ていないようだ。

クラスメートの前で佑月のペンを拾ったあの日から、俺は何かと佑月を気にかけていた。クラスメートの白々しい視線にも、もう慣れた。

「あーっ、ヒロだあ、おはよー」

とろりとした声が朝の教室に響いて、佑月の肩がびくつと揺れる。主犯グループでいつも最初に登校してくるのは、一番性格が丸いユウコだ。ユウコは攻撃する方ではないし、攻めのグループの一員にも関わらずその穏やかで素直な性格故に、意外と幅広い友達層を持っていた。

「ああ、おはよ、今日も早いな」

「まあねー、ヒロは今日も佑月に構ってるの？大変だねえ」

「そんなことないよ」

「やつさしーヒロ、あたし達にも相手してよう」

「おう、また今度な」

俺が付け足しの笑顔を見せると、ユウコはえへへと笑って自分の席へと歩を進める。ユウコが近くににいる間じゅう固まっていた佑月は、やっと僅かに息を吐いた。

陽の言っていた通り、不思議なくらいに俺は何もされないし、というよりも今のユウコのように、仲間外れの佑月をネタにして俺に構ってくる奴まで出てくるようにもなった。相変わらず仲間外れと小さなイジメはまだ続いていたが。

「宏、もういいよ、席に戻って」

クリクリとした大きな目で俺を見上げる佑月に対して湧くのは、恋愛感情ではない。そんな綺麗な俺ではない。

俺の渴ききつた身体は、水でも栄養でもなくただ一つ、もう二度と手に入らないだろう好実の温もりだけを求め続けているせいで、完全に弱っていた。その飢えを逃れるために気を紛らせなければ、ちっぱけな俺は生きてはいけないのだ。だから。

佑月は俺を繋ぎ止めている。例え間違っていたとしても、ここまで来てしまった以上仕方がない。そう思っていた。

「ああ、じゃあいったん戻るわ」

うん、と嬉しそうな笑顔で佑月が頷くから、俺も優しく笑った。

……あ、

「宏？」

目線を佑月から離れた時だった。たった今教室のドアを引いた奴と目があって、俺は情けないほどたじろいだ。そいつは、いくつかの机と椅子を越えた俺と少しの間正々堂々と見つめ合った後、俺の側で不思議そうな顔の佑月をちらと見て、もう一度俺を見てからすぐに目を伏せてずんずんと歩いてくる。当たり前だ、佑月の二つ後ろの席なんだから。

キュウツと胃が縮むのを感じて、鼻から吸う空気が痛かった。目がそらせない。あの日を過ぎてから今日まで一度も、面と向かって見つめ合うことなんてなかったもんだから、俺は逃げていたんだと思う。それに、過去は薄れるものだという概念に甘えていたのだ。分かっていたのに、必死で目を伏せ続けてきたんだ。

好実の瞳は強かった。まるで俺のことは全て見通しているようで、

今の俺の行動を「それは逃げだ」と相変わらずの率直な意見でグサリと刺された気がした。

……じゃあどうすりゃいいんだよ

どこまでも正確で清く正しい好実の力強い瞳に、戸惑いもがいた末にぼつりと出て来たのはただただ情けない言葉だった。俺は本当に駄目な奴だと思う。そんな俺には見向きもせず、ずっと俺の横を通って自分の席に座る好実は、早速机に俯せて寝る体勢をとった。

「宏？大丈夫？」

俺を見つめる佑月の声は確かに耳に入ったはずだったけれど、からっぽの頭を擦り抜けて消えた。

続、

19、緩む

一限目のチャイムは透明な風を通して聞いた。灰色のコンクリートに落ちる影の中で、どこまでも広がる青空に目をやる。雲一つない嫌になるほど真つ青な空は、ツンと済ましてただ遠くに在った。俺の視線なんか微塵も感じていないようでなんだかやる瀬ない気持ちになったから、渴いたざらざらのコンクリートに視線を落とした。掴みどころがない綺麗すぎる空よりも、硬くて汚れた地面がいい。俺の心がもつと美しく澄んでいたのなら、見方は変わっていたのかもしれないけれど。

空に見られている気がして堪えられなくなった俺は、重い鉄のドアを開けて薄暗い階段に腰掛けた。風に押されたドアがバタリと音をたてて閉まると、さっきまでの光に目が慣れていたせいで網膜がちかちかした。人があまり通らないために埃っぽいそこは、授業中なのもあってシンと静まり返っている。俺はくすんだ落書きだらけの壁にもたれ、ふうと息を吐き出す。心のざわざわを落ち着けるように。張り詰めた糸を緩めるように。

パタパタと小さな足音が近づいてくる。それはすぐに顔を出した。「あ、此処にいた」

彼女は何も言えないままの俺を少し眺めてから、裏庭の方に行っちゃってたよ、と言ってそっと笑った。

「……佑月、授業は」

「宏だつてサボってるじゃない」

目の前の彼女から顔を背けた。格好悪い。すぐに喋ることを止めたがる喉のせいで、声が途切れる。やさしいため息が聞こえた。

「なんかあったの？」

「別に」

佑月はそっか、と一言そう言っただけで隣の腰に腰掛けた。ふわりと甘い香りがした。

「あたし、他人のこととか別に深く知りたいたと思わないから」

だから安心して、と笑う佑月は、どこかこの世界に一線引いていくような気がして、なんだか寂しい。でもそんな対応が心地よく思える俺も、きつと寂しい人間なんだろうなあ。

「でも見てたろ、それでここに来たんじゃないの」

「まあね」

佑月はカラツと答える。教室にいる時とはまるで別人だ。好実よりも柔らかな印象を受ける佑月は、ふわりと肩までの髪を揺らした。「別に深く知らなくてわかったことはあるし、心配にはなるもん」「何がわかった？」

ええと、と少し迷ったような仕草をしたあと、「好実となんかあったのかなって」と、少し早口でそう言った。

好実、という名前を聞いただけで、胸の奥の鉛が強く重くずっしりと感じられる。隠すつもりはなかったのだけれど、無意識のうちに笑おうとした俺の顔は、きつと不自然に見えていたんだろう。だってそんな俺を見て佑月は痛そうに微笑んだ。

「でも知らないから」

「ん？」

「あたしは雰囲気だけしか見てないから」

「うん」

「知るつもりもないから」

「うん」

「だけど側にいるぐらいはしてあげる。助けてくれたし、お陰であたし救われたの」

「うん」

「迷惑じゃなかったら、だけど」

「うん」

「聞いてる？」

「うん」

「泣かないでよ」

「泣いてねーよ」

心に染みたんだ。まだ姿を見せない涙は目の奥で揺れている。こいつは強いな、と思った。冬休みが終わるまで彼女とはあまり関わりがなかったけれど、佑月が誰かしら人に依存していたのはみんな知っていた。彼女を一瞬でここまで成長させるぐらいの出来事が、いつの間にか起こってしまったんだ。ちゃんと佑月と目を合わせてから、ありがとうと言った。どういたしまして、と微笑む彼女の心の隅っこでは、きっとまだ事情を聞きたいんだろうな、無理してろんだろうな、なんていう捻くれた考えが少しだけ浮かんだけれど、本当に脳みそをかすったくらいだったから、何も考えない振りをして頬を緩めた。

何も言わないで隣に座っている佑月は、俺とこの世界を繋いでいた。

お前まで、そんな顔すんなよ

佑月という薄い糸が切れてしまったら、支えを失ってしまう俺はここに居られなくなる。そもそもこいつを李伊と会わせたのが、間

違っていたんだ。

一体何をしているんだよ、俺は。

心が、頭が、ぐちゃぐちゃに混ざってもう自分じゃいられなかった。弱虫で最低極わりない俺は、外の世界を怖がってしまつてすっかり息を潜めて出てこようとしなかったから、代わりに前線に立たされた剥き出しの欲望が俺を支配する。俺から離れないで。

パアンツ

狭いアパートの一室に響いたのは、初めて経験した平手打ちの音だった。一瞬時が止まって、左頬が熱を持ったことに気付く。気付いた時には、もう佑月はいなかった。

佑月は俺が俺じゃなくなったことを知ったんだろう。そして右手で語った。目を覚ませ、と。

いなくなんなって。お願いだから離れないでくれよ

じんじんと響く左頬を気にすることもなく、李伊に被さる。痛みを忘れようとしているみたいだ。情けない涙が流れても、熱は少しも和らぐことはない。頬を伝った涙の粒は、李伊の瞼に降った。

「宏、大丈夫。大丈夫だからね」

ぎゅっと俺を抱きしめる李伊の温かな体温とあやすような声に、涙は止まることを知らなかった。

そしてその電話は鳴った。

続、

20、子守唄

静かな部屋に、俺の鳴咽が細々と続いていた。李伊はそんな俺に滑らかな肌をくつつける。生暖かくてすべすべしていて柔らかくて、人間臭さをこれでもかと含んでいるその感覚に、酷く安心した。

「これからあたしが側に居てあげる。だからもう忘れよ。ね」

その言葉はまるで、ヨリを戻そう、と言っているようだ。俺は何も言わず、ただ李伊の腕に顔を埋めた。李伊のことは大切だ。けどそれは俺の過去を分かって欲しいわけでも、暗い気持ちに寄り添って欲しいわけでもなく、ただ何も考えずに安心して、罪を忘れる時間を過ごす為に必要だった。俺が俺である為に、必要なものだった。そしてこれからも、ずっと必要なものだ。

そういう意味では李伊もまた、俺を繋いでいる。

中学の時のサッカー部の写真をちらりと視界に入れると、12才の俺より先に、同い年の竜樹が笑いかけた。曖昧なことが大嫌いな竜樹のことだから、きつと今の俺を見たら大きな溜息を付くんだろうな。怒鳴りはしない。殴りもしない。その方がダメージが強いことを、奴は知っている。

李伊の乳首が頬に当たったけれど、甘える気にはならなかった。

突然だった。部屋の静かな空気を切り裂いて、携帯電話の機械音が鳴り響いた。結構気に入っているアーティストの曲のはずなのだが、なんだか安っぽく耳に障る。鳴り初めこそビクツと身を固くしたが、気の抜けた音楽に耳が慣れると途端に気分が萎えた。

「宏、鳴ってるよ」

促すように、李伊が腕を解いて音源の方に目をやった。テーブルが曲に会わせてブーン、ブーンと振動し、俺を待っている。

俺は裸のままベッドから立ち上がり、携帯を手にとった。知らない番号だった。

「……はい」

「あんたが一番近かったんじゃないの!? 何したのよ!」

ボタンを押して電話に出ると同時に叫ぶような声に押された。ボリュームが大きすぎるせいで声が割れて、上手く聞こえない。

「は?」

「佑月が! 佑月が死んじゃう! ねえ早く行つて!」

電話の向こうでは風が鳴っている。息も乱れていた。どうやら相手は駆け足のように、俺は状況が掴めない。大きすぎる声のせいで携帯から漏れた音に、ベッドの上から李伊が不思議そうにした。

「え、ちょ、何? 誰?」

「わたし! 好実! 早く! ねえ佑月どこよ?!」

え?

電話の向こうでヒステリックに叫ぶ女性が三年間言葉を交わさなかった好実だなんて、そんなことがあるはずがなかった。だってどうして俺の番号を知っている? どうして佑月が俺の家を出たことを知っている?

どうして佑月が死ぬなんて言える?

俺の脳みそはぐちゃぐちゃに絡まって、思考のスピードは衰えるばかりだ。ヒステリックな電話の奥の好実を、何故か客観的に見つめた。

「お前、……本当に好実?」

「そうよ、だからお願い話を聞いて……」

「あの時は、」

切羽詰まる好実の声の出口を塞いで出て来たのは、ずっと俺の心を刺し続けてきたもの。身体の奥の奥に沈んでいたから、声に出すまでにたくさんの臓器を傷つけた。

「あの時は、……ほんとに俺、どうかして……」

「分かった、後でゆつくり聞くから。あのね宏」

やっとの思いで喉を通ったその言葉は、好実の優しいため息と諭すような主張に掻き消された。電話越しに風が弱まったのが分かった。少し立ち止まったようだった。

「今はそんなこと言ってる場合じゃないの。畑上くんが……殺されてるんだよ、その上佑月も死ぬかもしれないんだよ。分かってんの？ わたしが傷付いたとかあんたが傷付いたとか、そんな比じゃないの。ねえ、死んだら何も残らないの。終わりなの」

「佑月まで……？」

直だけじゃなく、佑月まで。俺のせいで死ぬ？ いなくなる？

好実の話はまるで子供の頃、寝る前に聞かされた昔話や、子守唄に似ていた。一言一言がじいんと胸を熱くする、そんな不思議な力を持っていた。

俺は一体、何をしている？

「だから佑月に何したのって聞いているの。わたしも同じことしたってどういう……あ、違う、そこ左」

声を潜めるように俺に向けられる声とは別に、少し離れた相手に張り上げられる声。意味もなく、ざわりとした。

「誰かいるのか？」

「わたしあんた達のところに行くから。だから宏は空が見えそうなのこ探して」

俺の問いには答えなかった。好実は駅に向かってるんだと思う。でも一体誰と？

「空？」

俺が発言した瞬間に電話は切れた。少し躊躇った後、弾かれるよ

うに脱ぎ散らかしたままのトランクスを履いてTシャツに袖を通す。ベッドに置かれたジーパンを手に取ろうとした時、李伊の手が伸びて俺の手を押さえた。

「どこに行くの」

問い詰めるような李伊の鋭い視線に、構ってる暇はなかった。細い手を跳ね返して乱暴にジーパンを履く。

「佑月を探さなきゃいけないんだ」

財布と携帯を引っ付かんでバタバタとドアに向かう俺の腕に、李伊はしがみついた。

「行かないで！」

「え」

「あたしがずっと側にいてあげる。ね？ 佑月のところなんか行かないでさっきの続きしよう？」

裸のままの李伊は必死に訴える。一人の女性を追い続けてきた俺にとって、求められることは理想的なものだった。だけど、今は他に追いかけてやらなきゃいけない奴がいる。俺が助けてやらないといけないんだよ。佑月にとっての俺も、もしかしたら佑月とこの世界を繋ぐ為に必要なものだったのかもしれないと、ふと思い付いた。なんだ、俺と同じだったんだ。

「佑月が、死ぬかもしれない」

李伊が手にぎゅっと力を入れたのが分かった。

「……あたし、やっぱり宏じゃないと駄目なの」

「うん」

「だから、……」

「李伊も来る？」

「え？」

俯いて、今にも泣きそうだった李伊にかける言葉として俺が選ん

だのは、全く先が見えないものだった。

「あたしも、行くの？」

「俺だけが行くのは許してくれないじゃん」

「……いいのかな」

俺には答えられなかった。多分これは、李伊と佑月を突き合わせ
てしまったが故に起きてしまった事件だ。李伊の言いたいことは痛
いほど分かる。李伊を連れて行って佑月を見つけたとして、俺はそ
の後どうしたらいいのか思い付かない。未来の俺はどうするのか、
想像が付かない。でも今は。

「佑月を見つけるのが先だ」

「分かった。あたしも行く」

李伊もようやく状況を把握してくれたみたいで、見つけたら続き
しようね、と、少しだけ笑った。

「うん、ほら早く服着て」

「うん」

時計を見ると、まだ二十二時を少し過ぎたぐらいだった。一日が
こんなに長いなんて。李伊がササッと脱いだ服を着る様子を見てい
ると、ぐう、と腹の奥から泣き声が聞こえた。こんな事態でも腹は
減るんだから暢気なもんだよな、とため息を付いて小さめの冷蔵庫
に常備している袋入りの和菓子を二個、ジーパンのポケットにねじ
込んだ。

俺はまだ、どこかに余裕があったんだと思う。

続、

21、回る

「あ、好実？ あたし、佑月だけど。ありがとね、あたしから離れないでくれて。……好実だけだったからさ、そういう変わらなかったのって」

矢田の腕に必死で抵抗して手に取った携帯電話から聞こえたのは、数時間前に聞いたばかりの声だった。少しの間、時間が止まった。ふわふわした感覚を取っ払いたいのに。

真っ白になっていたわたしの身体を弾くように動かした、携帯の震える音に、確かに嫌な気はしていたんだ。スカスカの頭は、一気に流れてくる液体状のそれを目一杯吸って、キーンと冷えた。

「……え？」

わたしの戸惑いの声を聞いて、佑月はふふ、と笑った。この子は何を、

「何、どうしたの、急に？」

「うっん、言いたかっただけよ。あたしもうすぐ、空になるの」

「え、何？ そら？」

顔をしかめたわたしの目が、無意識のうちにベッドに腰掛ける矢田に向く。首を傾げた矢田がわたしに寄って、ちよつとだけ膝を曲げてわたしの携帯に耳を近付けた。

「空って一人じゃないと思うの。今までに地上にいられなくなった人がみーんなで作ってて、一人でも欠けたら穴が開くの。だから空

を見上げてたら安心するんだよ、一人じゃないって教えてくれるから。だけど本当に一人の人にとっては孤独を突き付けられるだけの。空にいる大勢の仲間をただ羨むことしかできない。地上に居る間は空の仲間になれないんだもん」

何を、……何を、言っているの？何をしようとしてるの？ 何が、あったの？

「……佑月も一人じゃないじゃん」
「あたしは一人なの」

どうにかして佑月の目を地上に向けようとするけれど、今までずっと地上のことしか見てこなかったわたしは何て言っているかわからず、弱々しい言葉を紡ぐことしかできなかった。そもそも状況が理解出来ないのだけれど、踊り狂う脳みそを必死に働かせてどうにか直接触れない程度に。そんなわたしに突っ掛かるようにしてきっぱりと言い放つ佑月に、第三者のわたしが上手く口出しできる自信がない。

「……高校のとき以外の、友達、とか」
「あたしが働いてるの知ってるでしょ。先輩ばかりだもん、あたしがいなくても一緒よ。高校以前の友達は友達じゃない。連絡もないのに今更どうやって仲良くやるっていうのよ」

淡々と答える彼女に、わたしがいるじゃない、とは何故か言えなかった。確かにわたしは佑月から離れてはいないけれど、そこまで近くもない。今一番佑月に近いのは、

そうだ、彼のアパートに行ったじゃない。すごく嬉しそうにして

たじゃない。高校の時からずっと、支えてくれていたんでしょ？
あなたはわたしの代わりに、彼の隣に居たじゃないの。その彼は一
体何してるのよ。

しかしその名前が口に出るのを断固として嫌がったから、わたし
の口は金魚のようにパクパクと力無く動いただけだった。だってわ
たしの耳にくつついた携帯のすぐ隣にあるピアスの刺さった耳が。
仕返しをした本人が。ごくりと空気を飲み込んでその名前を閉じ込
めた。

「……今、どこ」

名前の代わりに搾り出した声は耳に付いた機械に吸い込まれる。
しばらく沈黙が続いて、電話口に風が吹き付けるビュウビュウとい
う音が、わたしの心のざわざわを大きなものにした。

「今向かってるの」

「どこに」

「空に決まってるじゃない」

「空って……」

その時、わたしの隣で矢田がクシャミをした。ちょうどわたしの
言葉が途切れたところだったから、拡散される音が妙にはっきりと
部屋に響く。矢田は瞬時に口をつぐんだが、間に合うはずがなかつ
た。

「誰がいるの？」

早口で詰め寄るような佑月の声に、わたしはただ戸惑い、たじろ
いだ。緊張感が最高潮に達する。本来なら突然かかってきた電話な

んだから、気にする必要もないはずだった。だけど今は、危ない、気がする。

「違うよ、誰も……」

「うそつき」

「……え」

一気に冷めたような声だった。同時に佑月が泣きそうな気もした。何がなんだかわからない。時間がぐるぐると早く回りすぎて、追いつけてない。

「好実もあたしから離れていったんだね。好実も宏と同じ。もういい、バイバイ」

「ゆっ……」

ブツリ、と通話は切れて、続いてツーッ、と心の籠っていない機械音が耳を刺す。宏と同じ？ 佑月から離れた？ 瞬く間に佑月を、わたしが佑月を、突き放してしまった？

立ったままの足がガクガクと震え出す。空気が痛い。いやだ、どうしよう。

わたしの、せい？

「矢田っ……どうっ、しよ……佑月が死んじゃう、死んじゃう！」

ぎゅうつと胸が掴まれるような苦しさに襲われた。顔が歪んでいくのが分かる。涙腺が暴れている。

「違うよ、僕だよ。好実のせいじゃない。だから落ち着いて」

取り乱すわたしを包み込むこの男は、どこかに心をまるごと置いてきてしまったのだらう。畑上くんの魂に根こそぎ取られてしまったのかもしれない。矢田は今なお穏やかにわたしをなだめる。平気

な顔をして僕のせいだと言つ。彼の考えていることが、わたしはいつも読めない。

「……佑月を探しに行かなきゃ」

矢田が落ち着けてくれたおかげか、自然と言葉が零れた。そんなわたしを見て安心したように、矢田は力強く頷く。その顔はわたしに希望をくれた。矢田ってやっぱりわからない。ここまで来てまだ矢田に振り回されてる自分が一番わからないのだけれど。

冷たい空気が固まってしまう前に、部屋を後にした。

続、

22、サイカイ - 1

宏の電話番号は知っているはずもなく、まさか矢田に聞けるわけもないので陽に聞いた。宏はまだまだ言いたいことがありそうだったけれど、彼の口から言葉が出る前にわたしは通話終了のボタンを押す。正直な話、ちゃんとした会話なんてあの日以来だったから、懐かしい宏の声を聞いた途端にわたしの身体は小さく震えた。わたしも本当は言いたいことがたくさんあるのだ。だけど今は。だって今は。

ちょうど駅のホームにとまっていた電車に駆け込むと、わたし達を待っていたかのように、すぐにドアは閉まった。

ドアの近くの座席に矢田と並んで座る。顔を上げたままで見ると視線がうろろと戸惑ってしまうから、わたしはただ俯いてじっとしていた。わたしの脳みそはもう疲れ切ってしまったようで、頭に浮かぶものが何も無い。息をする感覚だけが、妙に強く残る。そんなわたしを心配したのか、矢田は膝に置かれたわたしの手に、そつと自分の手を重ねた。大きな掌の温もりがじわりと染み込む。

空に近いところなんて、呆れる程に多かった。アパート、ビル、マンション、学校……宏のアパートから近い場所だとしても、駅に近いそこは、近くにいろんな建物がありすぎた。

「……………」

無意識のうちにため息が滑り落ちた後、それに気付いて首を振る。わたしが見つけてあげなくちゃいけないのに。

隣で様子を伺っていた矢田が「とりあえずこのマンションから攻めていこう」と言ったので、力強く頷いて気合いを入れ直した。

三つのマンションと一つのビルの屋上を見て回っても、佑月の姿は見つからなかった。わたしは既に泣きそうになっていた。走り続けているせいで、息は悲鳴にしか聞こえないし、膝はすっかり体力の無くなったわたしを笑った。腰に手を当ててよろよろ歩きのわたしの少し前を歩く矢田は飄々と、次どこにしようか、などと辺りを見回している。やっぱり走ることは好きなんだ。だってこんなに楽しそう。わたしも高校生の時はこのくらい陸上を愛していたのにな。卒業した途端、ぱったりとやる気が失せてしまったのは、陸上部の仲間と走ることが何より好きだったから。

ブーツブーツと音が鳴って、ジパンのポケットに入れている携帯電話の震えがわたしの太ももを刺激した。口から必死に酸素を貪りながら、携帯を取り出す。思った通り、宏からだった。

「今どこ！ 佑月いた！」

「……ほんと？」

興奮した宏の切羽詰まる声が、きいんと耳を刺した。携帯の奥で誰かが何かうるたえたように喋るのが聞こえる。携帯の口のところを手で押さえて、矢田に見つけたことを知らせると、矢田はすぐ近くに来た。

「下から見えてる！暗くてあんまり見えないけど絶対そう！ 屋上

！ えーと……下沢ビル」

「下沢ビル………どこ」

「俺のアパート出てすぐ右に曲がってまっすぐ行っただとこにある寂れたやつ」

じゃあ俺行くわ、と、電話越しのわたしではなく、誰かに言うようにして、ぷつりと通話は途切れた。

わたしは宏のアパートと、今いる位置を確認する。まさにこの辺

りだった。

「この筋の寂れたビルって……」

「あれじゃね？」

わたしが最後まで喋り切る前に、矢田は早くもそれを見つけていた。矢田が指差すほんの数メートル先には、周りの建物より一回りもふた回りも年をとっていきそうな細長いビルが、両脇の大きなビルの間に縮こまるようにして生えていた。こんなに暗いのには存在感はない程に持っているそのビルの屋上へと目をやる。屋上は暗くて何も見えなかったけれど、視線を下に移動させると、誰かが一人で立っているのが見えた。

動きたくないと嫌がる足を無理矢理地面から引っぺがしてわたしは走る。ビルに近付につれて徐々に明らかになるその姿は、期待していた人ではなかった。

「……え？」

「好実、上、上！」

「あ、うん、え？」

そこに居たのは高校一年の時にわたしに散々へばり付いていた女の子の一人、竹下李伊だった。確か二年の時も同じクラスだった。本当に久しぶりの再会だった。再会の時と場所がこんなのにやなかったら、もっと喜べたかとか、昔話で盛り上がったのかと聞かれると、きつと出来ないと思うけれど。でもそんな李伊がどうしてここに居るのか、これはどういう状況なのか、全く想像が付かない。

わたしは李伊に言われるままに上を見上げる。隣でわたしと同じように空を見る矢田を見ても、李伊は何とも思わないようだった。真っ黒な屋上から地上へ向かってぶらぶらと揺れているのは多分、佑月の足だ。よかった死んでなかった。

僅かばかりの息を付いて、階段へと向かう。

「李伊、待つててくれたの？」

ビルは結構な高さがあるのにエレベーターは無かった。わたしより先に階段を駆け上がる矢田の背中を見ながら、陸上部の練習を思い出す。運動場が使えない雨の日はこの練習が入るから、わたしは雨が嫌いだった。

「それもあるし、最初からあんまりあたしが出ない、方、が、いいと思うし」

そこで李伊は、いったん止まり、履いているパンプスを脱いで手に持ち、すぐにわたし達に追い付いた。わたしは会話の続きに戻る早くも息が上がっている。短い休憩を挟むと余計に身体がだるくなることなんて、とつくに知っていたはずなのに。

「どうして？」

わたしの簡単な質問に、李伊は目を丸くした。

「え？ どうしてって……」

「つーかお前宏雪と一緒にいたの？」

前を走っていた矢田が顔をこっちに向けて口を挟む。あ、そうだ、わたしは矢田に宏の名前を言っていなかった。だってなんだか怖かった。目だけがうるたえたわたしをちらと見て、矢田は少し笑って言う。「分かるから」と。息が荒いまま、わたしはまた泣きそうになった。そして思う。矢田をあの二人に会わせてもいいのだろうか。李伊はそんな私たちを眺めてから、あんなたち仲良いよね、と言っ

って笑った。

「宏雪と未だに会ってるんだ？」

「違うわよ、別れてから初めて会ったの」

「え？」

矢田の質問に対して口を尖らせる李伊の発言に、わたし達は同時

に声を上げた。……聞き間違い？

「だから、別れてから初めて会ったの！」

機嫌を悪くしてしまったのか、強い口調で李伊は言う。屋上へと続く扉が見えた。

「え、何、お前等付き合ってたわけ？」

「昔の話よ」

「いつ」

「高校卒業してちょっと経ってから」

へえ、とわたしと矢田がそれぞれに相槌を打つ。意外だな、と思うぐらいしか感想はなかった。

「あんた達だつて未だに……」

李伊が言いかけたところで、先にたどり着いた矢田がガチャリとドアノブを回す。当たり前だけど、簡単に回った。

続、

23、サイカイ - 2

ギイ、と金属が擦れる音と共に、ドアが開いた。そこに在ったのは、階段の濁った色とは違う、広くて澄んだ黒だった。止まった途端にじわじわと体の中から熱がたくさん作られて、遠慮がちに吹いてくる風が額の汗に当たって冷たい。ハアハアと暴れる三人分の息を聞きながら、必死に目を凝らす。黒の空気の重なりの上にフェンスの影が邪魔をしているから、余計に見にくい。

「あ、」

不意に李伊が声を上げた。彼女の人差し指の向こうには黒い塊が分かる、ような気がする。急に強い風が吹いたから、開けっ放しだったドアはボタンと大袈裟な音を立てて閉まった。澄んだ黒は次から次へとその音を伝えて、ついに屋上全体に響き渡ってしまった。静まっていた神聖な何かを揺らがせてしまったみたいで、わたし達は息継ぎで忙しい体を固くした。

「振り向いた」

「え？」

「佑月と宏がこっち見てる」

口だけを小さく動かして李伊は言う。わたしと矢田が李伊の方を向いても、彼女の目は真剣で、一向にフェンスからそらされないまままだ。

「……わたしには見えないんだけど」

「……僕も」

もう一度フェンスの方を見ても、相変わらずぼんやりと塊が見える気がするだけだった。

「どうする？」

「え？」

「あっちに行く？」

「あ、えっと……」

いつの間にか李伊の顔はわたしの方を向いていた。化粧つ気のない李伊の顔を、わたしは初めてちゃんと見た気がした。アイメイクをしていなくても充分過ぎる程大きい目は、キリツと上がっていて気の強さを強調させている。彼女の目力に飲み込まれたわたしは、しばし言葉を止めた。

「ていうかさ、僕等佑月ちゃんを探しに来たんだから、行かなきゃ意味ないじゃん」

そう言って矢田がポンポンと背中を叩いてくれた。隣の矢田を見上げると、矢田の後ろに月が光っていた。今夜は三日月だ。

「佑月っ！」

わたしの声は辺りに響いて一瞬で溶けた。弾かれたようにフェンスに向かって駆ける。人影が立ち上がるのが見えた。やっぱり佑月だ。勢いが上手くコントロール出来ず、フェンスに体当たりする格好になったけれど、わたしの目はちゃんと佑月を映していた。彼女を目の前にしてわたしの身体はやっと安心したのか、大きくて深い息が溢れて、強張っていた肩の力が抜けた。

「好実……」

「佑月、ごめんね。心配したよ」

「うん」

微かに微笑む佑月は、フェンスに手もかけずにわたしを見つめる。

柔らかそうな長い髪がわたしに向かって靡く。彼女の足元を見ると、すぐ後ろには地面は無く、ただ空気が積み重ねられて黒い色を作っているだけだった。

「危ない、よ」

「大丈夫」

「落ちちゃうかもしないじゃん」

「それならそれでいいもん。最後に好実も宏も来てくれたし」

十分だよ、と微笑みをたたえたまま宏の方を向いた佑月は、すぐに悲しそうな顔になった。口が小さく動いたようだったけれど、彼女が何を呟いたのか、わたしには分からなかった。

そうだ、宏だ。

佑月の隣で静かに立っている宏を見ると、すぐに目が合った。彼のその切なくも愛しそうな瞳は、ずっとわたしを見つめていたみたいだ。目が離せない。

「……好実、」

表情は一つも変えないままで、宏はわたしを呼ぶ。懐かしい切れ長の目は夜のせいで、どんな色をしているのか分からない。声はさつき電話越しに聞いた時よりも大人びて聞こえた。

「好実俺……」

「わたしもごめん」

「……え？」

「わたしがちゃんと宏のこと見なかったから……だから」

あの、えーと、とわたしは言葉が続かない。これ以上泣きそうな宏を見てられなかった。でもどうしよう、わたしの方が泣きそうだ。

好実、ともう一度名前を呼ばれて下を向きかけた顔を上げた。宏は真っ直ぐにわたしを見ている。そうだ、彼はいつも正面からわたしを見てくれていた。

「本当に俺どうかしてた。……申し訳、ありませんでした」

深々と頭を下げる宏を目の前にして、丁寧で綺麗なその頭の下げ方に、しばし見とれた。

「頭、上げてよ。もう……」

「僕は許さない」

いいよ、って言いたかった。全てを赦す為のその言葉は、わたしの後ろから投げられた低くて透明な声によって遮られた。

「矢田……」

いつの間にか矢田がわたしのすぐ側に来ていた。矢田の隣には事態を把握しきれしていない李伊が、わたし達の顔を忙しそうに見ている。

「僕は絶対に許さないよ、お前は最低だ」

矢田が淡々とした口調であまりにもきっぱりと言うもんだから、わたしはどうしていいか分からなくなる。わたしって弱い。

わたしは宏を赦したい。でも、矢田の言うことは痛い程分かる。矢田はわたしの復讐の為に畑上くんを殺してしまったぐらいだもの。彼が宏を許せるわけがないことは、わたしが理解してあげないといけない。だってそうじゃないと、彼はただの殺人鬼だ。けど本当はわたしの言動に全ての原因があったんだと思う。最低なのは

わたしだ。詳細を知ったら矢田はどうなってしまうのだろう。壊れてしまったらどうしよう。心に刺がたくさん刺さって息苦しい。

恐る恐る宏の方を見ると、彼はもう頭を上げて、やっぱり真っ直ぐに矢田を見ていた。その目はわたしに向けられていたそれとは少し違って見える。

「あの、あたし何にも分かんないんだけどさ、とりあえず二人ともこっち来なよ。落ちちゃうよ」

遠慮がちに李伊がそんなことを言ったから、ここに来た本当の目的を忘れかけていたわたし達はハツとした。そうだ、まず佑月を。スイッチを入れ替えないと。

「ゆづ……」

「うるさい」

「え？」

佑月はコンクリートが途切れた先に視線を投げながら、ぶっきらぼうに言い放った。夜風が佑月の髪をふわりと舞い上がらせて、こんな状況にも関わらず美しいと思ってしまった。

「結局好実ばかり。あたしのことなんてどうでもいいんじゃない」

「佑月お前何言って……」

「あたしは、その女に裏切られて居場所を無くした。だからもう二度と他人と深く関わらないようにしようって思った」

強い口調で宏を制して佑月は喋り始める。大きな瞳の視線の先はわたしを通り越して、李伊を睨んでいるようだった。

「でも宏があたしに居場所を与えてくれた。最後の居場所よ。……でもそれは嘘だった」

「……嘘って？」

「宏はあたしを追い出した。あの女と一緒に」

その瞳は、噛み付くほどに鋭かった。

続、

24、サイカイ - 3

「宏はあたしを追い出した。あの女と一緒に」

頭が混乱してきた。李伊と佑月と宏は同じ所にいたの？どうして？追い出したって何？

辺りを見回しても、わたし以外のみんなは表情をイチミリも動かさずに佑月を見ている。きっとこの中でわたしだけが理解出来ない。矢田だって知らないはずなのに。

「宏にとってあたしは代わりだったんでしょ。好実の代わり、それから李伊の代わり。ずっと前からあたし自身には何の価値もないの。あたしの居場所なんて、あるように見えてただけで、本当はどこにもなかった」

あんたのおかげで踏ん切りが付いたわ、と佑月は、李伊に向けてカラリと言葉を放った。

澄んだ夜空から遠い地面へと滑り落ちる風の行く先に目をやる彼女の横顔からは、どこか穏やかな雰囲気すら漂っている。フェンスの向こう側は、なんだかこっちよりもゆっくりとした時間が流れているようだ。

「俺は代わりだなんて思ってた……」

「もういいよ、そういうのは」

ゆったりと流れる時間に逆らうように、急に跳ねたように宏が口を開いたけれど、佑月はまるで聞き入れなかった。

「あの女と手組んであたしを追い出したクセに。追いかけてもこなかったクセに。目も合わせてくれなかったクセに！」

最後の方は泣きそうになるのを隠すために張り上げているみたい

だった。シンとした夜にキインと響く佑月の声。勢いはどんどん増していく。

「李伊が好きなら好きって言いなよ！ あたしが邪魔なら邪魔って言ってよ！ ……あたし一人で馬鹿みたいじゃん」

小さくしぼんだ声は、微かに震えていた。宏は何も答えない。わたしの知らないところで起こっていた事実が色々ありすぎて、ついていけない。どうやら宏は佑月ではなくて李伊が好きみたいだ。でも一体いつからだろう。わたしに愛してるって言ったのが本当だとしたら、恐らくあの日以降からなんだろう。宏が嘘を付けない性格だってことは、このわたしがよく知っている。ということは、佑月に構っていたのはただの気の迷いだったってことかな。

正直な話、わたしは宏に呆れていた。わたしに愛を囁いてすぐに他の女に移りした上、わたしには一切関わろうともしなくなった彼に。ああやリ逃げされたただけか、そういう男だったのか、と、幾度となく自分の見る目に病んだものだ。

でも宏が発したのは意外な言葉だった。

「俺には佑月も李伊も大事だ。それは嘘じゃない。だけど、……想い続けてるのは好実だけだ」

まるで答えになっていないと思った。宏の考えがわたしにはわからない。ただ混乱が大きくなるだけで、わたしは何も言えなかった。

「……好実の繋ぎってわけだ、じゃああたしになんか構わないで欲しかった」

「佑月、あのね、……」

「好実は黙ってて」

ぴしゃりと閉められて口をつぐんだ。特に言いたいことがあったわけではないけれど、きつと佑月は宏を誤解している。

「佑月ちゃん、」

今まで黙って話を聞いていた矢田がするりと言葉を挟む。どうして矢田の声は、何の違和感も感じさせずに周りの空気に溶けてしまえるんだろう。

「このみは僕のものだから、その心配はないよ」

その清々しい言い方はわたしの頭の中をぐるぐるとたくさん回って、酔いそうになった。李伊は自分には関係ないことだと判断したのか、静かに腕を組んだ。

「好実と宏は結ばれないってこと？」

「そう、僕がいるから」

ね、と矢田はわたしの方を向いて笑った。顔が引きつって、自分が今どんな顔をしているのか想像がつかない。わたしは宏を赦したい、それは本心だ。だけど矢田を壊してしまうことなんて出来ない。

「……好実はいいな、みんなから構われて。あたし、好実みたいに なりたかった」

少しの沈黙の後に、ポツリと佑月がそんなことを言った。わたしは一度だってそんな風に思ったことなんてないのに。わ

それに、と佑月は続けた。

「あたしは事件のこと知らないけどさ、きつと好実の為なんですよ。分かるもん、そういうのって」

ちよつと羨ましいとも思ってたぐらいよ、と佑月は矢田の目をちらりと見て皮肉な笑みを浮かべた。

目の前の宏の表情は固まったまま動かない。ねえ、今何を考えているの。

「俺には、……わからない」

斜め前から力無く飛んでくる声は、酷く掠れていた。

「俺には、それが人を、直を……殺す理由になるとは思えない」

緩やかに吹き続けていた風がぴたりと止んだから、李伊が、え、と小さく声を漏らすのが十分な大きさに聞こえた。

「え……ねえ、……どういうこと？」

李伊が声を潜めて聞いたのは矢田本人だ。矢田はわたしに言った時と同じように、ふわりと笑う。そして言った。「畑上はね、僕がヤツたの」

背筋がぞうつとして、鉛の入ったままの胸が重みに耐えられないというように、じりじりと凹んでゆく。どうしよう、もうすぐ穴が開きそうだ。肺が上手く機能してくれなくて、空気が吸えない。わたしは下を向いたまま動けずにいた。

矢田を人殺しにしてしまったのはわたしだ。

「え……いや、あの、え？ 嘘でしょ、だってどうし、て……」

李伊は相当うるたえているようで、息が浅くなっているのが分かる。そんな李伊の言葉が聞こえた途端、わたしの肩をこつこつした、それでいて美しい矢田の手が掛かり、力強く引き寄せられた。

「こいつの為」

嫌だ嫌だ、どうしよう、どうしよう、どうしよう。 もうこの

場では、宏に「いいよ」なんて言えなくなってしまった。

わたしのせいで、みんなが狂っていく。わたしのようになりたいだなんて、佑月も狂っている。

李伊がわたしを見る目が変わったのが分かった。哀れみの視線だ。矢田はそれに気付いているのかいないのか、李伊に向けて更ににこりと微笑む。

「本当は卒業してすぐでもよかったんだけどね、宏雪に彼女が出来ちゃったからさ」

「……え？」

李伊の表情が固まった。

「誰か寄り掛かる人がいたら絶望感って薄れちゃうし、別れてからしばらく経った今ぐらいの時期がちょうど良かったんだよね」

李伊の元々大きい目は更に大きく見開かれ、瞳はうろつろと定まらなくなった。

「矢田あんた……知ってたの？」

「さあね」

涼しい顔で微笑みをたたえる矢田だけが、落ち着いた普段の息遣いだった。

「あたっ、あたしがっ、宏……あの、ひ、ろ……」

李伊の震える声は、確実に宏を必要としている。フェンスを隔てたところに立ち尽くしていた宏はハッとしてフェンスを越えると、李伊を強く抱きしめた。

「ひ、ろ……あたし、あのっ……」
「お前のせいじゃない」

力強くはつきりと宏は言い切った。李伊が泣いている。宏の腕の中で。こんな状況にも関わらず、李伊が羨ましいと思う自分がいた。だって大きな安心感に包まれる心地よさを、わたしは知っている。

矢田を見ると、さつきとは違う冷やかな目で彼等を見ていた。高校の時、試合で良いタイムが出た時の矢田の弾けるような無邪気な笑顔を思い出す。タイムが思うようになかったとき、悔しさに任せてじだんだを踏む矢田を思い出す。彼は一体どこに行ってしまったんだろう。

続けてわたしの視線は、フェンスの向こうに一人残された佑月に向く。二人が抱き合う様をぼんやりと見ていた佑月は、わたしの視線に気付いて少しだけ笑った。

駄目だ

わたしの脳から指令が出されるより前に、わたしの体はフェンスを飛び越えていた。屋上とは逆の真っ暗な空間に体を向き直った佑月に、わたしは急いで抱き着く。

「だめ！ 佑月！ だめ！！」
「離して！！」

佑月の手はわたしの体を引きはがそうと必死だ。わたしの腕はそれ以上の力で暴れる佑月を押さえる。

「おい！ やめろ！」
いつの間にかフェンスを越えてきていた矢田が佑月に手を伸ばし

た時だった。

「……え？」

久しぶりに聞いた矢田の大声に、一瞬気を許してしまったわたしが原因だと思う。力いっぱい振り切られた佑月の腕にわたしの体が押し負けて、

わたしは空を飛んだ。

続、

24、サイカイ - 3 (後書き)

最近更新が遅れ気味です。申し訳ありませんorz のんびりお手ください。

25、届かない

ぶつりとあたしから電話を切った。なによ、なによ。

違うよ、誰も……

嘘つき。

少し強い風が向こうの方から駆けてきて、あたしの顔にぶつかる。風にとつても障害物であるあたしは、もうどこにも逃げ場がない。

早く。仲間の元へと行かないと。あたしは今、本当に独りだ。カツカツと鳴り続けるヒールの音を少しだけ速めて、目星を付けたビルへと向かう。近づくにつれて、なんとも言えない際立つ虚しさが募るのは、そのビルから溢れる雰囲気のせいだ。大きくて無機質なオフィスビルに挟まれたその細長いビルはなんだかちっぽけで、一つだけ取り残された生き物のように見える。あたしと同じだ。

下沢ビル、と彫られたプレートを横目で見て、真っ暗なビル内へと歩を進める。群れていた時のあたしなら、暗くてこわーい、お化け出そうー、なんて言って、側にいる誰かにくっついていたいと思う。でもあたしは一人。そんなこそばゆい芝居なんかしなくても、もう何も失うものなんてない。もしここでお化けや幽霊に出会ったとして、取り付かれて殺されたとしても、あたしはむしろその人たちに感謝の言葉を述べたいと思う。だってそれなら人生の最期は独りぼっちじゃない。

エレベーターは無く、入ってすぐのところの階段がずらりと規則正しく並んでいる。見上げると、真っ暗闇のなかで、一階と二階の

ちょうど半分の地点でちかちかと切れかけの電球が怪しく光っている。しん、と静まり返り風も通らない空気の塊の中で、電球が付いたり消えたりする音だけが、嫌にはつきりと耳に触る。この華奢なビルは、一体どれぐらいの高さがあるのだろう。小さな気合いを入れて、階段に一步目の足をかけた。

ヒールが階段に当たる音が静かなビル内に大きく反響している。上り続けるあたしの足は、もう疲れた、と文句を言うし、運動をしなれてない息は荒くなる一方で、階段は少しだけ騒がしくなる。

上り始めてどれくらい時間が経ったのか分からないけれど、やっと上り切った向こうにドアが見えた。壁に手を付いて、息を整える。長年放っておかれたのであろうその壁はあたしの皮膚に馴染まず、妙にざらざらした手触りを与える。ふつつ、と勢いよく息を吐いて、階段を上った。

その鉄製のドアは、暗闇の中にひっそりと佇んでいた。人が自分を押し開けることを拒んでいるみたいで、ひどく錆び付いている。明かりが着いていたらきつと蜘蛛の巣だらけなんだろうな、と思ったが、見えない今は確認のしようがない。

「あ、」

はたと気付く。鍵がかかっていたらどうしよう。また階段を下りて違う場所を探すか、いや、階段で転げ落ちて死ぬのもありかもしれない。わざわざ戻るのも面倒だし、さっさと空へ行ける。お化けか幽霊が出て来てくれるのが一番ありがたいのに。

でも出来ることなら、もう一度地上から空を見ておきたいとは思うけど。なんて小さく呟きながら、ドアノブにそろり、と手をかける。良かった、蜘蛛の巣はかかってなかったようだ。くるりと回す。右手にぐっ、と力を入れると、重みのあるドアはギイイと軋むような泣き声を上げて、あたしと外を繋いでくれた。

建物の中の暗さに比べると外の暗さなんて全然明るくて、ただっ広い透明な黒が、あたしを見下ろしている。すうつとした冷たい風が鼻から入って、熱くなつた体中を駆け回るのを、ぼんやりと感じた。

体力の無い疲れ切つた両足は、ふらふらと頼りなく前に進む。少し高めのフェンスまでたどり着くと、両手を掛け、えいっ、と力を入れた。

「うわ、」

デニムのスカートのせいで足がうまく上がらなくて、バランスを失うあたしの体。ふっ、と体が浮いたような気がして、あたしは慌ててフェンスを掴んだ。

ハアハアと息は荒く、心臓のドクドクが全身に伝わる。それは一瞬で、あたしはそんな自分に驚き、呆れ、そして恐れた。

死ぬのが怖いと、思ってしまった。

意外とがっしりとした造りのフェンスは知らん顔で、呼吸が荒いあたしを冷ややかに見つめる。フェンスをしっかりと掴んだままの手は、少し震えていた。

はあ、と長い息を吐き、あたしは上を見上げる。星は見えなかった。

意気地無しのあたしは、このまま死ねないのだろうか。空にいる大勢の人達の仲間にはなれないのだろうか。もう誰にも寄り掛かることのない、たった一人のあたし。空はどこまでも暗くて遠くて、手を伸ばしてもまるで届きそうにもなかった。ついさっきまではすぐそこにあつたのに。

ふと無表情であたしを押し倒す宏の顔が浮かんた。彼は空みたいな人だと思う。何とも思っていない時に近付いてきて、あたしがそれ

を意識すると同時に、同じスピードで離れていくのだ。あたしに覆いかぶさる宏の真っ黒の瞳には怯えるあたしが映っているだけで、宏の感情なんて微塵も映されてはいなかった。あの黒の向こうを、あたしは知らない。ねえ、一体何を考えているの。

このみ

彼が初めてあたしを抱いたあの時、宏が愛しそうに呼んだ名前があたしじゃなく好実だったことは、その時のあたしにとってはどうだったよかった。だけど今思えば、宏の中にいたあたしはあたしじゃなくて、じゃあ宏にとつてのあたしはなんなんだろう。そもそもどうしてあたしに手を差し延べたの？

フェンスに背を向け、足をコンクリートの途切れたその向こうに投げ出して座る。ぶらぶらと空中をさまようあたしの両足に引っ掛かっている真っ赤なピンヒールが、なんだか妙に重力を感じた。

ぼんやりと目の前に広がる建物だらけの地上。この中で狭苦しく生きているあたし達は、上から見れば見るほどちっぽけなものなんだろうなあ、なんてそんなことを思って、目を閉じた。

続、

26、届く

あたし達なんて、ちっぽけなものなんだろうなあ。

目を閉じたまま、涼しい夜風を目一杯吸い込む。体全体に回りきると、あたしの熱と水分を含んだ吐息が口からたくさん出て行った。吹いてくる風があたしの吐息をさらって、頭の上に広がる透明の黒に溶けていく。吐息と共にあたしもさらって欲しいのに、あたしの体重と地球に繋がれた重力が邪魔をする。邪魔する重力の一部である足に固定されたピンヒールを脱いで隣に並べると、それだけで幾分体が軽くなった気がした。

ぶらぶらと裸になったあたしの足を少しだけばたつかせる。すうつとした空気が熱を吸い取ってゆく。ふと隣にあるかかとの高いピンヒールに目をやった。さっきの自分によって律義に並べられたそれは、まるで遺書と共に置かれているような、此処で一人の自殺志願者が死んだ、という典型的な痕跡に見える。あたしは死ぬ為にここに来たはずなのに、いつまでこうしているつもりなんだろう。

屋上に来てからどれぐらいの時間が経ったのかわからない。時計は持っていない、携帯は電源を切った、そして夜空の黒はあたしがここに来た時からにも変わらず、遠いながらもそこに在った。

空気が揺れた。微かに。ぐるんと後ろを振り返ると、意外と遠くに屋上に繋がるドアがあったことに気付いた。ドアはあたしが来たときから開いたままのようだ。室内は外より全然暗いから、ドアの長方形だけが真っ黒く塗り潰されて見える。

「……え？」

長方形の黒から分離するもう一つの形があった。コンクリートを次々に蹴る音と共に、ぶれながらもまっすぐにこちらに向かってくるそれは、すぐに空からの透明さを取り込んで、あたしの知ってる人になった。

「……ひろ？」

「佑月！！」

あたしは裸足のまま立ち上がる。ざりざりしたコンクリートが素足に触れて、思ったよりもひんやりとした。フェンスのすぐ側まで走ってきた宏は、両膝に手について荒ぶる息と戦いながら、しっかりとあたしを見つめた。

「よかった……」

力無く笑った宏の目だけが、今にも泣いてしまいそうだったから。宏のアパートで感じた孤独感や疎外感や、何を見ているのか分からなかった機械的な宏が全て一つの塊になってとろとろに溶けて、あたしも泣きたくなった。ねえ、どうして来たの？

「……死ぬなよ」

呟くような宏の声が、あたしの耳に当たった。あたしは宏を強く見つめることしかできない。強く、強く。

「どうしてここが分かったの？」

そんな言葉しか出てこなかった。

宏はひよい、とフェンスを飛び越えて、さっきまでのあたしと同じように足をぶらぶらさせて座る。あたしも宏の隣に座った。

「探したよ、空が見えるところって死ぬほどあるから」

宏はそう言っ、先が見えない夜空を見上げる。一色だけの空に

は、星もないし雲もない。いや、空の色をした広い雲が、全てを隠しているせいかもしれない。宏、あなたは何を隠しているの？

「好実、聞いたの？」

「そうだよ、すげえテンパってた」

あたしの方を向いた宏の顔が、少し穏やかになっていたから、あたしも少し、頬を緩めた。

「でも好実、誰かと一緒にいたみたいだったから、あたしのことなんて気にしてないよきつと」

一瞬宏の眉間にシワが寄るのが分かった。

「……誰かって？」

「知らない。多分男の人だと思う。恋人かなんかじゃない？」

ふうん、と言いながらも、まだ何かを考えているような宏の横顔に向かって、あたしは一気に言葉を吐き出した。

「あたしのこと、どう思ってるの？」

人間は言葉無しで意志を伝え合う術を持たない。それはとても都合のいいことであって、とても不便なことでもあった。だから人間って面倒臭いのだ。だから人間って、難しいのだ。

空になれたら、と思う。空になれたら、全ては一つ。果てしなく大きくて果てしなく広い完全体の一部に、あたしはなれるのだ。個性なんていらぬ。違うところなんてない。同じ考え、同じ色に染まって、あたしの全ては誰かのものになる。でもそうになると、誰かを愛することも出来なくなってしまうんだろうな。

宏は少し考えるそぶりを見せた後、ゆっくりと丁寧に言葉を紡ぐ。「大切に守りたいって思う。側にいると安心するし。俺が俺でいられるのは、佑月のおかげなんだよ」どこまでが本当でどこからが嘘なのか、境目は綺麗に消されていた。宏の言葉は全部が本当に見

えてしまうからズルい。

「本当？」

「ほんとだよ」

優しく微笑む宏の手が、あたしの頭を撫でる。宏のその大きな手が、あたしに届いたことが嬉しくて、あたしは綺麗に笑った。それを見た宏の切れ長の目が更にきゅっと細まって、あたしはこの人が好きだったんだと思い直した。

「あのね宏」

「ん？」

誰からも必要とされないあたしを大切だと言ってくれた、居場所を無くしたあたしに温もりを与えてくれた宏を、宏を信じたい。嘘や偽りなんていらぬ。そんなものよりホンモノが欲しいと思うようになった今のあたしは、欲張りになってしまったのかな。全てを確かめるために、あたしは小さな賭けに出る。

「李伊のことが好きなの？ 愛してるの？ ……それとも、この…」

ボタン、と大きな音が静かな空気を乱れさせた。あたしの言葉は途中で切れて、今まで心の奥底に閉まっていたもやもやは、何倍にも何倍にも膨れ上がった。

そんな雑音なんて無視して、最後まで言っ飛ばせばよかった。

それがどんな答えだったとしても、あたしがあたしである今のうちに、聞いておくべきだったのに。

続、

27、届いてはいけない

ボタンと響く大きな音が、あたしの言葉を遮った。
振り向くと、何人かの人影が見える。

誰？

あたしは立ち上がる。さっきの宏と同じように、駆けてくる人物がいた。

「佑月っ！」

ガシャン、とフェンスにぶつかるその人は、唯一あたしが連絡をした人物だった。ハア、と大きな息を吐き出した彼女は、冷たいフェンスに手を掛けてあたしを見つめる。

「好実……」

「佑月、ごめんね。心配したよ」

「うん」

さらりと放たれる謝罪と同情の言葉を、あたしの耳は大人しく飲み込んだ。

好実もあたしを探してくれていたのかな。あたしのことを、気にかけてくれたのかな。そんなことを思うと、自然に笑みが零れた。ふわふわした気持ちになって、隣に立っている宏を見上げる。

気持ちは一気に萎えた。

なんだ、やっぱり。……あたしじゃないのか。

宏がこんなに人を愛しそうに見るのは、きつと二度目で、そんな

宏に対してこんなに心が疼くのは、きつと初めてだ。上がりかけていた口角が、ストンと下がった。

初めてその瞳を見たのはあたしが最初に抱かれた時。宏があたしを「このみ」と呼んだ時。泣きそうな声の中に込められた「このみ」に対する欲情が、あたしの肌の上を滑る。宏の瞳は目の前のあたしなんか映してはいなくて、ただゆらゆらと揺れていた。まだあれから一日も経っていないことに気付いて小さく驚く。一日って長すぎる。

大切に守りたいって思う。

……それも、嘘、か。

後ろの方から残りの二人が掛けて来て、好実の後ろで止まった。李伊と、矢田だ。

矢田？

あたしは混乱した。

畑上くんを殺した矢田が、どうしてこんなところにいるんだろう。どうして誰も触れないんだろう。好実の近くにいる矢田の存在は、まるで自然すぎる。

高校の時、当たり前のように矢田と好実是一緒にいた。二人が付き合っけるとか付き合ってないとかいう噂はいつもあつたけれど、それでもやっぱり好実と言えば矢田だったし、矢田と言えば好実だった。

それなのに。

「……申し訳、ありませんでした」

深く頭を下げる宏は、何かを強く覚悟したようだった。宏の目の前に立っているのは好実だ。あたしのことなんか、もうとくに忘れていようで、みんなみんな、あたしの為に来たわけじゃないみたい。始めから、あたしはいなかったみたい。冷たくて温い夜風があたしの頬を撫でて、続いて隣にいる宏の髪をなびかせる。

好実はいばらくの間真っ直ぐに宏を見下ろしていたけれど、思い付いたように口を開けた。

「頭、上げてよ。もう……」

「僕は許さない」

今まで黙って聞いていた矢田がいきなり口を挟むから、穏やかになりかけていたあたし達の周りに潜む空気は、一気にピンと張り詰めた。

許さない、だって。そんなことをきっぱりと言い放たれる好実が、あたしの憧れだった。一度でいいから、そんな風に思われたかった。詳細はよくわからないけれど、きっと矢田は好実の為に動いているんだろう。そして宏は、その原因だったのだろうか。好実を、自分のものにしたかったのだろうか。でもできなかった。だから李伊を好きなの？

じゃああたしは？

どうだっていいのかな、……どうだっていいのか。
頭の回転がぐるぐるとスピードを増して、増して、増して、
そしてプチンと切れた。

「ゆっ……」

「うるさい」

思い出したかのように好実があたしに向かって呼びかけた言葉が、あたしに惨めさを突き付ける。可哀相な子を勇気付けるような言い方なんて、余計に可哀相に見せるだけだ。あんたには分からない。困るほどにみんなから構われるあんたには。

嘘つき。嘘つき。みんな嘘つき。あたしのことなんて誰も見てない。

よくそんな嘘付くね。李伊の体操服も財布も盗んだくせに

ハルカの癖のある声が緩く吹く風に乗って、あたしの耳の奥で弾ける。あたしは嘘つきじゃない。あたしを陥れたのは李伊だ。全ての元凶はこの女だ。なのに、それなのに。

どうして李伊は愛される？

どうして李伊は平和に暮らしている？

宏はあたしを助けてくれたんじゃないの？結局宏は李伊のものだったの？

じゃあどうして助けたの？

あたしの口は止まることを忘れてしまったようで、心の中で大きくなつたモヤモヤを、目茶苦茶に切り裂いた。

「俺には佑月も李伊も大事だ。それは嘘じゃない。だけど、……想い続けてるのは好実だけだ」

不意に宏がそんなことを言った。宏の言葉はとても率直で、透き通るように綺麗だったけれど、薄汚れたビルの屋上の空気とは桁外れに浮いて見えた。何が言いたいのか。あたしに飛び降りて欲しいのか？

あたしは最初から、代わりだった。代わりは本物の前では意味を成さない。そんなこと分かってる。そして本物が現れた今、あたしはもういない。

黒い瞳の向こうに、あたしは最初から届くだけの手の長さを持っていたいなかった。届くはず、なかったんだ。

「このみは僕のものだから、その心配はないよ」

矢田があたしに優しく諭す。そんなことどうだっていいの。あたしは心が欲しいの。

矢田は事件を起こしたにも関わらず、この中の誰よりも平然としている。矢田にとってはこの世界の全ては好実なんだろう。

好実のようになりたかった。いつもみんなの中心で、好実の周りに人が集まる。それはあたしのように仮面を貼り付けているわけではなくて、だから余計に羨ましかった。そして誰からも好かれておきながら、自ら一人になりたがるそんな自由奔放な考え方ができるような環境にあった彼女に、自然体の彼女に、少しでも近づきたかった。

宏の口が動くのをぼんやりと眺めながらそんなことを考えていると、思いがけない言葉が飛んだ。

「本当は卒業してすぐでもよかったんだけどね、宏雪に彼女が出来ちゃったからさ」

矢田は、時期を見計らって宏に復讐をしたというのだ。李伊の表情が瞬く間に青ざめてゆく。矢田は好実の為にそこまで思い詰めていたのだろうか。矢田に抱き寄せられている好実は、下を向いていた顔をがばりと上げ、目を丸くして李伊を見ている。李伊が震えている。こんな形で彼女に制裁が下るなんて。

そんなことを考えたのもつかの間、あたしと二人でみんなとフェンスを隔てていた宏が勢いよくフェンスを越えて、李伊を強く抱きしめた。向こうへ行ってしまった。ひろ、ひろ、と彼を呼ぶ李伊の声が宏の腕に包まれて、か細い泣き声に変わる。

李伊には宏を引き付ける何かがあるのだ。あたしにはない何か。欲張りなあたしは、李伊のそれも欲しかった。

でも持ってない。あたしは何も持ってない。

あたしには、宏の奥まで届くような手の長さも、どこからでももぎ取ろうとする力強さも備わってはいない。

届いては、いけなかったのだ。

だからあたしはいなくなろうと決意したのに。

たくさん仲間の一人になると決めて、大きく静かに息を吸い、足を踏み出そうとしたのに。
なのに。

気付いた時には、あたしの腕は好実を吹き飛ばしていた。

あたしはずっと、好実のようになりたかった。

続、

28、固まる

どうしてこうなった？

＊＊

本当に久しぶりに好実を見た。彼女は高校の頃からあまりにも変わっていない。屋上に繋がるドアから一直線に駆けて来た彼女の目にはなんの迷いもなく、そんな彼女の横顔を見ている俺の想いも、真っ直ぐに届いたらいいのに。

こんなにも思い続けていた彼女が急に目の前に現れたという事実が、そして俺と彼女を突き合わせた皮肉な事件が、頭の中央を陣取って俺を固まらせる。目だけは貪るように好実を見ていた。今までの餓えを取り戻すように。

不意に好実の目が俺に向く。長い睫毛に縁取られた瞳。心の奥から溢れ出すなんともいえない感情に俺はあっさりと押し負けて、泣きそうになる。

「……好実」

その声を聞いて初めて、自分が言葉を発したことに気付いた。無意識の内に俺の身体は彼女を欲しがっている。周りなんて見えない。彼女以外、見えない。

もう一度口を開く。今度はちゃんと自分の意志で。言わなきゃいけないと思いながら、ずっと言えなかった言葉。口に出して自分で認めてしまうのが怖かったはずなのだけれど、ついさっき好実から

電話が掛かってきた時にもうすでに覚悟はできていたから、電話の時ほど苦しくはなかった。むしろ早く伝えたかった。許してくれなくてもいい、一生好実の前で怯え続けるわけにはいかない。

「好実俺……」

「わたしもごめん」

「……え？」

俺の言葉を遮るような、俺より一回り大きな好実の声が、静かな夜に響いて溶けた。あの日のことは全て、俺の中で暴れた嫉妬と言う名の獣のせいであり、抑え切れなかった俺自身のせいだ。何言っただよ、好実が悪いわけじゃないか。好実はただ

「わたしがちゃんと宏のこと見なかったから……だから」

言葉に詰まる彼女を見つめる。そんなの。そんなの、お前が悪い理由になんてなるわけないだろ。なんでだよ。どうしてお前が自分を責めるんだよ。苦しそうな顔するんじゃないやねえよ。全部俺のせいだって言えよ。

「好実」

泣きそうな彼女をこれ以上見ていられる自信がなくて、俺はもう一度彼女の名前を呼ぶ。温いけどどこか涼しさをも含む夜の空気を吸い込む。

「本当に俺どうかしてた。……申し訳、ありませんでした」

大きく頭を下げる。少しの間、沈黙が続いた。この辺りではかなり空に近いこの場所には虫の音も届かないし、時々吹いていた風も流れるのを止めた。

「頭、上げてよ。もう……」

「僕は許さない」

遠慮がちに発された好実の声に被さったよく通る涼しげなその声は、頭を下げたままの俺を押さえ付けた。息が、浅くなる。

今まで止んでいた風が、また緩く流れ出す。押さえ付けるその声に逆らうように、頭を上げて矢田を見る。さっきまで好実と俺しかいなかった視界に急に割り込んで来た矢田に、俺は反論する術を持たない。

許されないと思う。許されてはいけないうと、思う。俺には彼女を愛する資格も、ないのかもしれないけれど。でも。それでも。止まらない愛情と欲望を、俺はどうしたらいい？

「あの、あたし何にも分かんないんだけどさ、とりあえず二人ともこっち来なよ。落ちちゃうよ」

高めの李伊の声が耳に入ると共に、急に視界が広くなった。そうだ、今俺はフェンスを越えたところにいるのだ。そして俺達は、佑月を死なせまいと此処に集まったはずだった。隣にいる佑月に目を向けると、どこを見ているのかわからない彼女の瞳は、ひどく虚ろだった。

好実が声を掛けたが、突然現れた佑月のきつぱりとした「うるさい」の一言に、ここにいる全員が息を潜めた。

「結局好実ばかり。あたしのことなんてどうでもいいんじゃない」「佑月お前何言って……」

「あたしは、その女に裏切られて居場所を無くした。だからもう二度と他人と深く関わらないようにしようって思った」

一度開かれた佑月の口は、止めようがなかった。俺が知る彼女は、自分のことを話そうともしない人だったから、まるで誰かが乗り移ったようにも見える。ふと、好実と仲良くなるきっかけになった高校の屋上を思い出した。女の人ってどういう考えで本当に突然本音が溢れ出すんだろ。そんなことを考えてすぐ、自己嫌悪に陥った。

俺だってそうだったじゃないか。

感情と本音。言葉で伝えられる彼女たちの方が何倍も、俺より優れているというのに。

「宏にとつてあたしは代わりだったんでしょ。好実の代わり、それから李伊の代わり。ずっと前からあたし自身には何の価値もないの。あたしの居場所なんて、あるように見えてただけで、本当はどこにもなかった」

すぐに言葉を探せなかった。

「代わり」？

代わりなんかじゃない。人は、誰か他の人が代わりになれるようなそんなに薄くて軽いもんじゃない。お前は俺を繋いでくれていただろ。そして俺も、お前を繋いでいたんだろ？ そう言っただじゃないか。俺とお前はお互いがお互いであるために、必要不可欠な存在なんだよ。

そう言いたかったのに、佑月は俺の発言を認めてはくれなかった。佑月の本音は勢いが増して、叫び声に変わりつつあった。

「あの女と手組んであたしを追い出したクセに。追いかけてもこなかったクセに。目も合わせてくれなかったクセに！」

佑月の瞳が睨む先には、李伊が静かに立っている。俺は何も言えなかった。佑月が再び家を訪れたのはついさっきのはずなのに、遠い昔のことのようだ。俺達はこの数時間のうちに、どれだけ年をとってしまったんだろう。

どうしていいか、……わからなかったんだ。

＊＊

佑月が俺の家を出て行った時ほど、一人が淋しいと思ったことはなかった。だからすぐに李伊を呼んだ。李伊が俺の家に着いた時ほど、人に甘えたいと思ったことはなかった。

「あはは、どうしたのよ。そんなに淋しかったの？」

ドアを開け、李伊だとわかった瞬間に抱き着く俺に優しく腕を回し、ぽんぽんとあやすように背中を軽く叩く彼女は、事情を何も知らないただの元カノで、そんな彼女に縋る俺は、ただの元カレだ。事件には何の関係もない、ただの男と女だ。

「シャワー借りるね、一人で待ってるの嫌なら一緒に入ってもいいけど」

そう言っただけで笑う李伊は俺のことをどう思っているんだろう。別れた原因は喧嘩ではなかった。別れを切り出したのは李伊からだったけれど、そんなことは関係なく、ただ、お互いがお互いに興味が無くなったのだった。そんな終わり方だったから、必要としたりされたりすることが、余計に新鮮に感じるのかもしれない。

「だってお前、二人は狭いって文句言うじゃん」

「あはは、覚えてた？」

「当たり前」

ここで待ってるから風呂入ってきなよ、と俺が言うと、李伊は微笑みを残して風呂場へと消えた。

李伊という時の空気が、俺は好きだった。高校を卒業してすぐ、彼女から付き合っただけだと告白された。好実との一件が頭にこびりついて、事実から逃げていた俺は、ふわふわと浮いたまま、OKの返事を返したのだった。

気が強く明るい彼女は、俺の気持ちが彼女に向いていないことに

すぐに気付いた。問い詰められ、正直に、昔好きだった女が忘れられないと嘆く俺を彼女は癒し、叱り、そして優しく包み込んでくれた。

彼女の前にいる俺は、何の罪も持たない、昔の女にまだ好意を抱いている、そんなありふれた男で、最低な自分とは無縁の、彼女に甘える彼氏でしかなかった。李伊は俺に安心をくれた。

そんなある時、俺の携帯にメールが入った。卒業と共に連絡が途絶えていた、高梨佑月だった。入社したばかりの会社でも人間関係はうまくいっていないようだ。好実とのがあつた後、ずいぶん救われた佑月だったから、見捨てることはできなかった。

俺の心は、誰かを傷付けるということに、人一倍敏感になっている。そしてあの時学校の屋上に続く階段で感じた李伊とは違う心地よさを、俺の頭は確かに欲しがった。

支えが複数になると、俺が抱える重さも軽くなり、自分も助けになれるという満足感が得られる佑月に、次第に心が傾いていったのだった。李伊も李伊で、そんな俺に物足りなさを感じているようだった。

必要とされ、されることが、李伊と俺を結ぶものだった。そしてそれがそのまま、愛情へと変わってゆくのだと、俺は思っていた。

シャワーを浴び終わり、バスタオルで髪を拭きながら戻ってくる李伊に俺は笑顔を向ける。李伊も、そんな俺を見て、きゅっとかわいらしい笑顔を見せた。

インターホンが鳴ったのは、その時だった。

続、

29、ひび割れ

インターホンが鳴った。

シャワーを浴び終わった李伊が早速玄関に向かおうとするのを引き止めて、俺がインターホンに出る。

好実とのがあつてから、俺は付き合つてるとか付き合つてないとか、そういうのはただの表面上の名目だと思つていたのだが、この状況を前にした理性的な俺は、やっぱり少し、戸惑っているようだった。

ひろ、とインターホン越しに呼びかけるその声が、俺の息を潜ませた。聞き間違いかと思つた。ついさつき出て行つた佑月がこんなに早く戻ってくるなんて、想像出来るはずがない。

李伊と佑月の関係をよく知っている俺だから余計、どうしていいかわからない。思考が停止した空っぽの頭に真つ先に浮かんだのは、彼女たちを突き合わせてはいけない、ということだけだった。

佑月に冷たいと思われるかもしれない。だけどそんなことより。そんなことより。

彼女がまたあの頃に戻ってしまうことが、俺は何よりも怖かつた。

時が止まったのは俺の中だけで、俺の様子に興味を持った李伊は真つ直ぐに、外の廊下が見えるカーテンを引く。

気が気じゃなかった。早く帰さないで。佑月、ごめん。あとでちゃんと説明するから。

佑月と目を合わせる勇氣はなかった。きっぱりと「帰れ」と言い放つ勇氣もなかった。俺は足早にドアノブに手をかける。これでよ

かったんだ、と、自分に言い聞かせかけた時だった。

「佑月、久しぶりだね、上がりなよ」

すぐ後ろから飛んだその声に、びくんと体が反応する。

「ちょ、お前何言って……」

「いーじゃん、せっかく来たんだから」

無邪気な子供のように、わくわくを滲ませた笑顔で俺を押さえ付ける。結局李伊に押し負けた形となって、佑月は部屋に入ることもなかった。

ベッドに背中を預けるようにして、俺は床に敷かれたカーペットに座っていた。ちらと本棚辺りに目をやる。佑月与李伊が俺に背を向けて、そこに置かれた写真について喋っているのが視界に在った。竜樹は、ほんの二週間くらい前に家に来たばかりだった。特に何を話すということもないのだが、一ヶ月か二ヶ月ごとにふらりと俺のアパートを訪れる竜樹を見るたびに、変わらない関係に一息着いた。今日この場に竜樹が居てくれれば、俺はどんなに気持ち良かっただろう。

「ああわかった、宏あんた手え出したね」

いつの間にか隣に座っていた李伊のアーモンド型の瞳が楽しそうに、俺をくりと見つめる。俺はハッとして、瞬間的に横を向いた。思い出して、しまうから。

好実の白い肌。華奢な身体。さらりと動く髪。透明に流れる
涙。

泣くなつて。

衝動的に、俺の左腕に抱き着いてくる彼女の唇を塞いだ。彼女は

少し驚いたようだったけれど、くすりと微笑んで、もう一度唇をくつつけた。

濡れた唇から伝わる彼女の体温が、彼女のものである唾液が、俺のものになる。舌と舌が抱き合うように、何度も擦り寄る。彼女が俺から離れていないことを、近くにいないことを、これでもかとはかりに感じさせられる。

ふと、視線を注がれていることに気付いた。ぼんやりとした感覚の中で、彼女の頭越しに見たその顔はひどく無表情だったけれど、その時の俺に必要なことは深入りした感情などではなく、離れずにただそこにいる、ということだけだった。

「三人で遊ぼうよ」

李伊のワクワクに満ちたその声で、俺は完全に、その状況がおかしいことを知る。俺の頭は必死に逃げようとしていたのだけれど、さっきまでのまどろみが眠気のようにしつこく纏わり付いて離れない。見上げると、一步引いた目で俺を見下ろす佑月と目が合った。

途端に俺はどうしようもない恐怖に駆られる。身体の内奥でくすぐり続けている黒い煙は、たちまち大きく膨れ上がり、醜い獣へと形を変えた。

近くに居てよ。

「ほら、宏も立って」

弱さの塊であるその獣は、俺の腕を引いた彼女に真っ先に噛み付く。俺が俺じゃなくなる。なくなる。なくなる。

そして俺の中の俺は消えた。

＊＊

あの女と手組んであたしを追い出したクセに。追いかけてもこ
なかつたクセに。目も合わせてくれなかつたクセに！

怖かつたんだ。お前がいなくなるのが。俺から離れていくのが。
怖かつたんだ。

佑月の甲高く力強い主張に俺が反応出来ずにいると、彼女の口か
らどんな言葉は溢れ出て、夜の空気にはらまかれる。

「李伊が好きなら好きって言いなよ！あたしが邪魔なら邪魔って言
つてよ！……あたし一人で馬鹿みたいじゃん」

違う。邪魔なんじゃない。邪魔なわけ、ないよ。

「俺には佑月も李伊も大事だ。それは嘘じゃない。だけど、……想
い続けてるのは好実だけだ」

カラカラに渴いた頭から出された指令は、心で思つた答えとは全
然違うようだったが、修正する気は起きなかつた。口だけが別人の
ようにするりと紡ぐ言葉は、それでもやっぱり俺が一番気にしてい
たことで、言いたくて言いたくて仕方がなかつたことでもあつた。

ただ、この状況とは掛け離れ過ぎてはいたが。

好実の歯止めも虚しく散り、佑月がぼつりと好実への羨ましさを
伝えるのを、ぼんやりと眺めていた俺の耳は、次に発せられた言葉
で止まつた。

「あたしは事件のこと知らないけどさ、きっと好実の為なんですよ。
分かるもん、そういうのって」

蘇る昨日の矢田の笑みが、俺を突き落とす。なんで直なんだよ。あいつが何したっていうんだよ。関係ないだろ。お前……何考えてんだよ。

お願いだから、俺を殺せよ。

「俺には、……わからない」

矢田を真っ直ぐに見つめる。矢田は何にも思っていないようなくるりとした目で、舐めるように俺を見た。こいつをここまで変えてしまったのは、……俺なのか？

「俺には、それが人を、直を……殺す理由になるとは思えない」

そんな俺の発言を聞いて、表情を一つも変えないままの矢田に、小さく李伊が問う。その問いにふつ、と口角を上げた矢田がさらりと告げるのは、一番初めに俺が聞いたことだった。

そしてもう一つ明らかにされたそれは、耳を疑うものだった。

「誰か寄り掛かる人がいたら絶望感って薄れちゃうしさ、別れてからしばらく経った今ぐらいの時期がちょうど良かったんだよね」

ガクガクと李伊がおびえるのが、すぐに分かった。強張っていた顔が、みるみる崩れてゆく。俺を、呼んでいる。

他の誰でもない、俺の意志だった。壊したくなかった。

李伊の小さな身体を包み込む。ごめん、ごめんな。何があっても、これはお前のせいじゃない。

「ダメ!!」

切り裂くような好実の大声に反応した頭がびくんと踊る。さつき

まで俺がいたなんて信じられない程に細くて足場の無いフェンスの向こう側で、好実が暴れる佑月を必死に押さえている。

「ゆっ……」

「おい！止める！」

俺の反応よりほんの少し早く、矢田がフェンスを飛び越えて、佑月に手を伸ばした時だった。それは一瞬だった。

最後まで、俺が彼女のためにしてやれたことは一つもなかった。俺がずっと、狂おしい程に愛して止まなかった彼女は、その後一度も俺に触れることはなかった。

誰のものかわからない怒鳴り声と叫び声が響き渡る夏の始めの夜遅くに、好実はいなくなつた。

続、

30、碎ける

何が起こった？

「……え」

人の体がこんなにも、簡単に吹き飛ばなんて知らなかった。呆然とあたしを見た好実、ストーンとあたしの視界から消えた。

状況がまるで固すぎて飲み込めない。

「こっ……このみ!!」

一瞬凍り付いたあたし達の時間を一番最初に抜け出したのは矢田だった。真っ先にコンクリートの際から好実が消えた先へと身を乗り出した矢田が、ひっ、と小さく声を漏らしたのを、体全部で聞いた。

頭の重みが少し吹いただけの風によって、重心を探るようにふらふらする。足が三本あれば、バランスなんて考えなくてもいいのに。

「あ、……ああ、アアアアアアアア!!」

すぐ隣から聞こえたのは、吠えるような声だった。夜の町に響くそれは、矢田を壊した。

飲み込めない。飲み込めない。のみこめない。

そのくせにあたしの息は浅く、肩にはキツい程の力が入っているから人間って不思議だ。頭の反応が一番劣っている。

「お前が！！ お前このみに何してんだよ！！」

がばりと顔を上げ、突き刺す怒声と共にあたしを睨み付けるその顔は、あたしの知らない人だった。

「……あ、たし？」

「そうだよお前だよ！お前がこのみを殺したんだよ！このみを、殺したんだよ！！」

認めたくなかった現実。

そもそもさー佑月ってよく告られたとか言ってるけどほんとなのそれ

あたし佑月が告られてるとこ、ていうかアピられてるとこすら見たことないんだけど

あたしもだよ、えーマジ作り話？サイテー。まああたし信じてなかったけど！

まさか本気にしてないよね

誰にも心を開いてはいけなかった現実。あたしには必要性がなかった現実。現実。

好実を

「あああああああ！！！！」

とてつもない叫び声を発しているあたしは、もうあたしではなかった。叫んだ勢いでその場にしゃがみ込む。立ってなんていられない。息を全部吐き出すと同時に、それは誰かの涙へと変わった。歪んだ口から溢れ出る震える息と、崩れた顔を伝う涙が、自分自身を

守る唯一のもののような気がした。

頭がやっと身体の反応に追い付いて、その恐ろしさを意識したから余計に、身体はガタガタと大きく怯えた。

好実が死んだ。あたしのせいだ。　　あたしが、殺した。

心臓がはち切れそうなくらい大きな音を立てて、血液を入れて出してを繰り返している。肺が潰れそうなくらいにキュウウと縮んで、息が苦しい。

あたしは生きている。死ぬはずのあたしがまだここにいる。

いなくなりたかったのに。

「あ、ああ、……ああ、ああ……」

絶望感と無力感と、とてつもない罪の意識。自己防衛本能がまだ上手く発揮されていない剥き出しのあたしには、まるで成す術がない。力無く漏れ出る言葉にもならない声が途切れることなく作り出され、夜に吸い込まれ続ける。自分がいなければいいのに。

「おい」

すぐ隣から聞こえるのは矢田の口から発せられた乱暴な音で、あたしはゆつくりと、涙で汚れた顔を向ける。

「消えろよ」

固まった脳みそでは、理解が難し過ぎた。矢田の顔をただぼうつと眺めていると、横腹に靴の裏が押し当てられた。

耳からは理解できなかったそれに、体に直接与えられた感覚によってやっと気付いた。

「死にたかったんだろ？　ほら、死ねよ」

「……やつ」

「お前のせいなんだよ！！」

誰の声なのか分からないその怒声が、あたしを頭の内側からガン

ガンと叩く。押し当てられた靴裏に込められる力は徐々に強くなつて、あたしは思わず固いフェンスを握り、ぎゅっと目をつむった。こんな世界、見たくない。見たくない。見たくないのに。怖い。

死にたくない。

「おい！」

「止めろって！」

あたしの両手は、離さないとばかりにしっかりとフェンスを握っている。ガタガタと震えるあたしの上で、聞き慣れた声が矢田を止める。ビュウ、と強い風が吹いて、髪が靡いているのが分かる。

「お前っ……あいつが殺されてどうも思わないのかよ！」

「そりゃ思うよ……だって信じられるかよ、あいつが……」

「じゃあ……」

「でも、」

急に強い口調になった宏が矢田を押さえる。そろりと目を開けると、ぎゅっとつむっていたせいで、視界の端でちらちらとフラッシュのようなものが動いた。その限られた視界の中で、李伊から離れた宏は、フェンスの向こうから矢田を掴んでいた。

「……佑月まで殺して、どうするんだよ」

二日前までは、こんな会話なんて一生聞かないで生きていくのだと思っていた。それが今じゃ、あたしは立派な中心人物だ。今という状況でそんなことを簡単に考えれるあたしの頭は、どうかしているのかもしれない。

ここであたしが取るべき行動として一番正しく見えるのは、矢田の言う通り、あたしがいなくなることなんだろう。でもあたしはそれをする勇気も、覚悟も持っていない。じゃああたしはどうす

ればいい？

「じゃあ僕は何のために動いてきたんだよ！！」

あたしの思考の先に聞こえたのは、矢田の澄んだ声だった。

矢田が、愛する好実の為にずっと長い間積み上げてきたもの。それが一瞬でばらばらに砕けたんだ。こんなにも想い続けられて、やっぱり好実が羨ましい。

でもあたしが砕いた。

「お前……」

「僕は！！」

それだけ言つて、矢田は止まった。

「矢田お前……本当に、直を殺したのか？」

「え？」

突然舞い上がる思いもかけない発言に、あたしと李伊の疑問譜が弾ける。

静かな夜の中に、静かに拡散する宏の声の余韻が、あたし達を包んだ。

続、

31、カラ

消えた。

フェンスを隔てたところで、佑月と好実と、それから矢田が塊になっていた。それほど高くないフェンスが、分厚いガラスで出来た壁のように立ちはだかって、俺と李伊はただの傍観者になってしまっている。手を出すことも出来ないまま、まるで早送りの動画のようには動いた。

落ちる瞬間の好実が、矢田と佑月の間の隙間から半分だけ見えた。ついさっきまで手を伸ばせば届きそうな距離にいたはずだった好実が、ふわりと一瞬夜に浮いて、そして消えた。

恐る恐る伸ばした俺の手が掴んだ彼女は、もう幻と化していた。

空気を引きはがすような、矢田の深く重い叫び声が響く。まるで映画のワンシーンのようだ、まだその状況までたどり着いていない頭がふらりと回る。

いくら目を凝らしても、好実の姿は見えない。夜の澄んだ空気に、綺麗に混じってしまった。ちらりと李伊を見ても、俺と同じ様子で固まったまま動かない。

生と死なんて理不尽過ぎる。人の死が目の前で起こるなんて、そういう状況は俺達にはまだ早過ぎる。しかもそれが好実だなんて。俺がずっと想い続けてきた、触れる事も出来ないたった一人の女だなんて。

生きてるに決まってる、あいつが死ぬはずないと、頭の大半は

そう信じていた。たとえこのビルがこの辺りで結構な高さを持つていようが、真っ先に下界を見た矢田が柄にもなく怯えた悲鳴を上げようが、彼女が死ぬなんて、たった今なくなっただなんて考えられるわけがない。

だってまだ謝罪以外に何も話してない。まだあの笑顔を見てもいい。だってそれじゃ俺は、これからどうすればいい？これまでの彼女に対する想いと積もりゆく想いを、俺はどうすればいい？

俺の中身が消えてしまふ。空っぽになる。

「お前が！！ お前このみに何してんだよ！！」

矢田が佑月を怒鳴り付ける声が弾けた。

「……あ、たし？」

「そっだよお前だよ！お前がこのみを殺したんだよ！このみを、殺したんだよ！！」

震える佑月に構うことなく体全部で吠える矢田は、もうさっきまでの冷静さのカケラも無い。それは素の矢田が溢れ出てきているように見えたから、俺は少しだけ疑問を抱いた。

相変わらず俺の中では、好実には死に切れないままだ。俺の視界がらいなくなっただけで、もう会えないだけで。

もう会えないだけで。
もう、会えない。

「……好実」

口が微かに動いただけの音だったけれど、それに気付いた李伊は俺の顔をじつと見た。視線には気付いているのだけれど、首を動かす気にもならない。

カラになる。

地上にいながら中身が無くなった俺は、中身をいっぱい詰めたまま地上からいなくなった好実と正反対だ。この体を好実に差し出せるのなら、それで好実が完全体になれるなら、俺は喜んで消えるのに。中身も体も無くなった俺は、何の未練も無くソラへ行ける。

「死にたかつたんだろ？ ほら、死ねよ」

ぼんやりと見ていたその景色の中では、矢田の足がしゃがみ込んでいる佑月を押していた。フェンスにしがみついている彼女は、抵抗もせずただ縮こまっている。

「……やつ」

「お前のせいなんだよ!!」

矢田がまた大きく声を荒げたから、視界の端にいる李伊がびくつと動いた。

佑月のせい。そう言われればきつとそうなんだろう。直接好実に手をかけたのは、他の誰でもない、佑月だ。でも、そもその原因を作ったのは きつと俺だ。

俺が佑月に目を向けていれば。李伊を呼ばなければ。直が 殺されなければ。

目の前の状況をちゃんと見る。冷静さを失った矢田が佑月を足蹴

にしている。

「おい！」

「やめろつて！」

矢田の怒声を聞いた俺の口が勢いよく飛び出す。見ていられなかった。

好実がいなくなることすら実感のカケラもないのに、目の前で次から次へと場面が動いて、展開がまるで早過ぎる。感情が置いてけぼりをくらっている中で、佑月までいなくなるうとしている状況をなんとかしたかったのは勿論だったけれど、俺はこれ以上壊れゆく矢田を見たくなかった。直を手には掛けた男。俺達をぐちゃぐちゃに掻き回した男。憎んでも憎み切れないはずなのに、俺の頭のほんの片隅にいる高校時代の矢田が、ぎりぎりのところで邪魔をする。

＊＊

高二の夏の初め、屋上の一件があつてから仲良くなり始めた俺と好実に興味を持ち出したのが、好実の隣の席だった矢田俊喜だった。「お前等仲良いな」

それが俺と好実にとって、初めて聞いた矢田の声だった。騒がしい教室の上をずっと流れて溶けるような澄んだ声色で、気取ったところがない柔らかな印象を感じたのを覚えている。

「え、何あんだ」

すかさず好実の直球が飛ぶ。無駄な笑顔を振り撒かなくなった好

実は、自然で飾らないそのままの彼女をさらけ出すようになったのだが、彼女が放つ率直な言葉はどこか憎めなくて、寧ろより一層魅力を放っていた。

「え、僕のこと知らない？」

「知らない」

「矢田俊喜」

「ふうん」

「ごめんな矢田、こいつこんなやつなんだ」

穏やかな雰囲気醸し出す矢田をこれ以上困らせてはいけなと思った俺が、横からフオローを入れると、何よ失礼ね、と好実が膨れた。

「いいよ、飾らない人の方が僕も安心できるし」

そう言って笑う矢田を、俺は羨ましかったのかもしれない。

「矢田はどうして陸上やってるのさ」

そう聞いたことがあった。矢田はきょとんとした目で俺を見て、ちよつと笑った。自然に零れる笑顔が、俺を緩ませる。

「好きだから」

もつと具体的な答えを期待していた俺は、ただ矢田を眺めることしか出来ない。

「好きだから、それだけだよ。宏雪も走ってみれば分かるよ」

そう答える顔が楽しそうで、純粹に走ることが好きなんだと思わせられるには、十分過ぎる答えだった。

こいつも好実と同じだと、心で気付いた。飾りなんて要らないんだ。細々した言葉は使わない。率直に、思ってることだけ。

俺には無いものだから欲しくなって、俺には無いものだから羨ましさに負けた。

どこか好実と似た空気を感じる矢田が、俺は嫌いだった。

＊＊

喉の奥に引つ掛かる魚の小骨。ご飯を掻き込んでお茶を何倍も飲んで、飲み込めないから逆にうがいをしてみても効果はない。静かにしていても、小さなイガイガはちくちくと存在を主張して、俺は大人しく溶けるのを待つしかできない。

急にそんな感覚に駆られた。

続、

32、寝たふり

俺の手はしつかりと、矢田の手首を掴んでいる。フェンスを隔てた距離にあったから、手首を掴むので精一杯だった。それでも矢田は足裏を佑月から離して俺を見た。骨張った手首はごつごつとしていて俺の手首と似ているけれど、少し違うと感ずるのはきつと、俺の頭が矢田と自分をきつぱりと区別しているから。

「お前っ……あいつが殺されてどうも思わないのかよ！」

強く叫ばれたそれらの言葉は勢いよく矢田の口から飛び出して、真っ直ぐに俺の顔に当たった。それは俺のアパートを訪れた時のような怖いぐらいの穏やかさでも、冷え切ったような鋭さでもなく、。

矢田が一人の男として好実を愛していた愛情に比例するように溢れ出る人間臭さが、俺が彼女に対して抱いてきたものよりも大きなものに見えて、途端に虚しくなる。俺の方がずっと想ってきたのに、まだ実感が湧かないせいで矢田のように取り乱すこともできない。

「そりゃ思うよ……だって信じられるかよ、あいつが……」

あいつが死ぬなんて。間違いを侵して顔を合わせなくなつて、俺の核なる部分には好実の存在が隠れていた。壊してしまわないように、そして俺が起こした間違いに目を伏せる為に、大きな箱にそつとしまった後でロープで何重にもぐるぐる巻にして、大切に大切に今まで保管していた。それが今日一瞬にして完全に開かれ、手を付ける間もなく空気に溶けてしまったのだ。どうしてこんなことが起こったのか、どう反応したらいいのか、そして誰を恨むべきかすら、俺はまだ理解出来ていない。

ただ、好実に直接手を出したのは佑月で、だから一番わかりやすい犯人は彼女だと言う矢田の気持ちも、分からないと言ったら嘘になる。

「じゃあ……」

「でも、」

相変わらず食ってかかる矢田の声の先を塞ぐ。そう、でも。

怯えた瞳で遠慮がちに行く末を見上げる佑月では、俺達はどうしたって好実にかけた想いを消すことは出来ない。それは扱いの違いとかいうのではなく、元々違う人間であるのだから当たり前なのだ。もしここで佑月を責めて、佑月が死んだとして、矢田はその後どうするのだろう。そして　佑月まで無くした後の俺を、俺は想像することも出来ない。

「……佑月まで殺して、どうするんだよ」

佑月、という名前と殺す、と言う単語は、それぞれに異色を放っていて、それ等を並べて口に出すのは酷く億劫だった。そんな会話をしている自分が、しなければならぬ状況にいる自分が、どんな頭と分離してゆく。

俺に手首を掴まれたままの矢田は少しの間俯いていたけれど、急にガバツと顔を上げて俺の目を射止めた。

「じゃあ僕は何のために動いてきたんだよ!!」

その顔が何かを求めているように見えたから。

「お前……」

「僕は!!」

矢田の手首により一層力が入って、乱暴に俺の手を振りほどく。

しかし矢田がその続きを言う気配はなかった。矢田は何を、考えている？

私の考えだけど、直くんは殺されたのよ、絶対そうよ
まあ本当に？怖いわあ

畑上は僕が殺したんだ

本当か？

俺達は真実を知らない。知っているのは、矢田と直だけだ。
本当に矢田は「愛する好実の為に」殺人を犯した？
矢田はいつ、変わった？

「矢田お前……本当に、直を殺したのか？」

目を伏せ気味の矢田を強く見つめる。風が止む。誰も何も言わなかった。

重さを増し続ける空気を払いのけるかのように、軽やかに口を開けた矢田の言葉は、夜の黒の上を小さく転がる。

「そっだよ」

コロコロと転がした後、矢田は少しだけ笑った。あの荒々しさは

もう見当たらない。

「何、僕は人殺しじゃないって言ってくれてるの？」

皮肉めいた言い方と歪めた口元の中で、俺を見つめるその目だけが笑っていなかった。

「違うのか」

「殺したよ！」

張り上げられた声が、なんだか虚勢のように聞こえたのはきっと俺だけで、李伊がびくつ、と肩を震わせたのを感じた。

「どうやって」

俺の質問には目も合わせず、何の反応も示さないままで、矢田はまだ隣でしゃがみこんでいる佑月に手を差し出した。

「とりあえずさ、フェンス越えようよ」

「……え」

「ごめんね」

申し訳なさそうに、持ち前の人当たりの良い顔を佑月に向ける矢田の心が分からない、どこが本当でどこが偽りなのか。矢田本人には分かっているのだろうけれど。一番こいつに近かった好実なら、きつと見抜いているのだろうけれど。

突然の対応に佑月は戸惑いを見せたが、少し考えた後、恐る恐る矢田の手に自分の手を重ねた。矢田は手を引いて佑月を立ち上げらせ、フェンスの方を向かせる。ちらりと俺の方を向いた瞳はざらりと光って、ぼそりと呟いた。

「こんな風にさ」

佑月がフェンスに手を伸ばしたその瞬間、佑月の膝下辺りに、矢田のものすごい蹴りが入った。気を抜いていた佑月のバランスは簡単に崩れ、両足は後ろに払われた。

続、

33、残る

こんな風にさ

何が起こったのか分からない。ただ、足がコンクリートから離れたその瞬間、ガンツ、と額にものすごい衝撃を受けたから、あたしの頭はとうとう弾けたのかと思ったのだけれど、少し経って体が宙ぶらりんになっているのに気がついた。頭は割れそうに痛かった。

しばらく朦朧^{もうちゅう}としていた意識がはつきりし出すと、すでに感覚が麻痺した両足はどこにも着いていなかった。すぐ目の前に広がるのは真っ暗な空なんかじゃなくて、砂や埃でざらついた灰色だった。コンクリートのつぶつぶがすぐそこで揺れている。右腕が抜けそうだと悲鳴を上げた。上を見ると、李伊があたしの右腕を必死で掴んでいた。あたしの右腕がされるがままに命綱の役割をしているその姿はきつと不格好で、力の抜けた左腕と、尖ったコンクリートの際に当たるふとももの付け根以外は全て、空気の上で重力を感じていた。

額がガンガンとさつき受けた衝撃を繰り返すように痛む。きつとフェンスにぶつかったんだ。よかった、血のにおいはしない。人の体って大袈裟だ。

「ちょ……早く、重い」

李伊の声にハツとして、右腕に強く伝わる彼女の力を感じた。人の感触。生温い他人の体温。

あたしはやつと目を覚ました左手でフェンスにつかまり、まだ裸足のままだった足をコンクリートの上へと引き上げた。李伊はまだ

しつかりと、あたしの右腕を掴んで離そうとしない。

「李伊、もういいよ、ありがと」

「早くこっち来て」

ちらとあたしの隣に目をやって、李伊はまたぎゅっと力を込める。李伊の長く伸びた爪があたしの肌を刺激して、痕が残りそうだ。

右腕を掴まれたまま立ち上がると、くらくらは足元がふらつく。両足が笑える程に震えて、力がうまく入らない。李伊と宏の力に助けられて、やっとあたしはフェンスを越え、向こう岸に辿り着くことができた。

両足がフェンスを越えたところで李伊の力から開放されると同時に、力が抜け切ったあたしの体はぐにやりと崩れ、ざらりざらとしたコンクリートの上にぺたりと座り込んだ。頭がぼうつとする。打ち付けた額が熱くて、どく、どく、どく、と規則正しく脈打っているのが分かる。ああ生きているのだ。この世界に、あたしは残された。

すうつとした風が通って、何も履いていない足の裏が少し寒いと泣いた。あたしの真っ赤なピンヒールは、フェンスの向こう岸でツンと済まして遠くを見ている。

「馬鹿じゃないの」

ぼんやりとした視界を回して、呟くように吐き出された声の先を見る。李伊が睨んでいるそのフェンスの先には、冷え切った矢田が静かに立っていた。

まるで夜の空気と一体化しているような彼は何も言わない。無表情のままゆっくりとあたしを見下ろして、またゆっくりと視界を李伊へと戻した。

「あんた、……どうかしてる」

諭すように静かに、でも李伊の唇から紡がれたそれは重みと鋭さをどんどん増して、あたし達の息まで詰まらせた。何も言わない矢田の目は周りの暗さに混じって、とても深い底無しの闇のようにも見える。

「そうだよ」

溜息と上手く混じり合った矢田の言葉はなんだか軽くて、その溜息の付き方があたしの記憶の中にいた矢田に少しだけ似ていた。

＊＊

「ねえ、そこ邪魔なんだけど。……うわ」

「ごめん」

朝は我慢の時間だった。毎日少しずつ、悪意の籠った小さな悪戯が重なる。それは決して、イジメもののドラマや漫画なんかのような大袈裟なものではなくて、泣け叫んだり誰かに助けを求めなければならぬ程のことではなかった。だから余計、じりじりと擦り減ってゆく自分に、無感動で無表情な自分に、初めの内は惨めで虚しくなっていたあたしも、もう慣れた。

慣れというのは恐ろしいものだと思う。昔の自分では考えられなかったことが当たり前になる。群れていないと生きていけなかった昔のあたしが嘘のように、今のあたしは一人が普通だ。

しかし今回は少し違っていた。悪戯としての感覚ではない気がするの、あたしがまだ慣れていないからなのだろう。下駄箱の前で立ち尽くすあたしを、いや、あたしの目の先にある上靴を、じろじ

ろと見てゆくクラスメート達の視線に押されるようにして、この間新しく買い直した上靴に手を伸ばす。

「うわ、何それ」

後ろから投げられた直球の反応に、びく、とまず肩が固まって、そして伸ばしかけていた手が止まる。ひよい、とあたしの顔の横から覗き込むようにして、「捨てなよ気持ち悪い」とバツサリと言いつける彼女は、嫌悪感をあらわにした。素直に反応する彼女の表情はとても自然で柔らかくて、眉間にシワを寄せるその顔さえ、魅力的に見えた。

「嶋、お前正直に言い過ぎ」

振り向くと、もうすでに上履きを履き終えた矢田が、朝練を終えた後なのだろう、タオルで汗を拭きながらあたし達を見ていた。外は今日も寒いのに、この二人の周りには熱気が回っている。

「なんでよ、感想は正直に言った方が傷つかないんだよ」

「いや、傷付くだろ」

「こそこそ言われる方が何倍も嫌に決まってんじゃない」

カラツとした好実の言葉をしばらく見つめていた矢田は優しい顔になって、あたしのすぐ側にいる彼女に近づく。

あたしは下駄箱の中でどろりと異臭を放つ、真っ黒なヘドロに視線を戻した。元々は真っ白だったはずのそれは、きつと手に持っていたかかとの部分を残してみごとに真っ黒だ。靴箱のあたしのテリトリーだけが、他の子達のそれとはまるで違う色をしていて、その中できれいに光るかかと部分の白が、惨めさを強調していた。ツンと鼻の奥を突くような悪臭がこの辺りに充滿しているから、きつとあたしの体も同じような臭いがするのだろう。

「これもうダメだね、履けないよ」

矢田はあたしを見て、軽くて優しいため息を付いた。この状況では誰が吐いても重苦しく見えるはずのため息を、ここまで安心出来るものに変えることができるこの人は、きつと汚れを知らないんだろぅなと思ったのを覚えている。

続、

34、埋もれる

あたしはその時初めて、矢田俊喜という人をちゃんと見た気がした。ありがとう、と二人に向けた声は、とても素直な色をしていた。それを聞いた好実はこちらと矢田を見てから、長い睫毛で縁取られた瞳をあたしに向けた。

「何が」

「助けてくれて」

「別に助けてないし、……あ、ねえ佑月あんたその臭いの踏んだ？それとも矢田？」

ふと気付いたような好実の問いに、あたしと矢田が同時に靴の裏を見る。矢田は律儀にも履きかえる前の運動靴の裏まで確認している。

「踏んでない、と思うけど」

「僕も」

「へえ、じゃあこれ持ってきた人の靴跡だね、臭かっただろうね」
そう言ってくすくすと好実は笑った。下を向くと、黒く汚れた跡が掠れているのに気付いた。恐らく李伊のグループの誰かのものだろう、人をいじめるのも、結構リスクがあるものなのだ。キヤーカーとはしゃぎながらヘドロまみれのあたしの上靴を指先でつまむ彼女の姿は、簡単に想像がついた。

「くっさい」

聞き覚えのあるトロリとした声が後ろから飛んで、あたし達は声のする方に顔を向けた。

しかめっつらで鼻を摘みながら近付いてきたその子は、立ち尽く

す矢田に「どいてよ」と言った。

「ユウコお前、てつきりもう登校してきてるか……」

「なんで？」

「だってお前李伊達と仲いいから」

「そうだけどなに？」

戸惑いがちの矢田に、キョトンとした瞳で答えるユウコは、どこか角がない印象を持たせるから、李伊達のグループの中では一番危なくはないと思う。彼女は自分からは行動しない性格だから、もしかしたらユウコ抜きで今回李伊達は動いたのかもしれないと、彼女に少しだけ仲間意識を感じてしまった自分がいた。

「……いや、別になんでもない」

「あ、そう」

すい、とユウコがあたしの側を通る時の彼女の視線に耐えられる自信が無くて、あたしはぱっと反対側に立っている好実の方を向いた。下駄箱に体を向けている好実の頭だけはこつちを向いてはいなくて、階段に続く廊下の方を見ているようだった。

ユウコが階段の奥に消えても、まだ向こうを向いたままの彼女にあたしは声をかける。

「好実、どうしたの？」

「いや……」

あたしの方に向き直って少し首を傾げた好実を可愛いと思った。そんな彼女を不思議そうな顔で見つめていた矢田の優しい瞳がふつと緩んで、あたしに視線をくれた。

「こいつたまにこんな感じだからさ、気にしないでいいよ」

「あ、……うん」

べー、と矢田に目一杯舌を突き出す好実をちらりと横目で笑う矢

田は、優しくて穏やかで、簡単に人の心を解いてしまうような人だと思った。そして同時に、あたしには届かない人だとも思った。好実だけを、見ているんだなと思った。

＊＊

恐怖感は無かった。というか、次から次へと展開する新たな恐怖感に、頭が麻痺する時間さえ無かった。この屋上の澄んだ黒い空気だけが、現実離れし過ぎている。

「いつからだ」

息を潜めていた宏が口を挟む。

「いつから、その、計画を……立ててた？」

宏の言葉はどこか歯切れが悪かった。畑上くんのことだ。彼の中ではきつとまだ、畑上くんのが整理出来ていないのだ。あたしの中でもまだ誰も、死んでなんていないのだけれど。

真っ直ぐに宏を見据えていた矢田の目の先は、ふい、と宏からそらされ、誰もいない空間をぼんやりと見た。

「お前があいつに手を出してからずっとだよ」

放り投げられた声は強く吹いた風に煽られたせいで、少しだけ揺らいだ。

矢田は高二の時から三年間ずっと、好実を想い続けていたんだ。そしてそれと同じだけ、宏を憎んできたのかな。さつき矢田に蹴られた、未だに動きたくないと主張するあたしの足に付着する赤黒い痣が、彼の思いの強さを主張している。でもきつとこれ程の痛みで

は表せない。心に刺さるそれは、隠すことは出来ても微塵も消えることはないんだってことを、あたしは知っている。じりじりと体の奥からあたしを焼き、取り込み、離れることが出来ない痛みを。宏のアパートの階段のところにあった蜘蛛の巣を思い出した。くすんだ黄色い羽を持つ蛾は、もう食べられてしまっただろうか。

早く食べられてしまえばいいと思う。跡形もなく消えてしまえば、何も残らないのに。元々いなかったものとして、世界は簡単に回るのに。

どうして人間にはそれができないの。

人の中に生まれた欲望や愛情や憎しみに形があれば、壊すことだって出来たのに。

この世界には残るものばかりだ。

「矢田はずっと……そう思ってたの？」

わななく唇が零した言葉は見事に震えていた。え？と、聞き取れなかったのだろう、矢田があたしに焦点を当てた。

「ずっと、……苦しかったの？」

歪みゆく視界の中で、微かに、矢田が眉間にシワを寄せるのが分かった。まばたきをすると同時に、つつ、と頬が濡れて、あたしは泣いていた。

「お前が泣く意味が分からない」

緩む涙腺に負けて、矢田の表情はもう見えない。彼が苦しむ程に愛していた好実。彼を大きく変えてしまうくらい強い想いの先にいた好実。

好実。

「だってあたしっ……」

「佑月」

強く制したのは宏の声だった。

「本当にお前がやったんだな」

ゆっくりと、確認するように宏は口を開く。それに答えるように、矢田は「そうだよ」とだけ言って、ひよい、とフェンスを越え、振り向くことなく室内の階段に続くドアに向かって歩き出した。

矢田があたしの横を通るときにちらりと向けたその視線に感じた懐かしさは、きっと気のせいではないと思う。

それは高校時代に幾度となく目にしてきた、矢田と好実が二人でいるときのなんともいえない雰囲気で、あたしがずっと憧れてきた空気でもあった。

コンクリートを踏んで歩くその足音は次第に消えて、ギィと開く黒いドアの奥に、矢田は埋もれた。

続、

35、まどろむ - 1 (前書き)

遡る。遡る。

35、まどろむ - 1

好きだった。好きで好きで堪らなくって、僕は彼女を見続けた。

会えない休日は気が狂いそうになるのを少しでも和らげようと、たいた用事もないくせによく出かけた。そのうちそれが習慣のようになり、そこまで遠出も出来ないため、行く場所は自然と決まっていた。

係員に半券を見せ、腕時計で開始時間を確認する。高校の入学祝いに叔母がくれた、なんとかという一流ブランドのものらしいが、ブランド物に一切関心がない僕にとっては価値がいまひとつわからないでいた。両脇に飾られている大型パネルには目も向けず、廊下の奥に設置された男性用トイレへと急ぐ。

用を足して、手を洗う時にちらりと目に入った鏡の向こうに立っている冴えない男は、何を考えているのかわからなかった。平日は教室で彼女に想いを募らせ、休日はこうしてせつせと映画館へと足を運ぶソイツにとっての世界は、遠くから見つめることしかできない彼女そのものだった。

「気持ち悪い」

ぼそりと薄い唇が動く。飽きもしないで同じことを繰り返す毎日、なんて薄暗いんだろう。遠くで光る彼女を眺めるようにスクリーンを見つめる僕は、本当に気持ち悪いと思う。けれど止められないのだ。彼女への想いも、生活の一部と化している、新作の映画鑑賞も。

少し駆け足でおじさんが僕の空間に入ってきたから、腕時計に目を落としながら足早にその場を去った。

その映画は、豪華なキャストが揃っているし映像も凝っていて、いかにも金がかかっていそうなものだった。ストーリーも一般向け

しそうなもので、自分的には大きな期待ハズレ感はなく、かといって大当たり、というわけでもなかった。

銃を構える美女が脳裏に蘇る。腐敗した街でコントロールがきかなくなつたロボットの大群を次々と厳密に処理していく美女は、仲間と共に街を救う。

それは美女だからだとか、仲間がいたからとかではなく、華やかな主人公に選ばれたことによって獲られた勝利で、壊れたロボット役の僕には到底与えられやしないのだ。人生とはそういうものだ。

時は簡単に過ぎ、高二の二回目の期末テストもさりと終わつた。奇跡的に同じクラスになれたものの、相変わらず僕の世界にはなんの変化もないままだ。遠くに光る彼女の色だけで、僕は動いていた。

「数学のテストを返却します」

授業の始まりと同時に発された教員の言葉を境に、クラスの雰囲気は五分前に戻る。テストが返却され始めると、教室はまるでおもちゃ箱をひっくり返したように声で溢れた。散らかる言葉の間を縫って答案を受け取ると、点数もいつもと変わらなかった。二つ折りにした答案を机の中に突っ込み、何もなかったかのように頬杖をついて辺りを見渡す。返却された答案を手にした嶋さんが、向こうから得意げに歩いてくる。その視線の先は、僕の後ろだ。

「ねえ宏、何点だった？ 負けたらジューズだからね」

宏雪の席までたどり着く前に、彼女はわくわくした声色でそんなことを言った。きつと自信がある点数なんだろうな、と、変わらぬ姿勢で僕はぼんやりと思つた。宏雪は数学が得意だから、僕もよく

教えてもらった。彼の教え方はなかなかの腕前で、柔らかくかみ砕いた説明を慣れた口調で紡ぐ彼を見る度、この人は人に囲まれて生きていくんだなあと、羨ましく思ったものだった。

宏雪はクラスの中で、特に嶋さんと仲良くしているようで、この間たまたま家の近所で会った時も、彼女の話をしていた。

「一年ぐらい前かな、屋上でたまたま会ったんだよ、そこで打ち解けて。ほら、あいつって人気者キャラだったじゃん、だけど色々あったみたいでさ」

宏雪つて嶋さんと仲良いよね、と僕が切り出すと、嬉しそうに宏雪は口を開いた。

一年前の嶋さんなんて記憶になかった。僕は隣のクラスだったから、人気者らしい、と嶋さんの存在は知っていたけど。そういえば、去年の終わり頃に誰かが、「あの二人怪しいよね」なんて言っているのがちらと聞こえたことを今更思い出した。そこまで踏み込んで聞くつもりはなかった僕は、ふうん、と相槌を打ってから「楽しそうだね」と笑った。久しぶりに緩めた頬の筋肉は、なんだか少し緊張した。

僕の返事を聞いた宏雪は二力、と笑って「まあな」と言う。きつと彼女のことが好きなんだろうと、容易に想像がついた。

「えー！ マジ？」

周りの雑音の中で一際目立っているグループがあった。僕はすると目を向ける。何人かの女子が身を乗り出して、席に座っている彼女にキーキー声をぶつけている。僕の目には慣れた光景だ。彼女の机に手を付いて身を乗り出すもんだから、短すぎるスカートがゆらゆらと揺れて、露出されすぎた足が無防備に伸びているのばかりが視界に入る。揺れる髪とスカートに邪魔をされて、ちょうど彼女の顔は見えない。

周りに気付かれない程度に頭の位置を動かして、取り巻きの隙間

を探していると、うるさいぐらいだった彼女達のキーキー声は少しの間ぴたりと止まった。今もお賑やかな教室の中心である彼女達の妙な静寂を待っていたかのように、僕の後ろから宏雪と嶋さんの声が上手くシンクロして綺麗に響いた。

嶋さんが驚き、戸惑っている間に、静まっていた彼女達の声のリズムは一気に跳ね上がり、そして視線の中心は彼女ではなくなつたようだった。

新しく視線を浴びた高梨さんが、一瞬ちらりとこっちを見た気がした。

続、

36、まどろむ - 2

事態が動いたのは二学期の終業式だった。

「はあマジで?! なんなのあいつ!」

朝早く清々しい空気を纏^{まと}う教室に、キンキン声がひびを入れた。教室にはあまり人はいなくて、僕を含む数人が、一斉に声の発信元を確認した。

「財布盗むとかマジないわ」

「っていうか李伊の体操服盗って何すんのかな」

「売るんじゃないね」

「うっわ、引く」

この教室の中で元々喋っていたのは彼女達のグループを除くほとんどの数人だけだったから、一度静まった空間を言葉で埋めるのは至難の技だった。ぱらぱらと寂しく舞う声を押しのけて、彼女達の力強い声は透明な朝の空気をどんどん巻き込む。彼女は盗難にあったのだ。僕は泣きそうになった。

可哀相。かわいそう。僕に何か出来ることがあればいいのだけれど、彼女達の中ではもうすでに犯人は見つけているようだし、財布を無くしたからといって、関わりのない僕から同じデザインの財布をプレゼントされてもきつと迷惑だ。それこそ気持ち悪いストーカーに成り兼ねない。じゃあ彼女には何が必要だろう。僕には何が出来るだろう。

彼女は何を欲しているのか、それを考え始めたとき、僕の薄暗い毎日に差し込む光の量は少しだけ増えた気がした。

時間が進むと共に教室にはどんどん人が増えて、彼女達のグループの一人である高梨さんが登校してきた。彼女達の声は、クラスメイトのお喋りを燃料にしてどんどん膨らむ。音量はさっきより数段増していた。

会話のところどころでキャハハと甲高い笑い声が弾ける度に、彼女は緩い笑みを浮かべているようでホツとした。彼女の席より僕の席の方が前にあったら、ちゃんと正面から見れたのに。でもわざわざ振り返って見るのも気が引けるだろうなとも思った。

「畑上のこともさあ、ホントは好きなんじゃない？」

彼女のうちの一人が目一杯毒を込めた言い方で声を張り上げた。この教室に存在している僕は僕であって僕ではないと思っていた。ぼんやりと、教室に拡散され薄くなったその言葉を眺める。ぶれていた思考と薄暗い感覚が重なる。輪郭がくつきりとするのを感じて小さく微笑んだ。

僕は彼女に知覚されていたのだ。

「マジ？それはくない？」

「ほら佑月黙ってんじゃん。絶対好きなんだって」

後の会話はどうだってよかった。僕は知覚されている。僕は彼女と同じ世界に、ちゃんと存在している。

人は他人のしているものが分からない。だから自分の見ている世界が他の人のそれであるかどうか、僕たちは知る術を持たない。だから言葉を交わして、身体で触れて、存在を確認し合うのだ。そして僕はたった今、彼女達の口から出た言葉によって、確証を得た。どうして人間はこんなに面倒臭いのだろう。私はあなたを知覚しています、なんていう証明書を出会った瞬間にでも手渡してくれ

ば、薄暗い中で過ごす日々はこんなに長くは続かなかっただろうに。そこまで考えて、彼女に話し掛けることさえ出来ないくせに、と自分勝手な僕自身に呆れた。

もうすぐ終業式が始まるらしく、教室にはもうあまり人は残っていなかった。彼女達はもうすでに教室のドアをくぐっていて、一人だけぼつんと立っていた高梨さんの横をするりと通った。ふわりといい香りがした。

終業式を終えて温かいものが飲みたくなった僕は、ぞろぞろと教室へと移動する人の群れを外れて自販機のある中庭に向かった。時々ビュウ、と強く吹く冷たい北風が、ブレザーを押さえる力を強くする。昔誰かから聞いた、北風と太陽の話进行出した。旅人の上着を脱がせるために、凍えるような冷たい風を旅人に向かって目一杯強く吹きかける雲の絵を見る度に、幼いながらに本の中の旅人を哀れんだものだった。

真正面から突進してくる風を少しでも避けようと、できるだけ小さく丸まって下ばかり向いていたのが良かったんだと思う。自販機の前に見慣れた財布が落ちていたのが、自然と目に入った。

「……あ」

くすんだワインレッドの皮財布。留め具のところにあしらわれている同じ色の蝶々は、ラインストーンで綺麗に着飾って、濁った曇り空を見上げている。

しばらくじっとそれを見下ろしていた僕の右手が動きたがっているのを感じた。緊張しているのか、心臓は一度ぎゅっと縮んでから、どくどくと大きく鳴き始めた。

うつたえる気持ちとは裏腹に膝はかくんと折れて、しゃがみ込んだ身体は光る蝶々にそろそろと右手を近づける。それは簡単に僕の冷えた指先に触れた。

ひよい、と財布を手を取った時、駆けてくる足音が近づいてくるのを聞いて、僕の視線は目の前の財布から自販機の足元へ素早く移動し、ぴたりと固まった。

はあはあと蒸気を吐き出す掠れた音がしゃがみ込んだまま動かない僕の上で舞っている。どうしよう。さっきとは違う緊張感で、心臓の音さえも遠慮しているようだ。手の中にいる蝶々が、早く開放してくれとばかりに震えている。

「ねえ、大丈夫？」

クリアに聞こえすぎたその声は、僕の耳では捕らえ切れない。遠くから聞き慣れていた高めのそれは間違いなく、僕に向けられたものだった。

「あ」

恐る恐る顔を向けると、彼女の強い瞳は真っ直ぐに、僕の手の中に収まっている蝶々を捕らえた。綺麗に整えられた眉がしかめられたのを、瞬時に解析した僕の頭が命令を出す前に、渴いた唇からかすれた声が飛び出した。

「あの、いや違うんだ、盗ったんじゃない、落ちてたから拾ったところ……」

「それあたしの」

「あ、うん」

ようやく立ち上がり、ワインレッドの財布を差し出すと、ラインストーンで着飾った蝶々は一瞬にして彼女の手の中に吸い込まれた。目の前の彼女は、教室で見るより小さかった。さらりと靡く彼女の髪が、北風の冷酷さを緩和している。僕は思い出したかのように自販機に向き直り、小銭を入れて温かいお茶のボタンを押した。飲み物はなんだってよかった。ただ、じつと彼女と向き合っているという勇気がない。

「あのさ」

ガタン、という音と重なる彼女の声を背中であいて、ペットボトルを取り出そうと手を伸ばす。頭の中が軽くパニックになっていたせいで、ガタガタとペットボトルが取り出し口に引っ掛かり、余計に気持ちを掻き交ぜた。

「あのさ、朝教室にいたよね」

彼女の声は真っ直ぐで、でもさっきより少し柔らかくなった気がした。僕が「ああ」と小さく答えている間によやく取り出せたペットボトルは、凍える両手にじいんとした温もりをくれた。

ぐ、と小さく気を入れて彼女の方に向き直る。彼女の大きな瞳には今、僕が入っているのだろうか。少しの間閉じられていたふつくらとした唇が軽やかに開く。

「財布、貸して」

「……え？」

「あんたの財布」

そう言つて、広い中庭に熱を吸い取られ続けているペットボトルと一緒に僕の手握られている使い古された黒い財布に、彼女は手を伸ばす。ブレザーから茶色のカーディガンの袖が見えていて、その中からずっと華奢な指が僕に向かう。全く理解が出来ていない僕が彼女の指に見とれている間に、財布は二つとも彼女の手の中心に移動した。

「……え、なに」

「入れ替えさせて」

「え」

淡々と手際よく中身を入れ替えてゆく彼女の姿は、焦っているようにも見えなかったし、怯えなんてものも、まるで感じられなかった。単純に、綺麗だと思った。

続、

「はい」

僕の目の前に突き出された財布は僕のものではなく、さっき僕がこの手で拾い上げた、彼女の財布だった。

「え、と、あの、これ、」

大きすぎて飲み込めない突然の出来事が口の前で邪魔をして、言葉が上手く出てこない。必死に戸惑いの言葉を発する僕のガラス越しの瞳をじっと見つめた後、彼女はふっと笑った。

「大丈夫、中身は盗ってないから全部前のままだよ」

「でもこれ、」

竹下さんのだよ、と僕が言い終わる前に、彼女は滑らかな口調で返事をくれた。

「あたしの財布さ、盗られたことになってるから、もう使えないんだよね」

「え、ああ、……え？」

簡単に僕たちの周りを包む冷たい空気に溶けてゆく彼女の澄んだ声にはどこにも刺がなくて、だから気をつけていないとするすると脳みそのすき間から抜け出て行ってしまう。僕は一度通り抜けたその言葉を、やっとの思いで引き戻した。本当は彼女の喉が唄う言葉は全て保存しておきたいのだけれど、本来なら遠くで見ているだけの彼女が目の前に立っている、僕に届かせる為の言葉を吐いている、という現実が未だにふわふわと揺れて、重要な単語を流れないように留めているので精一杯だった。

吹いてくる風が低い音を立てて耳の奥を震わせる。まだ蓋も開けられずに僕の手の中にあるペットボトルの温かさは、もう微かに感じられる程だ。「寒いから移動しない？」という彼女の突然の提案に、寒がりの僕は何度も首を縦に振った。

体育館の陰に移動した僕たちは、風が吹かないだけでこんなにも寒さが和らぐものなんだと実感した。この寒い中、風を遮るものが何もない吹きっさらしの中庭にわざわざ来る人というのはどうやら僕たちだけのようで、ガタイの大きい自販機がぽつんと寒さに耐え忍ぶ様子を振り返り、少し寂しさを感じた。

「でさ」

彼女は寒いのか、両手を擦り合わせながら続ける。細くて長い彼女の指は、少し力を加えるとすぐに折れてしまいそうだ。

「うん」

「あたしの財布と体操服、盗られたことになってるんだよね」

もう一度言い直す彼女の事情もまた、するりとここから逃げたがった。大きく頑丈な体育館によって風が遮られて空気があまり動かないために、その声はゆるゆると漂っているだけだったから、さつきよりも簡単に引き止めることができた。

「どうして？」

聞いてもいいものかと躊躇ったが、彼女は純粹に疑問文を欲しがっているんじゃないかと思った。それを聞いた彼女は口角を引き上げて僕を見た。

僕はわけが分かっていなかった。どうして今まで関わったことのない、遙か遠くで輝いていたはずの彼女の相手が今、僕なのか。どうしてこんなに長い間、僕はこの空間に立っていられるのか。

きっと全部夢なんだろうな、と思った。

「ユツキが嫌いだったの」

彼女の唇で弾かれてキラキラと尖ったそれは、目の前の僕にさらさらと降り懸かり、なんとか返事をしようと口を開けた僕の体内にもカケラは舞い込んだ。僕は彼女のカケラを飲み込むべく、開けた口を閉じる。

「だからソレをあたしが持ってたらマズイのよ」

分かるでしょ、と言いたそうな瞳の輝きに圧倒されて、僕はそうだね、とだけ答えた。

彼女は高梨さんが嫌いだったんだ。きつとずっとその小さな体の中で、嫌な気持ちで渦巻いていたんだ。人を嫌いになるのはとても息苦しいことで、それだけで体が重くなる。かわいそうな彼女。でもこれで彼女の中の黒いドロドロが少しでも晴れたのなら良かった、と固まりかけた心を撫で下ろした。

そういうことから、と言ってくるりと向きを変える彼女に、僕はえ、と声を漏らした。その呟きは彼女まで真っ直ぐに飛んで、少し離れた彼女はもう一度僕の方に向き直った。

「交換」

ビシッ、と人差し指で僕を指して、彼女は最後にニツと笑った。颯爽と校舎に向かつて歩く彼女の後ろ姿はやっぱり綺麗で、短いスカートと黒い髪がひらひらと、さらさらと靡いた。そうして僕の手にはライNSTOONを付けた蝶々が口を付けられていないお茶と共に残った。

*

休みの前の日がどれだけ信じ難く光に包まれていたとしても、二週間というのはやっぱり酷く億劫だった。机の引き出しの中に丁寧にしまわれたワインレッドの蝶々を見る度、僕は彼女の目を見て話をしたことを鮮明に思い出す。それはいつ思い出しても全く現実味が無く、記憶違いかもしれないと僕は自分が怖くなる。彼女を思い過ぎてついに記憶まで捕われてしまったのか、と。幻の蝶々がいついなくなってしまうのか、確認し続けているうちに冬休みは終わった。

新鮮な朝の教室に触れた僕の視界は、休み前より鮮やかになっているのに気付いた。それは彼女と小さな秘密を共有したという、小さな僕では抑え切れない進歩のせいだろう。彼女達は休み前となら変わりなく塊になって喋っていた。彼女の横顔は楽しそうで、それを見た僕の目も自然と細まった。ちらと自分の鞆に目をやる。昔使っていたくたびれた財布が目映る。これと全く同じ使い方をした僕の財布が彼女の鞆に入っているのだと思うと、それだけで世界の色がくつきりと見えるようだった。彼女と僕は、二人だけで共有しているものがあるのだ。

机の周りできゃいきゃいとはしゃいでいた彼女達は、まだ主人がいない空っぽの席へと移動していた。そこは確か、ああそうだ、彼女が嫌いだと言っていた高梨さんの席だ。

楽しそうに高梨さんの椅子だけを抜き取り、教室の隅にがたんと置いた。僕は何とも思わなかったし、教室にいた何人かのクラスメイト達も、ちらりと見るだけで、気にしていないようだ。ただ、彼女の胸にはまだ高梨さんに対しての黒い何かが残っているのだと知って、僕はまた少し、かわいそうに思った。

高梨さんに対する小さな意地悪が続くのと同じようにして、僕の彼女に対する同情も、日に日に増していった。彼女はまだ晴れない。彼女は晴れない。まだ。僕は思い付いた。

続、

うちの近くの土手を、僕はそろそろと下っていた。その川は、流れているというよりも溜まっている、という方が表現としてピンとくる程のもので、家から流れる洗剤の泡や工場からの油や使い終わった後の煙草なんかが、ぎゅうぎゅうに押し合って存在していた。広く浮いた油が作るマーブル模様が僕を笑うかのようにてらてらと光るから、そこら辺にあった石ころをぽちゃんと投げ入れた。マーブル模様が崩れて、余計に複雑な形になるのが小気味よくて、僕はもう一度投げた。石ころが水面を叩く音が、まだ薄暗い神聖な朝の空気に当たって響く。僕の手が摘んでいる真っ白がこれから、彼女の心に溜まって消えない黒に染まるのだ。彼女の黒を吸い取り、この白い布地に移す。僕が。この僕が、彼女のためになる。

マフラーを垂れないようにぎゅっと結び、袖を出来るだけ捲くり上げ、淵にしゃがんで白を突っ込んだ。濁ったオーロラに白い爪先の部分が隠れた時には既に、白の先にどろりとした黒が纏わり付く感覚があった。水の深さは全くないようだ。ずぶずぶと黒に押し込み、てらてら光る川面が摘んだ指先の少し手前に迫ったところで推進を止めた。手首を動かしてそのまま何回か泳がせる。へばり付く黒が重くて、手から離れてしまわないように人差し指と親指により力を込める。いつの間にか緩やかに流れてきていた粗い泡がしゃりと指先に当たったから、僕の顔は思わず苦い表情を作った。ゴム手袋をしてこればよかったと後悔した。

人通りが少ない場所を見つけたから、痛々しい視線を浴びせられないで済んだのは助かった。こんなところを見られたら「間違つて上靴を落としちゃったんです」としか言いようがない。わざわざ橋の下で落とす馬鹿はいないと思うが。

そろそろ腕がだるくなってきたので、すっかり重くなった布製の

靴をそうつと引き上げる。プーンと臭う独特の刺激臭が鼻を直接突いて、吐きそうになった。ぼたぼたと垂れるヘドロが川の淵に敷かれたコンクリートのブロックを汚して、僕の薄汚れた運動靴にもぺとりと落ちた。黒のドロドロでコーティングされた布を右手で摘んだまま、家から持ってきたビニール袋を取り出して中に入れた。ビニール袋の入口付近にも、ヘドロはべったりと付いたために、ぬるりとしたその感触は指先の神経にも伝わった。

ビニール袋の持ち手部分をきっちりと結んでも、嫌な臭いは僕にしつこく擦り寄る。きつと僕自身が臭いのだ。すうつと冷たい空気によって固められた僕のおいは、周りに溶け出て後を引く。

誰よりも早く学校に着いたと思ったのだけれど、部活をしている人達には敵わないようで、学校の外周りを走っている陸上部員達数人に嫌な顔をされながら、僕は下駄箱にたどり着いた。

きちんと洗ってもまだ微かに嫌なにおいの残る指先で袋の口を解く。閉じ込められていた彼女のもやもやは一気に溢れ出て、辺りを駆け回った。そろりと覗き込むと、その中はぐちゃぐちゃで、黒にまみれたそれはもうなんだかわからない。ヘドロの塊の端っこに何とかくっついていて白を摘んで、昨日確認したスペースにひとつずつ丁寧に置いた。続けて袋に残っているべったりとした黒をその上から振り掛ける。

「あ、」

臭いの元が地面に降って弾けた。彼女のスペースの真下だ。彼女の足ににおいが移るのはさすがに避けたいと思った。くたびれた運動靴で一応揉み消したけれど、黒く掠れた跡をみて、僕は溜め息をついた。

足早に教室のドアを開けると、クラスメートは誰もいなかった。机に鞆を置いて、凍りそうに冷たい水で手を洗う。やっぱりまだ下水のような臭いがする。中身を出し切ったビニール袋は下駄箱の近

くのごみ箱に捨てたから臭いの元からは離れたはずなのに、どうやら僕の鼻の奥に染み付いた残り香が回っているらしい。気分が悪かった。

登校してくる時間は分かっていたから、僕は反応を確かめるべくなるべく遠くから下駄箱を見ることにした。階段のかけに隠れていると、さらりと髪を揺らしながら歩いてくるのが見えた。

「来た」

どんな反応をするのか、と僕はわくわくと早くなる鼓動を必死で押さえ、じつと息を潜めた。下駄箱を見つめた高梨さんは動かない微塵も。高梨さんがどんな表情をしているのか、今何を考えているのか分からなくて、僕は身を乗り出して焦れた。何人かが僕の横を通り過ぎてゆくけれど、誰も僕を気にかけるそぶりを見せなかった。彼らの目にはきつと僕なんか映っていないんだ。

僕は今までずっと、地味で冴えない存在だった。そんな境遇で気の弱い人は基本的にいじめの標的になりがちなのだろうが、僕はそんな中心にもなったことはなかった。人当たりのいい宏雪と仲が良かったせいもあると思うが、意識の中にすら入れてくれないんだと思う。この世界はそんなものだ。

ふと気が付くと、固まっている高梨さんに動きがあった。高梨さんに話掛けているのは矢田くんと嶋さんだ。何か良い反応をしてくれるかと思っただけで、僕の期待とは裏腹になんだか穏やかになりつつあった。がっかりした僕はハツとする。彼女の黒は僕に移ったのだ。彼女の代わりに僕が黒を浄化させるべきなのだ。鼻の奥に薄れゆくさっきの臭いが蘇よみがえったけれど、悪い気分ではなかった。

階段のかけから身を乗り出したままふわりと優しい気持ちになつて、もう一度ターゲットの方に目を向ける。

僕は顔をしかめた。

じつとこっちを見ている嶋さんが遠くにいた。反射的に僕は後ろを振り返る。当たり前だけど、誰もいなかった。嶋さんの視界に、

僕は入ってしまった。

急いで身を隠した。急に認識されていることを知らされて、素直に驚いた心臓が静かに唸っているのが分かる。彼女と同じグループの一人が立ち尽くしている僕の横をすつと通ったけれど、やっぱり何も言わなかった。意味もなく戸惑う頭を引き連れて、僕は教室へと戻った。

教室は少しだけざわめいていた。彼女達はいつもに増して大きな声で話している。まるで「あたし等はやってない」と主張しているようだ。僕も是非「その通りだ!」と加勢したかったが、なんだこいつどこから湧いて出たのか、というクラスメートの冷めた視線が飛び交うのは目に見えていたから、大人しく頷くだけにした。彼女はやってない。彼女の黒を譲り受けた僕こそがすべきことだからだ。そしてそれは、内密に行うことによって、意味を成すのだ。

「ねえ」

聞き慣れない声質が、僕を突いた。

「あんたさつき階段のところにいる?」

僕は声のする方にゆっくりと顔を向けた。声の主はさつきと同じように真っ直ぐに僕を見る。純粹にぶつけられた言葉は、すんなりと耳に入った。

「わたしあんまり目よくないから間違ってるかもしれないんだけど一応」

僕が口を動かさずにいると、嶋さんは続けた。

「覗いてたよね?」

「何のこと?」

僕はキョトンとする。僕は今まで図書室にいたのだ。嶋さんはそう言う僕の目をじっと見た後、さっと僕の全身に視線を這わせてから、ふうんと言った。

嫌な間だった。

嶋さんが僕の席を離れると同時に、冷たい空気が流れたのを、僕の肌は敏感に捕らえて離さなかった。

続、

39、耳鳴り - 1

それからというもの、僕は定期的に僕の中の黒を浄化させることに努めた。罪悪感はなかった。そんなものよりも彼女の為に動いているという事実が嬉しく、そして僕は彼女に残る黒をさらに吸い込む。浄化しているはずなのにどんどん膨れる黒に気付いたけれど、きつと彼女から新たに僕に手渡されたものだと思い直した。

僕は彼女と共有しているものがあるのだ。

三年生になっても、彼女とクラスは同じだった。残念なことに高梨さんは違うクラスだったから、僕の悪戯は頻度が落ちたけれど、なんとか継続はしていた。

そのうち彼女が高梨さんに悪戯をすることはなくなり、ついに彼女の黒は僕に全て移ったのだと悟った。

嬉しさは跳びはねてきらきらと光る。

自然と口の端が上がってゆくのを、必死で押さえ付ける。ふと気を許すと笑ってしまうから。

僕の中に残る黒を浄化する作業がもう少し続いている間に、彼女はもう大学受験の準備に取り掛かっているのか、休み時間も自分の机で参考書だったり文庫本だったりを読むようになっていた。

彼女と同じ大学に行けたら。

我慢していた笑いがすき間からぬるりと這い出て、思わず顔が緩んだ。彼女と同じ大学に行けたら、今度は僕から話し掛けよう。きっとあの時と同じように力強い瞳で笑うんだ。まるで今朝見た夢のように、映像は僕の頭の大半を使って鮮明に保存されていた。彼女

の睫毛が揺れる。ふつくらとした唇が滑らかに動く。どうか彼女の目指す大学が女子大ではありませんように、と強く祈った。

＊＊

四月。僕は彼女が目指していた公立の大学に入学した。席が近い宏雪と彼女が進路の話をしているのをたまたま聞くことができた僕は、本当に運が良いと感激したものだ。だけ。

彼女はそこにはいなかった。

そう、彼女は試験に受からなかったのだ。これでは意味がないじゃないかと僕は深く落ち込んだ。

「あ、」

見知った顔が目の前を横切った。日に焼けた精悍な顔つき。短かった髪は少し伸びているようだ。僕が小さな声を上げた後何メートルか進んで、矢田くんはおもむろに振り返った。

当然のように今まで一度だって喋ったことはなかったから、僕はただ立っていることしかできなかったのだけれど、矢田くんは「ああ、」と思い出したように声を上げた。同じクラスでもなかった僕の存在が知られていたんだと思うと、なんだか少しだけくすぐったい。

「宏雪と仲良かった奴だ」

そう言っ僕僕の位置まで引き返す矢田くんは、自然で飾らない穏やかな笑みを浮かべる。こんな風に笑えたら、と思った。

「宏雪も進学したんだっけ？」

「うん、そう言ってたと思う」

母親が。

宏くんがどここの大学に合格したらしいわよ、と僕の大学合格通知の封を勝手に開けながら母親は言った。へえよかったね、と返す僕の言葉を遮って、そうだ、今度いずみと宏くんと四人でご飯に行こうか、と母親は嬉しそうにする。いずみというのは宏雪の母親であり、僕の母親の仲の良い友達でもあった。幼い頃には頻繁に宏雪の家に行っていたし、いずみさんがうちに来ることも何度かあったから、僕の面倒もよく見てくれた。何と言うかすつとしたシャープな人で、僕の母親とは真逆だと記憶していた。

結局いずみさんが忙しいという理由でそのイベントは先送りとなったのだが、イベント好きな母親はいつになるか分からないその予定を楽しみにしているようだった。

宏雪とは卒業してから会っていなかった。元々改まって会うなんてことは滅多になかったから、たまたま会った時に話すぐらいなのだけれど、僕は周りから見たらそんなに宏雪と仲の良い奴なのだろうか。僕が学校であまり人と会話をしないからかもしれない。

「へえそっか、どこ大学？」

「ええと……どこって言うてたかな、国立だったはずだけど」

「へえー」

三年間一度も同じクラスになったことのない僕たちに、共通の話題ってというのは宏雪の話ぐらいしかなかった。そんな他人の僕に矢田くんはにこにこ笑顔を振り掛ける。この人は一体何を考えているんだろう。何を求めているんだろう。僕には彼のような人が分からない。あまり分かりたいとも思わないのだけれど。

結局その後は取って付けた様に当たり障りのない会話をして、矢

田くんとは別れた。

連絡が入ったのはそれから少し経った頃だった。家に帰ると母親はまるでワクワクが音になったような声で僕に日にちを告げた。

「四人でご飯なんていつぶりかしら」

母親が車のエンジンをかけながら独り言のようにぼんやりと放つ言葉は、とろりと僕の頭に溶けて、幼い頃はよくこういうことがあったなと思い出した。

懐かしさは生温い。そして現実より少し甘い。そんな思いに浸る前に、車は宏雪の家の前で停車した。母親が車から降りてインターホンを押すと、しばらくしていずみさんが出て来るのが見えた。相変わらず頭のキレそうな顔だと思った。宏雪のしゅっとした顔つきは母親似だ。

助手席のドアが開けられて、母親といずみさんの跳ねた会話がクリアになる。いずみさんは助手席に収まると同時にくるんと僕を見て、直くん久しぶりねえと笑った。

「宏雪は？」

いずみさんに、というより、ボタンと車のドアを閉めた母親に向けるようにして発したそれに、いずみさんは呆れたようなため息で返した。

「あの子今一人暮らししててね、ちょうど帰ってくるって言ってたんだけど」

「彼女が熱出しちゃったんだからしかたないわよ」

「そうかな、わざわざあの子が行く程のこと？」

穏やかに続きを紡ぐ母親に口を尖らせて反応するいずみさんは、僕が幼い頃から歳をとってないようだ。あの頃から、お母さん、という感じをまるで与えない。

「宏くんの彼女も一人暮らしなんですよ？ そりゃあ行くわよね、しかたないわよね、残念だけど、と母親は広い後方座席に一人座る僕を振り返った。僕の耳はざわりとした。

続、

40、耳鳴り - 2

「ね、しかたないわよね」

母親の穏やかな表情に押され、僕は少ししよげた顔をする。正直なところ、別に宏雪と特別会いたいとか話したいとかそういうのは全然ないし、どっちでもいい。でも宏雪がいない今、やっぱりこの場に僕は要らない気がする。

窓を開ける。外はもう暗くて、春だとはいえまだ冷たい風が雑音と混ざって僕を巻いた。中で鳴る母親二人の話し声は、薄いガラスの壁を隔てているようにぼんやりとしている。

「それにしても宏くんに彼女なんて久しぶりに聞いたわ」

そんな母親の声が耳に触れた。確かに、中学の時には何度か聞いていたカノジヨの話も、高校に入学した後からぱったりと聞かなくなったが、それは多分僕と宏雪の距離のせいだと、自然と思っていた。

「そうでしょ、だから私嬉しくて。春休みに一回家に連れて来ただけだね、それが結構可愛い子なのよ」

「ん？」

僕の音は外から流れ込む雑音に負けた。

春休み？

窓の外で流れていく景色に向けていた目を車中へと戻す。母親の頭といずみさんの横顔が楽しそうに揺れている。

「大学の子じゃないの？」

「うつん、高校の時の子だつて」

「へえ、じゃ直も知ってる子かも」

あ、そうだね、ねえ直くん、と僕を振り返るいずみさんを、僕は無意識のうちに凝視していた。

嶋さんでしょ、と意識的に僕の中の僕は口を揃えて言う。そんなこと知ってるよ、と。胸が甘いような酸っぱいようなごちゃごちゃしたもので埋まっていく。なんとなく、息を止めた。

「リーちゃんって知ってる？」

「リーちゃん？」

眉間にシワを寄せる僕をちらと見て、母親は僕の知らない人だと思つたようだ。実際、そんなあだ名の人は何人かいた気がする。

「名前なんていうの？」

僕に代わつて、母親が聞いた。

「だから、リー」

「リー？ 外国の子？」

「違う違う。り、い」

「へー、りい？ 珍しい名前ね」

「そうよね、私も初めて聞いた時は呼び名で通されてると思つたわ」
あははといずみさんは笑つた。

僕の視界がぼやける。夜の景色が流れる。風が、流れる。

宏雪つて嶋さんと仲良いよね

まあな

ユツキが嫌いだったの

交換

覗いてたよね？

流れる。流れる。流れる。回る。回る。回る。

僕は吐いた。

急いで車は家まで引き返し、僕はトイレで吐き続けた。まだ夕食を食べる前だったから吐くものはあまりないはずなのに、胃液が迫り上げてくるのは止めようがなかった。食道が生温くて苦くて酸っぱい。体の中から逆流してくる少量のそれは、便器の中に黄色く沈んだ。ハアハアと暴れる大きくて荒い息と、鼻の奥に広がるどろどろのにおいと、便器の中の濁った水。口の中の唾液はだらりと垂れた。気分が最高に悪かった。

宏雪が彼女と恋人同士。どうして？いつから？そもそも宏雪は嶋さんに気があったんじゃないかったのか。嶋さんと仲が良かったんじゃないかったのか。

「……あ、」

宏雪からなんか聞いてない？

高二の三学期の中頃だったと思う、陽くんがいきなり話し掛けてきたことを思い出した。

「……え？」

特に誰とも会話をしていなかったところへ急に飛び込まれると、思っように声が出ないものだ。掠れた声で何とか反応すると、陽くんは僕の机の正面にしゃがんで「おかしいんだよね」と唸った。

陽くんは宏雪と仲の良い友達で、地味な僕にも理解をくれ、いつの間にか「友達」の位置に滑り込んで来た変わり者であった。社交的でありながらしつかりと自分を持っているこの人を、僕は一生嫌いにならないと思う。

「三学期に入ってから、好実と全く関わってねえんだよあいつ」

陽くんは僕の机に顎を寄せ、難しそうな顔をした。僕はその頃高梨さんへの悪戯を始めたばかりで、考えることに夢中だったから気にしなかったのだけれど、よく考えたらここ最近二人が話しているのを見ていない気がする。

「喧嘩でもしたのかな」

「今まであんなに一緒にいたのにさ、なんか避けてるんだよね」

僕がふうん、と言うと、佑月ちゃんに乗り換えたのかな、と陽くんは軽く笑った。

覗いてたよね？

突然なんの前触れもなく、嶋さんの真つすぐな視線が僕を捕らえる。僕は小さく頭を振った。たまに飛んでくるざわりとした嫌な感じをこうして振り切って、僕は毎日を過ごしていた。

「嘘だよ、佑月ちゃんを助けてるのはあいつのお節介だろ」

「……あ、そうじゃなくて、」

僕が首を振るのを見た陽くんは直ぐさまからからと訂正した。

「良い奴だからな、宏雪は」

「うん」

君もだよ、と言いたかった。

宏雪は嶋さんと何かあったんだろうか。あんなに嶋さんに好意を

抱いているようだった宏雪を、一瞬で変えてしまうような何かが。そして嶋さんと距離を取ると同時に高梨さんに向けられる同情。

……荒れていた？

吐き気は荒い息に取って代わっていた。身体が興奮してきているのがわかる。

覗いてたよね？

嶋さんはあの時、きっと分かっていた。僕がやったと。

嶋さんが高梨さんに教えたんだ。そして高梨さんに構い初めたのは宏雪の気の迷いだったとしても、優しくされた高梨さんが宏雪にそれを話すのは十分に有り得る。僕と会おうとしないのもきっとそれが原因だ。軽蔑しているのだ。

そして卒業と共に彼女に手を出した。ふっ切ることが苦手な宏雪だから、まだ心のどこかで嶋さんに気があることは確かだろうし、高梨さんへの同情も消えてはいないだろう。その状況で宏雪が竹下李伊に好意を抱くようには、どうしても思えない。例えば彼女からアプローチを受けたとしても、だ。彼女達のグループが宏雪や陽くんのことを話題にすることはよくあることだったから、彼女が宏雪に好意を寄せることも十分に考えられた。

彼女達が高梨さんに散々悪戯をしてきたのはクラス全員が知っている。宏雪が高梨さんを助けたということは、彼女と同じ方向を向くことはないはずなのだ。

僕に対する復讐か？

彼女に何かする気か？

ただ荒れているだけか？

僕はゆっくりと立ち上がり、水を流した。ジャアアと勢いよく流れて、沈澱物は一瞬で消えた。

確認無しには進めない。そう思った僕は宏雪と顔を合わせようと決意した。

続、

4 1、耳鳴り - 3

考えはまとまっているようで全然まとまっていなかった。わからないことが多過ぎる。宏雪が何を考えているのか。何をしようとしているのか。嶋さんと宏雪の間に、そして高梨さんと宏雪の間に何があったのか。

彼女を助けてあげなきゃいけない。

最終的に僕の考えはそこにたどり着く。例え宏雪が仲の良い友達であつたとしても、彼女の方が何倍も大事だ。彼女を傷つける奴は絶対に許さない。彼女は僕の世界だ。

「……あ」

気合を入れて家を出た僕はある重要なことに気付いた。足が止まる。

「……宏雪のアパートってどこだよ……」

不覚だった。そして僕はそれを知る術を持っていなかった。だが運のいいことに、宏雪の通う大学名を母親にもう一度聞くことで、僕は行く宛てを消失してしまわなくて済んだ。会える保証はなかったけれど、爪先が家の方を振り返ることはなかった。

緩く吹く風を抜けて僕の足はどんどん動く。ふわりと桃色の花びらが舞う。早くも柔らかい若草色の葉っぱが小さく咲いているのが目に映る。

穏やかな春の陽気とは正反対の僕の気持ちは、固く緊張していた。そして少し、興奮もしていた。

「……え？」

駅の少し手前の踏み切りで足止めを食らっている僕の隣に立っている人に気付いて、僕は思わず声を上げた。香水の匂いは変わっていないようで、ふわりと甘い香が鼻の奥を通っていつかの記憶に呼び掛けた。その声が思ったよりも大きかったのか、すぐ隣にいたその人は訝しげに僕を見る。そのくりっとした大きな目にはやはり見覚えがあった。

「……あ、畑上くん？」

僕が口を開くのを躊躇っていると、高梨さんの口が僕の名前を紡いだ。

「うん、」

「久しぶりだね」

事態が把握出来ない僕は小さく頷くだけだった。久しぶりと言えば久しぶりではある。高校を卒業して以来会っていなかったから。

でも、と思う。

久しぶり、なんて言葉は以前に少しでも関わりの会った人達の間で交わされる挨拶であって、高校時代に一度だって喋ったことのない僕には与えられるものではない。むしろ何故顔も名前までも覚えてくれたのか不思議だった。

そんな表情は簡単に外に出ていたらしく、高梨さんは緩く笑みを作って「話したことなかったもんね」と言葉を飛ばした。

「あたしさ、畑上くと話したいってちょっと思ってたんだよね」

「……え？」

僕の喉はまだ文章を作っていなかった。脳が追い付いていないのだ。

目の前を電車が通り過ぎる。風が高梨さんの柔らかかそうな髪を後ろに流した。

「宏がね、畑上くんのこと話してくれたから」

覗いてたよね？

嶋さんの鋭い言葉が、高梨さんの優しくてふわりとした雰囲気
に飲み込まれそうになっていた僕を掴んで乱暴に引きはがす。そのお
陰で、僕は思い出した。ぐん、と見方が冷静になる。

僕がどんな人かなんて、知っているくせに。地味で目立たなくて、
その上悪戯までするわけのわからない男だと思っ
ているんだ。宏雪も言っ
たんだろう、昔は良い奴だった、とか。あんなことをする奴
だとは思っていなかったけど、最低な奴だったんだね、もう関わ
らない方がいい、とか。

「……じゃあ関わらない方がいいんじゃない？」

突然の僕の発言に、高梨さんはキョトンとした。

「え？ どうして？」

「いや、どうしてそれで僕と話したいなんて思っ
つのかなと思っ
て僕と話したって君は気分を害するだけだろうに。今更何を。」

「それはあたしの勝手じゃない」

高梨さんは可笑しそうに笑った。僕がそうだね、と言っ
つと同時に遮断機が上がった。

高梨さんも駅へ向かう途中らしく、僕たちは並んで歩いた。

「宏雪ね、畑上くんのこと良い奴だっ
て言っ
てたよ」

昔は、だろ。

良い奴、と言われていた頃の僕を知らない高梨さんは信じられ
ないの
だろう。僕と話をすることで、直接確認したかったのかもしれない。何かに縛られたような僕の心は微塵も揺らがない。どん

硬くなる心を覆い隠すように、表情は穏やかであった。なんだか探り合いのようだ、と柄にもなくワクワクした。

「そう？　高梨さんは宏雪と仲良かったもんね」

「うん、でも卒業してから連絡してないんだけどね」

「そうなんだ？　どうして？」

「あたし今結構大変なのよね、宏も大学入ってすぐじゃない？　忙しかったら迷惑かなって思ってた」

「ふうん」

僕は考えを巡らせた。

高梨さんは宏雪と彼女が付き合っていることを知らないらしい。いつでも高校時代の関係に戻れると、宏雪の隣が今も自分に与えられていると、そう思っているに違いなかった。そしてそれは、僕にとつてとても都合の良いことであつた。

「宏雪も連絡して欲しいんじゃないかな。自分からは言い出せない奴だから、頼ってやってよ」

そう言つて僕はあまり使い慣れていない笑顔を作る。もう駅は目の前に迫っていた。

「そうかな、ありがとう」

高梨さんは嬉しそうに笑う。そしてにこにこしたまま僕に別れを告げ、足取り軽く反対のホームへと歩いて行った。その表情は、完全に僕を許していた。

勝った。

高梨さんの姿が見えなくなるのを確認するや否や、ぬるりと這い出る心からの笑顔。僕は満足感に満ちていた。

高梨さんが上手くやってくれば宏雪が揺らぐ、という予想には、かなりの自信があつた。そして宏雪に騙されていた彼女はようやく開放されるのだ。

僕はヒーローだ、なんて、さすがにそこまでは言えないとしても、番犬くらいの地位は与えて欲しいと思った。彼女の知らないところで必死に働く。餌を与えられなくても、雨風を防ぐための小屋がなくても、それが苦であるはずがなかった。彼女に対する秘めた恋心を咎められない、というそれだけで、十分過ぎる報酬であつた。

僕はしばらく立ち止まった後くるりと回って、さつき高梨さんと歩いて来た道のりを躊躇うことなく引き返す。

彼女も開放されてからの方が、僕と会いやすいだろう。膨らむ気持ちに笑いかけながら、春の陽気を体で浴びた。

続、

42、耳鳴り - 4

それからしばらく経って、近くのコンビニで立ち読みをしている宏雪を見かけた。偶然にも程がある、と僕の持つワクワクが震えるのを感じた。

この世界のすべてを知る誰かが僕の背中を押しているのだ。コンビニの窓から見える樹が揺れている。桃色の花びらは、もうほとんど若草色に変わっていた。これから来る暑さに備えるためだ。

「あ、宏雪」

僕が声をかけると、雑誌のページをめくる手を止め、音もなく振り向いた宏雪は、直、久しぶりだな、と笑った。

「こっちに帰って来てたんだ？」

「ああ、ちよつと用もあつて。それはそうと、この前は悪かったな、晩飯行けなくて」

「いいよ、宏雪大変だったらしいし」

結局夕食は食べてないんだけど、とは言わなかった。

申し訳なさそうな宏雪の優しい声に、僕は悪戯な笑みを含めて返す。宏雪は肩をすくめた。

「知ってたのかよ」

「いずみさんが不満そうだったよ」

「ああ、四人で飯食いに行くの楽しみにしてたみたいだったからな」
柔らかい笑い声が僕らを包む。笑い声の終点で宏雪が見せた寂しそうな笑顔に、僕の口先が一番早く気付いた。宏雪がちらりと若草色の桜の樹に目をやるのを妨げるように、僕の口の動きは軽やかだった。

「それで、今はどうなの？」

「え？」

桜の樹に気を取られかけていた宏雪は、少し遅れて僕に焦点を当てた。

「その彼女だよ、うまくいつてるの？」

僕の言葉を最後まで丁寧聞いた後、ああ、と一言零した宏雪の表情は読めない。というのも、表情が無かった。

「別れたよ」

さらりと吹く風音のようだった。どうして、とは聞かなかった。予想は当たったのだ。高梨さんが頑張ったんだなあと思った。

「そっか……なんかごめん、聞いちゃって」

「いや、いいよ。付き合ってたこともさ、直には言っところと思っただけだよ」

ほら、お互い忙しかったじゃん、と締めた宏雪は、少し悔しそうに見えた。

覗いてたよね？

ああ、そうか。

頭の隅で待機していたソレは、タイミングを見計らったように僕の視界をざらざらにした。纏わり付く。どうしようもないのだ。僕があの時ミスをしたから。

この世界の裏と表と光と陰。偽物と本物が入り交じって僕に語りかけるから。僕にはもうわからない。

彼女を奪った宏雪。僕に対する復讐の一部であつた彼女に逃げられて悔しいのだ。僕が苦しみ、悲しむ姿を見れずに終わって、悔しいのだ。そうだ、そうに決まっている。

「あ、そういえば直、今いい映画とかある？」

ずずいと迫ってくる気まずさを敏感に察知した宏雪は、カランと声色と話題を楽なものへと変えた。

「んー、僕は今やってるのはあんまりいいと思わなかったな、でももうすぐすごい期待できるやつがあるんだ」

僕の頭は三日前に行った映画館に飛んだ。もうすぐ公開される映画のパネルがずらりと並んでいる中で一つ、僕の目にとまったパネルがあった。それは僕の中で間違いなくヒットを予感させるものであった。宏雪は僕がそう言うのを楽しそうに眺めて、じゃあ俺も見よっかな、と優しく笑った。

宏雪の笑顔が自然に見えすぎるから、固まっていたはずの僕は戸惑う。彼の表情と行動と考えていることの推測が、僕の中でうまく噛み合わなくて目を伏せた。どこまでこいつは僕を知っているんだろう。

ふと恐ろしく感じたから、勢いで攻めた。

「嶋さん、は？」

「え？」

「嶋さんだよ、高二の時仲良かった」

「……ああ、好実か」

「今でも仲良いんじゃないの？」

宏雪の笑顔がすうつと消えるのと反比例するように、コンビニにかかっている音楽が異様に明るくサビを迎えた。なぜか不安に押し負けていた僕は、宏雪のそんな顔でようやく息を吹き返す。

嫌な男だと、分かっている。これは彼女のためじゃない。彼女はもう救われた。僕が、救った。だから。

その先にあるこれはただの、自己愛でしかない。

「もう俺は、好実とは会わないと思う」

宏雪は呟くように、だけどしっかりと僕を見つめて言った。知覚

されている、と感じさせる彼の眼差しは真っ直ぐ過ぎるから、少し苦手だ。なにもかも知られている気がして。

僕の悪戯も、僕が彼女から譲り受けた黒さも彼は初めから全部知っていて、全てを分かった上で僕の相手をしていたんじゃないかと思っただからこんな余裕があるのかもしれない。もうわからない。閉じた唇の中で、見えないように歯と歯に力を入れて空気をぎゅっと噛んだ。

「どうして？」

やっと開いた口で紡ぐ僕の返事はいきなりなものだったのだけれど、宏雪は少し言葉に詰まったようだった。

「俺が悪いんだ」

宏雪はそれしか言わなかった。僕もそれ以上聞かなかった。空が綺麗な日だった。

僕は大きく息を吸う。そしてその清々しい空気に体の中の熱と水分を含ませてから外へと吐き出した。僕の口から出た水蒸気は横から吹いて来た風に一瞬で蹴散らされ、跡形もなく消えた。起きてから何度めかの深呼吸。僕は柄にもなく緊張していた。

大学からの帰り道、僕の足は家とは違う方向に向く。背負ったりユックがいつもの何倍にも重く感じるのは、間違いなく彼女の蝶々のせいだった。

続、

43、耳鳴り - 5

大学名が書かれたプレートを確認して、大きく息を吸い込む。温かい空気が体の中で膨張して、急に胸が苦しくなった。やっと彼女に会えるのだ。愛しい彼女と目を合わせることができると思うと、まだ実感が湧かない。まるで夢の続きだ。

無い勇気を振り絞って、宏雪に彼女の通っている大学名を聞き出すことが出来たが為の結果ではあったが、会える保証はなかった。

何棟も連なる建物と向き合う。彼女の趣味が変わっていなければ、練習している可能性は十分にあった。

「……いるかな」

取りあえず講堂へと足を運ぶ。膨らみきった心臓は瞬時に縮みすぎて痛かった。とうとう来てしまったのだ。会いたくて会いたくて仕方がなかったはずなのに、いざこの状況になってしまうと、まだ形にならないフニャフニャの不安が期待を突く。足音と心臓のドキドキが連動して、どんどん速さを増す。息が荒くなっているのに気付く。ああ気持ち悪い。

「……………ん？」

歩く速度はいつもの倍以上だったから、少し行き過ぎてからやつと足音は止まった。明るい髪色のその女性は、中庭のベンチで誰かと楽しそうに話している。大きめのＴシャツにジャージという格好は見慣れてはいたけれど、高校時代に彼女が着ていたものとは違っていた。放課後、僕が帰る頃によく見かけていた彼女のダンスを見れなかったことを残念に思ったが、それでもこうして彼女が休憩していたからこそ、僕はすぐに彼女に気付くことができたのだ。僕は歓迎されているのだ。

ソワソワと足が動きたがっているのを感じたから、従順な僕はそれに素直に従った。彼女を呼ぶ声を発したくてむずむずしているのに、喉の奥が重過ぎて沈みそう。僕は矛盾している。

近くなる。彼女が、近くなる。

「……たけしたさん」

ようやく外に出たその言葉は小さくかすれていたけれど、彼女と彼女の隣の男は僕を視界に入れてくれた。きつと身体に鳴り響く心臓の音の方が、はつきりと届いたのだろうなと思った。

間違いなく彼女だった。強い瞳。長い睫毛。ふわりとした唇がゆっくりと開く。

「……だれ」

「え、」

声が上手く聞こえない。ああ僕は間違えたのだ。人違いだ。この人は彼女に似た人だったのだ。だってホンモノの彼女はこんなことを言うはずがない。髪の色だってもっと黒くて……

「すいません、やっぱり人違いで……」

「おいおいリイ、ひどくねえ？　せつかく声掛けてくれてんのに。なあ？」

僕の舌がくるくると最後まで言葉を紡いってしまう前に、短髪の男が笑いを含んだ高めの声をぱらりとまいた。そのせいで行き場を失った僕の声はどんどん逆流し、体の奥底へと沈んでゆく。

「え、だってホントに……学部一緒、だっけ？ コウ知ってる？」

「俺は知らない」

「あんた人の名前覚ええないもんね」

「そう言っなよ。名前は覚えねえけど顔ぐらいは覚えるよ」

「えー、じゃああたし達と同じ学部じゃないのかな、てか同じ大学？」

「リイ、お前の中学か高校の連れとかじゃねーの？　なんか大事な用があつたとか」

「んー……」

二人の視線がちらちらと僕を焼く。「リイさん」の声は彼女のそれにとてもよく似ていた。

聞こえない。何も。

きこえない。　なにも。

宏雪と仲良かった奴だ

あたしさ、畑上くんと話したいってちょっと思ってたんだよね

付き合ってたこともさ、直には言っところと思ってたんだ

きつと夢だ。そうだ夢だ。だってみんな僕のことを知っていてくれていたし、覚えてくれていた。関わったことのなかった人でさえ、僕はこの世界に存在している。それは十分に確認できたはずだ。

だったら彼女の世界にも僕はいるはずで、小さな秘密を共有した相手である僕は、僕は、どこに行ってしまったんだろう。

「……たけした、りいさん、だよな？」

僕は聞いた。そうだけど、という訝しそうな声が真っ直ぐに飛ぶ。僕はこの人を知っていた。

「あの、覚えて……ない？ 高二の時に財布、交換した……」

「……………あ、ああ」

しばらく自分の記憶をたどるようにした後、彼女はようやく思い出したように口を開けた。

「よかった……」

短髪の男は僕の口から思わず溢れたその言葉をちらりと見遣ってから、どんな関係なんだよ、と隣の彼女に面白そうに尋ねた。緩い風がヒュウと吹いて、彼女の長く伸びた髪をさらりと流す。正面から風を受けた彼女は少し顔をしかめたけれど、すぐにふっと笑った。

「高校のときね、あたしちよつと悪戯してたの」

「へえ、どんな？」

「嫌いな子をハメたの」

「なーんだ、イジメかよ」

「もつと軽いわよ、イタズラ」

ムツとした表情を男に見せる彼女は、まるで拗ねた子供だ。とても愛しいと、心臓が呻く。隣の男はククツと笑って、彼女に続きを求めた。

「で、彼は何をしたんだよ」

「証拠を隠してもらっただけ」

そうなのか？と男が僕の方を向いた。

「……………手助けがしたかったから」

意外にも、返事の音量はほんのわずかだった。「その」タイミングを見つげるために、身体全部が強張っている。背負ったリュックが重みを増した。

それほどものじゃないよ、と彼女が笑う。僕に向けて。二人で話した寒い冬の日と同じ笑顔だ。

緊張を解いてしまったから。

「でも竹下さん三年になつて悪戯止めたよね」

「へえ、リイえらいじゃん、すぐ止めたの」

僕の言葉に一番に反応するのは彼女であつて欲しかった。ホラ、彼女の表情も曇っている。あの男より先に反応したかったんだ。僕のそんな想像を読み取ったように、違うわよ、と言う声が聞こえた。

続、

44、耳鳴り - 6

「ちがうわよ」

穏やかな昼間の大学内に舞う彼女の声は、少し投げやりな気がした。

「ほんの小さな悪戯だったのに。誰かが」

彼女の言葉はそこで切れたから、僕と彼女の隣の男にはその先がまるで見えない。男が「え、何」と声を漏らすと同時に彼女は俯いた。彼女は嫌なことがあったに違いなかった。僕はそんな彼女を見ていられない。やっと宏雪から守ることが出来たのに、まだ彼女の中には何かが残っているのだ。消えないのだ。可哀相。そしてソレを軽々しく聞き出そうとする男を少し憎らしくも思った。

「誰かがあたしをハメたの」

「え？」

真っ先に転がった僕の声が、彼女の顔を少しだけ上げさせた。彼女の瞳はちらりと僕の顔を確認すると、またすぐに地面へと視線を落とした。ぎゅっと閉じられた唇と強い視線が、明るいコンクリートを焼く。僕の頭は高三の時を見返している。

彼女がいじめられていた？

そんなことがあるはずがなかった。だって僕が見守っていた。高梨さんがやられていたようなことは、少なくとも彼女には起こっていないはずだ。

僕の見えていない時に何かされていたのかもしれない。

どうして気付いてあげなかったんだ。僕は自分を責めた。胸が苦しいとはきつとこういう気持ちだ。

「何されたの」

男が優しく聞く。彼女とはどういう関係なんだろう。彼女はしっかりと下を向いたまま口を開く。

「誰かが佑月……あたしが悪戯してた子なんだけど、その子にタチの悪い悪戯を加えたの。ずつとよ」

「え、別によくね？ 悪戯仲間じゃん」

「最初はそう思うわよね。だからあたし、他にも佑月のことが嫌いな人いるんだって思ってた。でも誰がやってるかわかんないのがずつとだよ。しかもあたしの悪戯を酷くしたようなのばかりだった」男がじつと彼女を見ている。僕は少しずつ渴き始める。彼女の口から溢れ出す言葉に取り残されて。

「みんなずつと、あたしがやってると思ってたんだと思う。……言わなかったけどね。グループの中であたしが一番佑月のことが嫌いだったから」

「竹下さんはやってないのに」

零れた言葉は彼女の見つめる先に落ちて弾けた。コンクリートにぺたり。彼女の黒がぺたり。僕の足にくっついて来た運動靴は無意識に地面をこする。かすれた黒。黒。

動悸はまだ静かだ。

そうだよ、と男も口を開く。

「リイは悪くねえのに」

男がくしゃりと彼女の髪を撫でた。動かない彼女の綺麗な茶髪だけが、少し乱れた。

「あたしの仕業じゃないってちゃんと云ったし、みんなは分かっているって言ってくれたけど、みんながあたしからだんだん離れていつてるのはすぐに気付いた。その悪戯ってどう見てもやり過ぎだったし、あたしの友達はそこまで性格ひねくれてないからさ」

あたし、浮いてるように見えてたんだと思う、と彼女は口をたくさん動かした。声はさつきよりはつきりと聞こえるようだ。

立ったままの僕を、緩くて優しい日差しがびかびかと照らしている。天気はとても良い。

「なんでリイがそんな目に合わなきゃいけないんだよ」

「知らないよ。あたしのことが嫌いだったんでしょ」

違う、と思わず出てしまった誰かの音は大きくて、もう引き返せなかった。音は飛び散る一方だ。彼女と男の丸い瞳が僕を刺す。彼女は三回まばたきをした。息が出来ない。

「お前、……何？」

男の声がうんと低く響く。眉間に寄せられたシワが窮屈そうに固まって、視線の定まらない僕を睨み続けている。

「僕はただ、竹下さんを……」

「あんただったの？」

固まった言葉が僕にぶつかって、ぴくりと眉が反応する。僕じゃない。彼女を守ってきたんだ。僕じゃない。手助けをしたんだ。僕じゃない。僕じゃ……

「違う。僕は手助けを……」

「あたしの振りして佑月をいじめることが手助けなわけ？」

「お前……何やってくれてんだよ」

軽蔑の目だった。目の前にいるはずの二人との間が開き過ぎて何も見えない。目印を無くした僕の身体は息をすることさえもおぼつかない。痛い。何が。胸が？身体が？頭が？

僕の中にぼつぼつと残る言葉は崩れながらも、必死に喉を通りたがる。口は何度か意味なくパクパクと動いた後、ようやく錆び付いた音を奏でた。

「……宏雪はそんな僕を知ってたんだ」

「……は？」

彼女は綺麗に整えられた眉を歪めた。声に合わせ、視界もかすめる。

「僕に仕返しをするために宏雪は竹下さんに手を出したんだ。僕は
そのことを知って……」

「ちよつと待つて」

彼女は掌を僕に向けて、流れる言葉をせき止めた。

「何が言いたいの」

彼女の声はとても遠くに感じるのに、僕の鼓膜に当たる振動は果
てしなく大きかった。彼女の隣に居る男は何も言わず、異物を見る
ような目で僕を射る。

「宏雪は竹下さんを利用して」

僕は何を、言いたいんだっけ。

あんたが手を回したのね、と冷たくて細い声が僕に向かう。速度
が増す。速くなる。反応の仕方を忘れた僕を真っ直ぐ見つめて、彼
女は泣きそうな顔をする。

「あたしは宏を愛してた。宏だってあたしを必要としたの！ な
のにあんたのせいで全部壊れた！ …… なんなのよ、あたしあんた
に何かした？」

「違う、竹下さんは何もしてない。僕はただ……あの、」

「財布交換したことがそんなに特別だったの？ そんなことでみん
な……もう嫌！！」

彼女のスイッチが切れた。切ったのは誰だ。僕はそいつを許さな
い。僕は。僕は。

心臓が体の奥底に押し込まれてぐじゅぐじゅと音を立てる。僕は
どこに向かっていたんだっけ。何のために生きているんだっけ。何

をしていたんだっけ。

佑月が嫌いだったの

入れ替えさせて

交換

世界の色が消える。消える。消える。

「最っ低」

彼女が吐き出す空気は、目の前の僕に全て当たった。浅くしか息を吸えない僕には、半分も飲み込めない。

棒のような足がふらふらと重心を無くした。息が出来ない。壊れる。

世界が壊れる。

「……あ、あの、僕はたけしたさんのこ……」

「失せろよ。二度と来んな」

男の冷めた視線は僕に真っ直ぐに刺さって、ぐさりと音がした。

鋭くて冷たい刃物は僕の体温では溶けそうにもなかった。夏の始めだというのに。

僕は来た道を全速力で走っていた。ぐるぐる回る。何が起こった？息が壊れる。何が起こった？僕が。何が起こった？僕が。僕が。僕が。

僕の、せいで。

背中で跳ねているスカスカのリュックに丁寧に入っているあの日の蝶々が、静かに笑うのを聞いた。

覗いてたよね

僕を見通している。

黙れ。黙れよ。

どんどん早くなる足音に、呼吸が追い付かない。壊れてしまえばいい。全部。もう僕は涙すら出ない。世界はバラバラに崩れ落ちる。闇だけになればいい。

拒まれた番犬には残るものが何もない。

息が壊れて、世界が壊れて、僕が壊れる。

心臓が潰れるほどに痛いのは走っているせいだ。息が出来なくなるのを承知できつく閉じた唇がぶるぶると震えて、目の奥に熱い水を流し込む。

彼女が、僕の世界だった。

続、

45、眺める

優しい夜風が吹いている。誰も何も言わない真つさらな沈黙が停滞しているのに、嫌な気持ちにはならなかった。昔のあたしには到底耐えられるものではないだろう。ゆるい空気が視界をぼやかして頭の中にあつた何かの輪郭を無くした。あたしの頭はきつと寝ぼけているのだ。

どれくらいの時間そうしていたのか分からない。不意に宏の声がした。

「え……と、これからどうする？」

それはとても遠慮気味に発せられたものだったけれど、温くて緩い異空間のようなこの場に現実味を与えるには十分だった。パキッと世界が切り替わる。あたしの瞳に映るのは、澄んだ黒に浮かぶ薄黄色の月を背負った宏と、宏を見つめる李伊だった。

「ずっと此処にいるわけにはいかないだろう？」

宏が続けて言葉を放つのを、あたしはただ眺めていた。口は一向に開こうとしなかった。ぱちりぱちりとまばたきの度に瞼が降りて、すぐに上がる。瞼だけが必死に状況を理解したがっている。

李伊の方に目を向けると、彼女は俯いてじっとしていた。ゆっくりとじんわりと、李伊の顔が歪んでゆくのが、重なる黒を通して見えた。唇が微かに動く。

「……下に降りたくない」

李伊の声は呟くようで、少し震えてもいた。

「李伊……」

「降りたくない……やだあ……」

李伊は泣きそうだ。いや、もう泣いているのかもしれない。甘くて高めのその声に含まれているのは、悲しみでもなければ、も

ちろん甘えでもない。あたしの頭はまだ動かない。

「俺だつてやだよ……」

宏は必死に何かを堪えている。ねえどうしたの、泣かないで。

空はどこまでもずっと黒くて、夜が明けるにはまだまだ時間がかかりそうだった。こんなにも分厚い時間が過ぎたのに、それでもまだ広大過ぎる空のカケラにも満たない。空に昇ったたくさんの人達の瞳に、あたし達はちゃんと映っているのだろうか。

「ゆつき」

優しくて落ち着いた声があたしを呼んだ。

「立てる？」

「……ああ、」

差し出された手につかまる。宏の手は大きくて温かくて、このまますっぽりと飲み込まれてしまいたいと思った。あたしの頭はまだ動かない。まだ動かない。

ぐっ、と宏の手に力が入って、見える景色が高くなった。足が重くて、でも頭はふわふわと浮いてしまいそう。宏の手が離されると支えを失ったあたしの体は、重心を見つけようとがいた。ふっと上を向く。黒は果てしなく遠くて、やっと重心を見つけたあたしはまたクラクラする。

三人横に並んで扉へと向かう。硬いピンヒールはなんだか履く気になれなかったので、あたしは裸足のままだった。ざりざりと冷えたコンクリートの感触ばかりに気を取られていたせいで、あたし達を取り巻く異様な空気もあり気にならなかった。真っ赤な靴はあたしの左手の揺れに合わせてブラブラと揺れている。

宏がドアノブに手を掛ける。小さく悲鳴を上げながら開く扉は、錆び付いてペンキもはげ落ちていた。それは地上と空を繋いでいる唯一のもので、二つの空間に挟まれてとても窮屈そうに佇んでいる。

「え……なに、これ」

外とは比べものにならないほどの閉め切られた黒の空間に、透明な空気が入り込む。あたし達の目に飛び込んできたものは、切れかけた蛍光灯の光を浴びて懸命に存在を主張していた。それは階段を上ってきた時にはあるはずのないものだった。無かったはずの液体と、無かったはずのにおい。李伊はすぐに目を背けた。宏は凝視している。

あたしは手にぶら下げていたピンヒールに、砂を素早く払った足を突っ込んだ。

ただ、気持ち悪いと思った。

黄色みを帯びた白い液体にはまだ消化しきれていない何かがつぶつぶと混じり、誰かの胃の中がひっくり返されたように並々と溜まっているそれは、ドロドロと何段にも重なっていた。臭いは強烈であたしの胃の中もこんな臭いがするのかと考えるだけで吐き気がする。吐いたところでドロドロの仲間が量を増すだけなのだけれど。

「これ……矢田？」

鼻を摘むあたし達に挟まれて、宏はぼそりと呟いた。しかめられた顔は何かを考えているようで、けれどすでに思考がストップしてしまったあたしには、宏が何を思っているのか見当もつかない。なんとか考えようと頭を動かすと、途端に息が出来なくなった。あたしがしてしまったことがじわじわと滲み出て来るから。 なんだっけ。あたしは人を、殺したんだっけ。

胃の中のソレは階段を下りると共にだんだんと見えなくなつて、少し早足のあたし達が鼻呼吸に戻そうかと油断した頃にまたあった。ウエ、という李伊の詰まった音に続いて、「もう嫌」と嘆く声は泣いていた。あたしは渴いた目を李伊には向けず、階段と階段を繋い

でいる踊り場に汚らしくへばり付いている液体を見た。扉を開けてからもう二度も見ているのだ。鼻の代わりに息をすることを任され続けている口の入口が、悪い空気に侵されて粘り気を増している。今度はつぶつぶはあまり混じっていないようで、唾液のような胃液のようなぬるりとしたものが大半を占めていた。口に手を当てた状態の李伊の背中をさすっている宏の顔も、ひどく気分が悪そうだった。蛍光灯の薄白い光は真上から刺して、上を見るとあたし達が降りてきた階段のてっぺんは真っ黒に塗り潰された闇だった。空とは違って、そこには誰もいないのだ。このビルの中にはあたし達しかいないのだと思うと、途端に怖くなった。上ってきた時とは違う。何もかも。やっぱり暗闇って嫌い。世界から取り残されている気がして果てしなく惨めな、気がして。

「ねえ、早く降りよう?」

宏のTシャツの裾を摘んで発した声はあたしのものとは思えないほどに揺れていて、あああたしは泣くのかな、なんて思った。宏はふらつく李伊を支えながら一言、そうだね、と言ってくれた。

続、

46、アカ

カッソカッソとあたしの足に嵌まったヒールの音が響いている。ぐちゃぐちゃの液体はもうすっかり消えていて、鼻呼吸に戻したあたし達の周りを、さっきのにおいの余韻だけがむわり、と回っている。誰の口も、全く動く気配がなかった。ああ疲れているんだ。今日はたくさん動いたから。

この後はどうしよう、アパートに帰るとあたしは一人。一人でいるとどうしても何かを考えてしまうから。だからきつと、あたしはあたしでいられない。気が狂っておかしくなつてどんどん崩れて、きちんと朝日を迎えられる気がしない。だからといって実家に帰るのはどうも気が進まないし、他に行くところなんてないのだ。そんなことを考えていると、外に出るのが恐ろしく感じた。

階段ばかりの暗闇は恐ろしい。この先も恐ろしい。空に近い屋上には戻れない。色んなものに挟まれて、あたしはぎゅうぎゅうと潰される。息が苦しいのはそのせいだ。

誰かが小さく息を吐く音が聞こえたのばーっとしていた焦点を合わせると、すぐそこに階段の終わりが見えた。あと五段。あと三段。あと一段。あたしの足は無意識に止まった。

「……佑月？」

宏の声。

佑月っ！

あたしを呼ぶ声。澄んだ声が重なって弾ける。しぶきがかかる。

佑月、ごめんね。心配したよ

危ない、よ

見るからに戸惑っている好実の様子が、あたしの頭の奥から徐々に掘り起こされてゆく。

大丈夫

落ちちゃうかしんないじゃん

鮮明に、なつてゆく。時々吹く強い風に綺麗に靡く好実の髪。あたしと宏に向く真つ直ぐな声と瞳。三日月。静かな夜の町。透明な黒。壊れるあたし。

せつかく整った息がまた荒れて、鼻だけでは追い付かなくなった呼吸は口に代わった。速くなる。速くなる。体の震えは止まらない。混乱しきった呼吸の音に混じって声が漏れる。泣き声なのか悲鳴なのかわからないその声は、気持ちが悪い程に響いた。

急に崩れたあたしに驚いた宏と李伊が佑月、佑月、とあたしを呼ぶのが聞こえる。反応する余裕なんてあるはずもなく、あたしの泣き声のような悲鳴はますます勢いと音量を上げた。

ハッ、と振り返る好実に向けて微笑むあたし。あたしのことなんて誰も気にかけていないその間に飛び降りてやろうと思っていた時、好実が気付いてくれたから。ちょっと嬉しかったんだ。

だめ！ 佑月！ だめ！！

離して！！

フェンスを飛び越える好実。あたしに回される細い腕。耳元で叫ぶ。

急にふつ、と体に纏わり付いていた力が解かれたと思った。丸くなった瞳はやっぱ真っ直ぐにあたしを見ていた。

好実の瞳があたしに問う。それは高校時代からずっと変わらない、素直で飾らない言葉に乗せられた疑問で、

どうして突き落とすの？どうして突き落とすの？どうして突き落とすの？

「いやあああああああ」

事实はオブラートを纏^{まと}ってはくれない。剥^むき出し状態のソレはまるで刃物で、何度も何度もあたしを刺した。宏が、矢田が、壊れる程に愛していた好実は、同じように壊れたあたしが突き落としたのだ。

そうだよお前だよ！ お前がこのみを殺したんだよ！ このみを、殺したんだよ！！

あたしが、ころした

人の腕があたしに回されたから、体中がビクンと恐れた。やめて。この後あたしは突き落としてしまふ。刻み込まれた好実の瞳がズキズキとうごめく。

「佑月」

宏の声と共に、あたしに優しく回された腕に力が込められた。好実の腕とは違う。分かっている。これは宏だ。慰めてくれてるのだ。分かっている。だけど、

「やめて！ 離して！」

あたしの声は大きく響いて、頭で回り続ける記憶とシンクロする。

震えが止まらない体は動くことを恐れてじっとしている。いやだ。やめて。ころしてしまふ。

「ごめん」

そんなあたしの気持ちを察したのか、宏はパツ、と腕を解き、代わりにあたしの手を握った。

指と指が絡んで、宏の強い温もりが伝わる。これから嫌というほど向き合わなければならない現実の第一歩が目の前に迫っているのだ。好実がまだ生きているかもしれないというわずかな希望がもし叶っているのなら、あたしは一生孤独で惨めになってもいい。好実が生きていると分かった時の幸せで、きっとあたしは生きていける。ただの自己満足なのだけれど。

好実が視界から消えた後どうなったのか、あたしは知らない。それが現実味をことごとく削っていた原因だった。直面は、すぐそこだ。

あたしが落ち着くまで、二人は静かに待っていた。宏の手がくれる安心によって少しずつ呼吸は元に戻ってゆくを感じて、あたしはまた怖くなる。一生の塵程ちりの時間で落ち着ける程に軽いものなの？

お前のせいなんだよ！！

矢田の怒声が降る。

あたしはやっぱり最低だ。

ようやく元に戻った呼吸を確認した宏は、しゃがみこんでいたあたしを立てて前に進む。李伊もぎゅっと目をつぶり、先へ進む。最後の階段を下りた。カッソカッソとビールの音。ビルの入口。

「…………え？」

階段の黒に慣れていた目には、外の黒は随分と明るかった。広がるのは赤い色だった。そこに在るのは、夜の黒に侵食され、鮮やかさを無くした赤い色だけだった。

「……………好実は何？」

李伊が三人共通の疑問をまず口にした。大きな水溜まりのように溜まっているその中心にあるはずの、好実の姿が見当たらないのだ。彼女が落ちた後は少しだけしぶきが飛んでいるようで、暗くて見えにくい中でも所々に染みが見える。あたしの足にきちんと嵌まっているモノと同じ色をしていた。ハアハアとついさっき聞いた音がまた口から漏れ出すのを聞いた。息が速くなったり遅くなったりを繰り返して過ぎて肺が助けを求めているのか、胸が張り裂けそうだった。

希望は、
？

「好実もしかして…………自分で歩いて…………？」

李伊がぼそりとそんなことを言ったから、光は消えはしなかった。でも、
こんな出血で？

「佑月、好実の家分かるか？」

宏の声は大きくて、少しだけ荒かった。あたしの息と同じだ。あたしは頷いた。

続、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0482m/>

起きたまま、眠る

2011年10月7日05時55分発行